

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

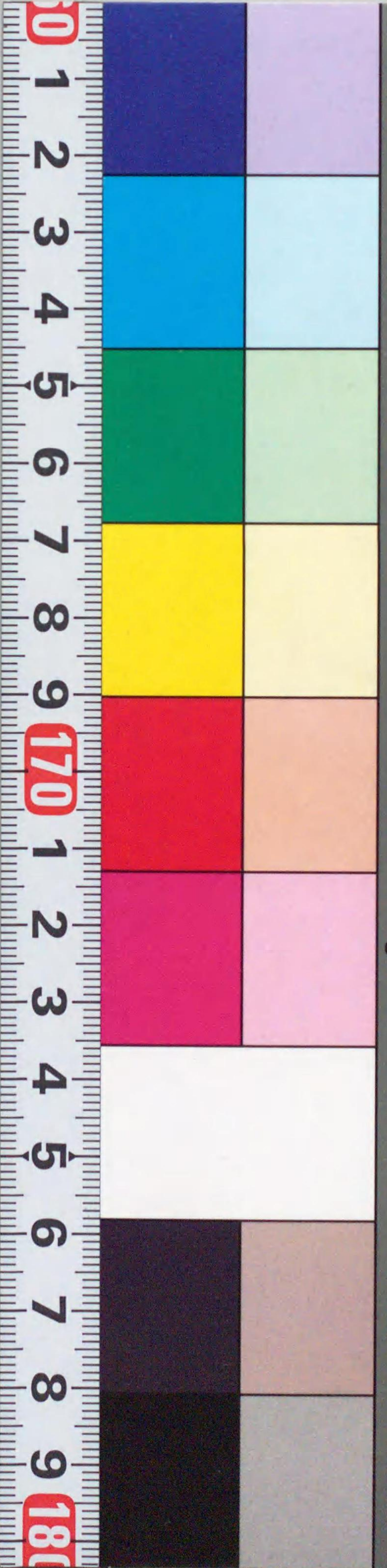


inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



210.58
1653d



19.10.9
10-49

企畫部



維新史料編纂會
文 部 省 編 纂

大日本維新史料

第二編
ノ四

文 部 省

355

大日本維新史料
第二編
ノ四

維新史料編纂會
文 部 省 編 纂

大日本維新史料

第二編
ノ 四

文 部 省

355

2/a58
I653d
II



229776

大日本維新史料 第二編ノ四

目次

安政元年

二月

- 十一日 海防掛井戸弘道・同堀織部・同永井岩之丞・同岩瀬修理、幕府ノ諮問ニ對
へ、米國トノ應接不調ニ終ルモ努メテ穩便ニ措置スベキヲ稟ス。……………一
- 同日 米使應接掛林輝等、米使「ペリー」ノ請ヲ容レ、病歿水夫「ロバート・ウキ
リアムズ」ヲ增徳院横濱ニ葬ラシム。後、下田玉泉寺ニ改葬ス。……………三
- 十二日 是ヨリ先二月朔日 福井藩主松平慶永、米國ニ對スル措置ニ就キ、老中阿部
正弘ニ警告スル所アリ。既ニシテ、横濱應接ノ開始ヲ聞クヤ、鳥取藩主
池田慶徳・徳島藩主蜂須賀齊裕・熊本藩主細川齊護等ノ同意ヲ求メ、是
日、正弘ヲ訪ヒ、通信交易拒絶ノ幕議ヲ確立センコトヲ説キ、明日、マタ
名古屋藩主徳川慶恕ニ書ヲ寄セテ、老中松平忠優ニ勸説センコトヲ促

目次 安政元年二月

ス。此間、水戸藩士藤田誠之進・福井藩士鈴木主税・同中根鞆負・熊本藩家老長岡監物等、斡旋最モ努ム。……………三六

同日 富山藩主前田利友、卒ス前年十二月二十日。是日、養子主計、家督ヲ承ク。……………八三

十三日 外警ニ因リ、重ネテ近畿警備ノ狀ヲ幕府ニ問フ。……………八九

同日 米國使節「ペリー」、書ヲ應接掛林緯等ニ致シ、修好通商條約ノ締結ヲ促ス。緯等、書ヲ復シテ十七日 漂民撫恤・缺乏品供給ノ外、其要求ニ應ジ難キヲ告グ、之ニ關スル條約草案ヲ示ス。……………九九

十五日 仙臺藩主伊達慶邦・岡山藩主池田慶政、參府ニ依リ、佐野藩主堀田正衡・小田原藩主大久保忠愨・荻野山中藩主大久保敏義・多古藩主久松勝行・牛久藩主山口弘敞・吹上藩主有馬氏郁、就封ニ依リ、大坂定番田沼意尊、赴任ニ依リ、各登城ス。……………一二〇

同日 幕府、勘定吟味役竹内清太郎・同松井助左衛門ニ松前蝦夷地用掛江戸取扱ヲ命ズ。……………一四九

同日 米國使節「ペリー」、「マセドニアン」艦長「アボット」・艦隊參謀長「アダムス」等ヲ横濱應接所ニ遣シ、其齋ラス所ノ方物ヲ應接掛林緯等ニ贈ラシム。……………一五〇

同日 前水戸藩主徳川齊昭、石川島江建艦ノ狀ヲ視察ス。……………二九八

十六日 京都所司代脇坂安宅、京都守衛ニ關スル伏見奉行内藤正繩・京都町奉行淺野長祚・同岡部豊常等ノ意見書ヲ幕府ニ呈ス。……………三〇〇

同日 米國軍艦「サスクエハナ」搭乗ノ法教師「ビッチンガー」、陸路神奈川ヨリ川崎武藏國橋本郡ニ至リ、附近ヲ徘徊シ、沿道爲ニ騷擾ス。浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛・徒目付平山謙二郎等、之ヲ追躡シ、乗艦ニ送還ス。……………三五五

是日、米人二名、又路ヲ失シ、明石藩警備ノ根岸ヨリ鳥取藩警備ノ本郷間ヲ彷徨ス。……………三九一

十八日 大將軍宣下御禮使松平頼胤・同副使由良貞靖、京都ヨリ歸府、是日、登城ス。……………四〇一

十九日 米使應接掛林緯等、再ビ米使「ペリー」ト横濱應接所ニ會シ、缺乏品供給ノ爲ニ長崎港ヲ開カントヲ提議ス。「ペリー」、神奈川外數港ノ開放ヲ要ム。緯等、神奈川ヲ拒否シ、下田港ヲ以テ之ニ代ヘンコトヲ提議ス。……………四〇七

二十日 浦賀奉行伊澤政義、米艦二艘近日下田ニ廻航スベキヲ警備諸藩ニ達ス。……………四七六

二十一日、浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛等、下田出張ノ途ニ就ク。…………… 四七九

同日 前水戸藩主徳川齊昭、下田開港ノ議アルヲ憂ヒ、覆議ヲ幕府ニ建言ス。
明日、齊昭、米使應接掛林緯・同井戸覺弘ノ歸府セルト營中ニ會シ、重ネ
テ前説ヲ提議ス。…………… 四八三

二十一日 京都所司代脇坂安宅、朝廷及幕府ニ候シテ、其支配組與力・同心并家臣
ノ調練及鐵炮四季稽古ノ許可ヲ得シ旨ヲ京都町奉行ニ達ス。…………… 五〇二

同日 龜田藩主岩城隆喜、卒ス前年十二月十六日 是日、嗣子隆永、後ヲ承ク。…………… 五〇四

同日 松代藩士佐久間修理、下田開港ノ議ヲ聞キ、目付堀織部・福井藩士中根
靱負及水戸藩士藤田誠之進ヲ歴訪シテ、其不可ヲ論ジ、横濱開港ノ可ナ
ル所以ヲ説ク。…………… 五〇九

同日 米國運送船「サップライ」、上海清國ヨリ神奈川沖ニ來航ス。…………… 五一八

二十二日 勅シテ、神宮以下二十二社及伊雜宮以下十一社ニ外患ヲ祈禳セシム。…………… 五四三

同日 米使應接掛林緯・同井戸覺弘、登營シ、老中及前水戸藩主徳川齊昭等ト
會議ス。乃チ下田開港ニ決シ、明日、緯等、神奈川ニ赴ク。…………… 五八五

同日 是ヨリ先、幕府、米艦渡來ノ事アルヲ以テ、露使應接掛筒井政憲・同川路

聖謨等ニ歸府ヲ早メンコトヲ促ス。是日、聖謨、著府、直ニ登營ス。明
日、政憲等、亦著府ス。…………… 五九八

同日 幕府、江戸近海警備ノ熊本・萩・鳥取・岡山四藩ニ令シテ、大船ノ製造ヲ
促シ、柳河藩ニ洋式端艇ノ製造ヲ命ズ。…………… 六二七

同日 江戸市街火アリ日二十 町奉行、更ニ令シテ警戒ヲ嚴ニセシム。…………… 六三〇

同日 米國軍艦「サザムプトン」同「ブンダリア」、下田港檢分ノ爲、神奈川沖
ヲ發ス。…………… 六三七

二十三日 幕府、盛岡藩領民紛擾ノ事ヲ糺シ、前藩主南部利濟ヲ江戸ニ召シテ其下
屋敷ニ謹慎セシメ、藩主南部利剛ニ弊政改革ヲ命ズ。…………… 六四八

(目次終)

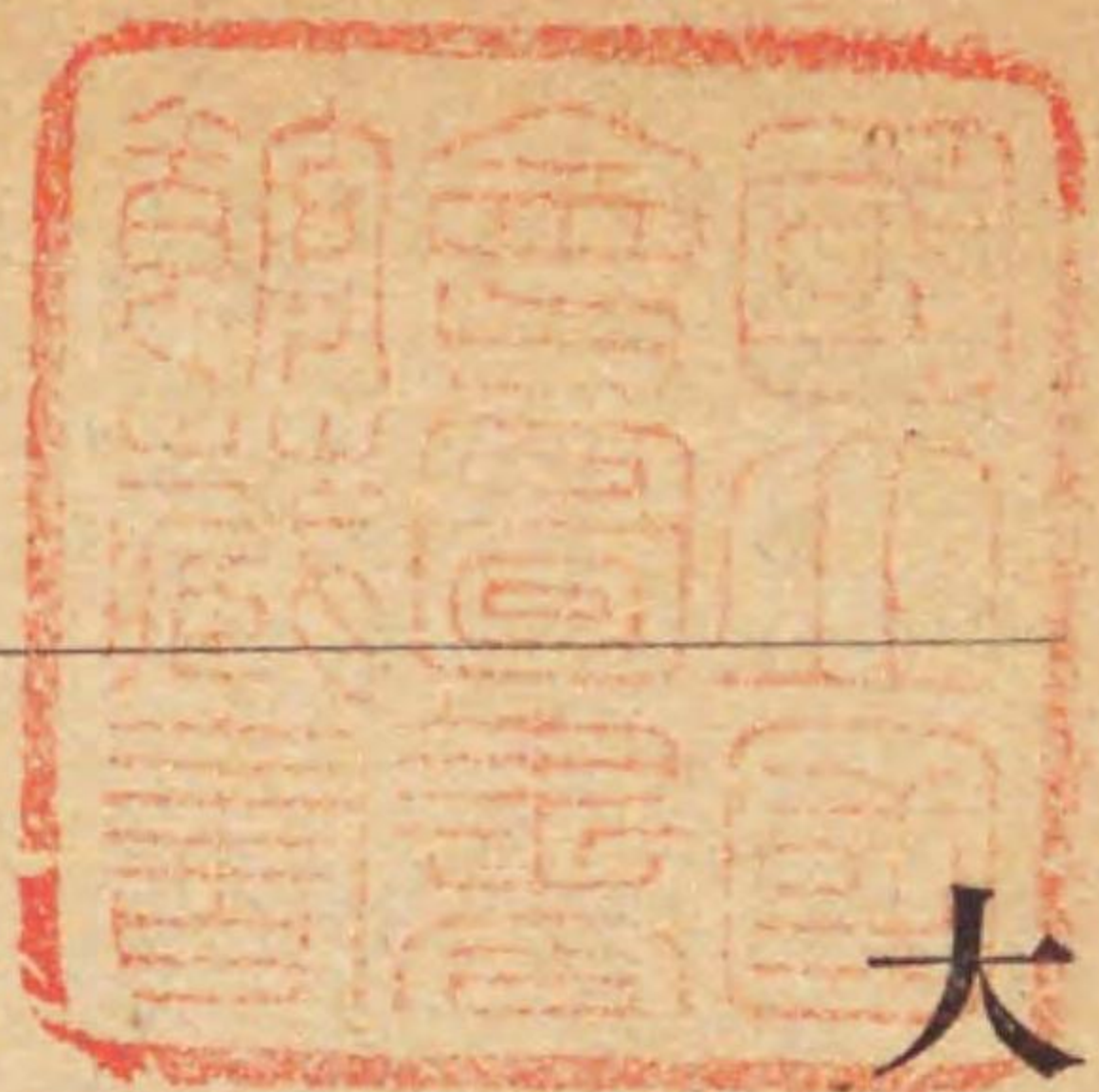
大日本維新史料 第二編ノ四

安政元年甲寅

紀元二五十四年
西曆一八五四年

十一月二十七日
安政ト改元

二月 大盡
朔庚午



十一日

庚辰

海防掛井戸弘道

石見守
大目付

・同堀織部

利忠
部正

・同永井岩之丞

尙志
後

玄蕃頭
目付

・同岩瀬修理

忠震
賀守

幕府ノ諮問ニ對ヘ、米國トノ應接不調ニ終

ルモ努メテ穩便ニ措置スベキヲ稟ス。

〔海防掛大目付井戸弘道等上申書〕

○公傳徳川閣所藏本
豆州下田港亞墨利加船所藏

○二月老中へ

嘉永七甲寅二月十一日、寫、

安政元年二月十一日

井戸石見守
堀織部

安政元年二月十一日

二

永井岩之丞
岩瀬修理

老中達

彼ヨリハ容
易ニ開戦セ
ズ
我ヲ挑發セ
ン

上意ニ從ヒ
動搖スベカ
ラズ

俄武備ハ却
テ拙策

萬一應接不調時、一時品川海上に異船數艘乗入、彼之願望を遂げ度意なる、兵威を示し候事、豫覺悟無之候る、其節陸上而已之御備なる、差向驛場の燒玉達候憂有之候に付、火急に御充備相成候様御ケ條之趣評議仕可申上旨、奉得其意、熟考討論仕候處、應接方不行届候節、品川澳に乘入兵威を示し候とも、彼等事を破り候る去名義に拘り、積年之情願空敷罷成候儀に付、容易に兵端を開き候儀去有之間敷哉、只々暴慢無禮之所業を破り、忿を爲發、此方より事を破り候様計策を施し可申哉も難計候へとも、彼等釣出され候ると勝利何とも無覺束、假令武備御充實に相整不申候共、不意に攻撃仕候方去勝算有之候得とも、先般被仰出候

平穩ノ姿ヲ
示スベシ

迄をも見透され候様罷成可申哉に付、聊頓着不致、平穩之姿を示し候方、如何様之陰計可有之哉と疑念を發シ、容易に發砲等仕間敷哉、尤細川越中守・松平大膳大夫兩手の小舟并に水手等御渡有之、貫目以上之鐵砲据附、船備爲致候義去、尤可然哉に奉存候間、速に御手配被爲在、其餘御ケ條之趣去、御見合罷成候方哉と奉存候、私共評議仕候趣、書面之通に御座候、依之御書取返上仕、此段申上候、以上、

二月

井戸石見守
堀織部
永井岩之丞
岩瀬修理

○本書提出ノ日時ハ、傍證ナクシテ確定スルヲ得ズ。依テ今暫ク本書謄寫ノ日ニ、綱文ヲ繋グ。

米使應接掛林輝等、米使「ペリー」M. C. Perry ノ請ヲ容レ、病歿水夫「ロバート・ウキリアムズ」Robert Williams ヲ増徳院横濱ニ葬ラシム。
後、下田玉泉寺ニ改葬ス。

〔米使應接掛林輝等届書〕

○公爵徳川閣下所藏本
豆州下田港亞墨利加船所藏

安政元年二月十一日

三

安政元年二月十一日

○二月十二日老中へ

異人病死之者埋葬爲仕候儀申上候書付

林 (幕 備役) 大學頭

井 戸 (幕 取、町奉行) 對馬守

伊 澤 (政 務、浦賀奉行) 美作守

鶉 殿 (長 崎、目付) 民部少輔

松 崎 (細 儀、備者) 滿太郎

病歿米人埋
葬ノ件

一昨十日申上候書面之内、病死異人之儀之士卒ニ有、名ロベルト○ウイルレムス、年二十四歳、生國イルランド之由、右兩三日以前より頭痛病ニ有死去仕候趣ニ御座候、則昨十一日埋葬爲仕候ニ付、應接組與力并立合御徒目付中臺信太郎・御小人目付、通詞名村五八郎召連、本船へ罷越、兼申上置候通、横濱村へ上陸、同村眞言宗増徳院に埋葬爲仕候、依之此段御届申上候、以上、

寅二月十二日

林 大 學 頭

井 戸 對 馬 守

伊 澤 美 作 守

鶉 殿 民 部 少 輔

松 崎 滿 太 郎

〔菲山代官兼海防掛江川太郎左衛門上申書〕

○公爵徳川團順所藏本
豆州下田港亞墨利加船所載

○二月勘定奉行へ

亞墨利加國人葬式之次第御尋ニ付尙又申上候書付

江川太郎左衛門

亞墨利加國人葬式之次第御尋ニ付、手付中濱萬次郎承糺候趣(次ニ收ル)一ト通申上置候處、船中ニ有相果候節、軍艦ニ候得去、船印之旗を逆ニ半卷上ケ、出棺前ニ砲發いとし、其上上座之ものを去笛太鼓ニ有葬送いとし候由、右去萬次郎義右様之儀去心ニ留居不申、旁篤与勘考、尙又前書之次第存出候旨申出候儀ニ御坐候、依之此段申上候、以上、

二 月

江川太郎左衛門印

御 勘 定 所

亞墨利加國人葬式之次第御尋ニ付申上候書付

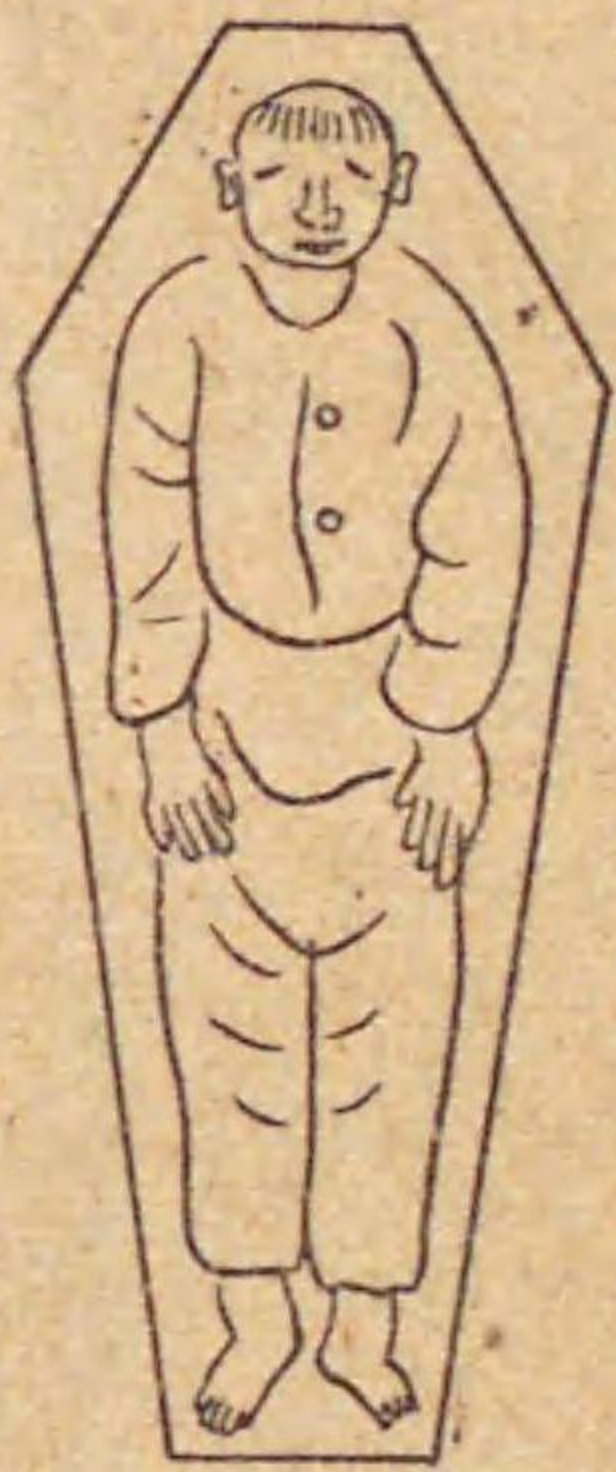
安政元年二月十一日

安政元年二月十一日

江川太郎左衛門

病歿米人埋
葬ノ次第

亞墨利加國人葬式之次第御尋ニ付、手附中濱萬次郎承糺候處、如圖形ニ棺補理、右ニ仰



向ニ入、蓋打付不申以前四輪車ニ載、馬ニ爲挽、菩提寺ニ參り候得去、早速住寺罷出、死人之名前歲付并存生中之行跡、又去其死去之次第等巨細ニ認、葬送ニ參り候身寄其外之ものを右住寺爲讀聞、拜禮いゝ一度ものハ夫々相拜し、畢る蓋打付、元之如く四輪車ニ爲載、葬穴所ニ參り埋候上、石ニ名前歲年數月日等彫付候事之由、若又船中ニおゐる死去いゝ候節去、上官之者ハ硝子ニ棺補理、燒酎を入、右ニ相詰、本國又去隣國交易所等ニ參り葬候儀も有之、下官之ものハ洋中ニ候得去、帆ニ包海中ニ投し候儀有之、國地船掛之節去、前書之通棺ニ入、土葬ニ取置候由、右去日本之如く七々四十九日之佛事并年忌追善供養之作法去無之、乍去、銘々之存寄を以墓參掃除等いゝ候儀去、勝手次第之由ニ御坐候、
右御尋ニ付申上候、以上、

寅二月

江川太郎左衛門印

御勘定所

〔江戸町名主上申書〕

○帝國圖書館所藏本
徳川幕府書類外國事件書所載

○二月十三日町奉行へ

〔表紙上〕

一昨十一日晝九時頃、異人葬式有之、余程上官之異人之由、寐竈ニ在、異船小船ニ乗セ、異人凡貳三拾人爲見送乗組、右人數之内ニ穴掘并送僧も參り候由、去ル十日、應接有之候横濱東之方陸地之内ニ葬候、仮石碑相建候、右ニ付、御徒目付様御壹人、御小人目付様御兩人、浦賀與力衆同心衆、并御向様御出役様方も御立合御座候趣、右ニ神奈川見張船之者とも及承候段、魚船問屋共ニ狀通を以申越候間、此段奉申上候、以上、

寅二月十三日

名主共

〔米使應接掛町奉行支配組與力〕

浦賀御用日記

○帝國圖書館所藏本
徳川幕府書類外國事件書所載

二月十二日、曇、○中略、

一異人之内壹人病死いゝ候處、彼國士分之者ニ候得と、本國ニ遺骸護送いゝ候得共、士以下之ものをニ付、當所ニ埋葬いゝ度、可相成と夏島ニ埋度旨、彼方ニ申立候處、右ニ

安政元年二月十一日

七

病歿米人ハ
上官トノ噂

病歿米人ハ
士分以下

安政元年二月十一日

一〇

筒先を向ケ打候、夫々音楽を聊か奏ふ一候、尤増徳院方も住僧罷出回向致候由、無間々異人共音楽ニ一統行列正敷、如元引取申候、

〔但、右異人 公邊か長崎之地ニ埋葬いゝ候様被申渡候へ共、異人共横濱に埋葬之儀精々相願候付、本文之通相成候由、尤右御趣意故歟、五月十九日豆州下田湊ニ改葬被申付候、〕

〔松代藩亞墨利加人御警衛一件〕

○伯爵眞田幸治所藏本

二月十一日、快晴、

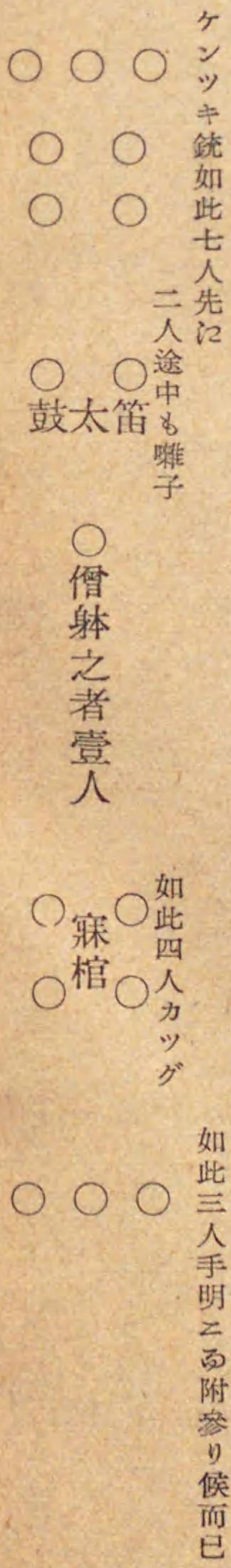
馬場彌三郎

一神奈川沖碓泊之亞墨利加船ニおゐて、異人壹人、當六日頃死去之由ニ、増徳院境内に葬度旨願出、御聞濟ニ相成、今日晝時、異人五人彼國之鋤鍬等持參、同所山手に穴穿り申候、尤與力三人并村役人等差添罷越、村人足も手傳、穴穿申候、

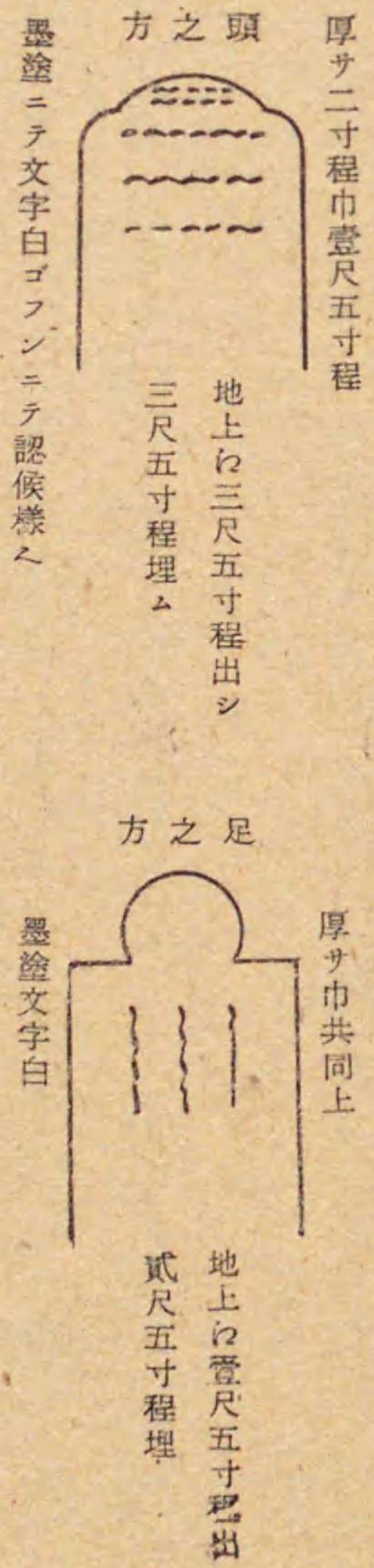
但、場所ハ増徳院境内南山手ニ有之候、

一穴等穿上ケ候も、無程左之行列ニ出葬、

葬送ノ光景



右之如く行列ニる場所の持參、直ニ穴に納め、僧鉢之者書物持參讀之、銃卒去下知ニ隨て一同ニ發炮ス、尤空炮ニる三度同發シ、而後埋之候上、頭之方足之方兩方ハ左之形之墓様之の建置申候、



一右之節、増徳院湯場所の出席、机に香杯焼、始終誦經致一居候、

右去、今日、本陣の御用筋有之罷出居候折柄出葬いゝ候儀ニ付、御用透を以見置申候、

一今夜九時前、應接場の御留守居壹人御呼出之所、津田轉儀去神奈川宿に罷越居候付、時

助ニる石倉藤右衛門罷出候所、浦賀與力郷原操藏申聞候趣去、今晝増徳院境内に亞墨利

加人死骸葬送之上、繩張等致一、村人足張番いゝ居候所、右墓所の因州侯御固人數之

内ニるも有之候哉、山越ニる本牧邊か侍鉢之の五六人罷越、繩張か内ハ踏入候付、村

番之者相制候得共、更ニ不相用、狼藉ニおよび、且文字等も寫一取罷歸候者、二タたても

有之段訴出候所、何分夜中、早速御手も行届兼候付、御人數之内ニる、今夜限り張番心得

安政元年二月十一日

一一

侍鉢ノ者狼藉ニ及ブ

安政元年二月十一日

一一

吳、右躰不埒之もの無之様致一度旨申聞候段、藤右衛門罷歸、武者奉行に申立候付、早速陣場奉行に申談取計候様被仰渡、夫々申談、直ニ本陣庭に高張挑灯壹張出置、左之通、弓張提灯持參出役申渡、

下目付

北嶋久太夫

齋藤留治

下座見

大久保彌三郎

御足輕兩人

右之通、陣場奉行白井平左衛門一同申談出役爲致候處、早々右廻り候、竹矢來等出來之上、引取吳候るも宜趣、與力が相違候付、何れも引取候旨、且出役中別條無之段、下目付夜八半時罷歸申聞之、

〔横濱村増徳院・同村名主徳右衛門届書〕

○有所不爲
齋雜錄所載

○二月十一日寶生寺へ

嘉永七年寅二月、

以書付御届奉申上候

米人埋葬

今般渡來之亞墨利加人之内、病死之者壹人御座候付、御國地の埋葬仕度旨、浦賀奉行伊澤美作守殿に願出候付、御目付鶴殿民部少輔殿御立合、御聞届ニ相成候間、村内寺院墓地に埋遣可申旨、昨日拙寺並村役人の被仰付、墓地御見分ニる、猶又今十一日亞墨利加人上陸いたし、墓地見届之上、埋遣可申旨、被仰付候間、右之通取計仕候、此段奉申上候、以上、

横濱村

増 徳 院

名主

徳 右 衛 門

寶生寺届書

拙寺末同院并村役人共々、前書之趣届出候付、届之趣聞濟遣候間、此段御届奉申上候、以上、
嘉永七年寅二月

武州久良岐郡石川
寶 生 寺

（芝）本横濱州高野山學侶在番
南 御 在 番 所

〔高麗環雜記〕

○東京帝國
大學所藏本

一異國人共之内、壹人病死有之、二月十一日九半時過、香山榮左衛門乗組候應接船に異人四人乗組、横濱村に上陸、前日此方ニる繩張以多し置候同村増徳院境内に右四人之異人共、深サ凡八尺程、巾二尺七八寸、長壹間余穴堀置、海岸に罷出候處、病死人積來候ハツテイラ壹艘着船以多し、行列ニる穴堀候處に參り、ゲウエール組二側ニ備候る、棺之前

安政元年二月十一日

一三

安政元年二月十一日

ニ扣居、僧体之者棺之向に廻り、暫時經文様之事唱、右終る水夫四人ニ棺之下に繩を二筋掛ケ釣下ケ、繩を引去り左右に開き、夫々ゲウエール組に介添之者差圖いと、玉藥込一拍子ニ三度ツ、爲打、都合十八發打、終る穴を埋め、向テ左之方に地上高サ四尺、巾壹尺、厚二寸、右之方に地上高サ壹尺、巾厚前同斷、杉之木之様成板墨塗といと、白ク蘭字様之字數多記し、小之方に四字記し、右板置引取申候、

右場所の立會

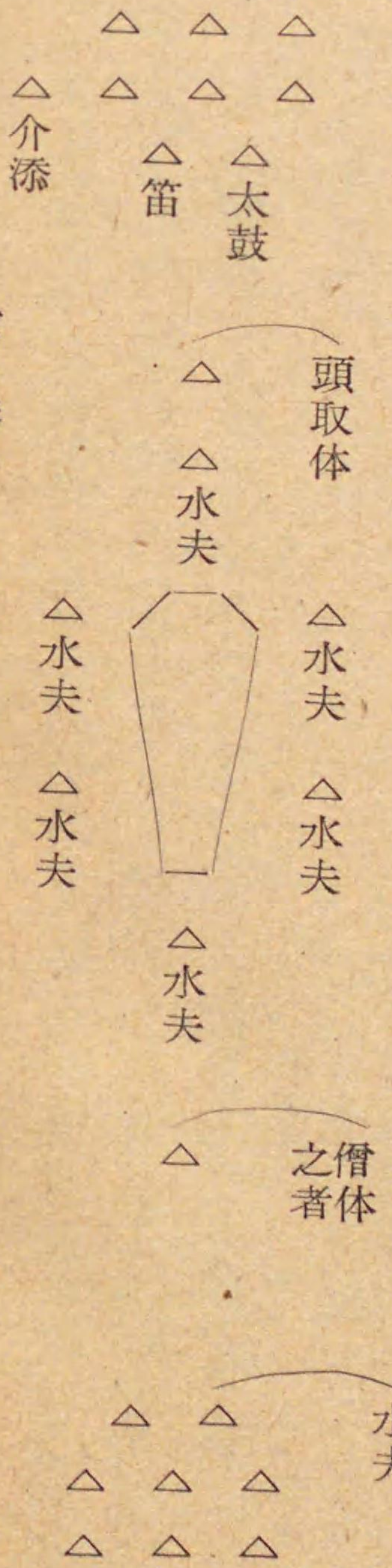
浦賀應接掛り見習

與力

合原猪三郎

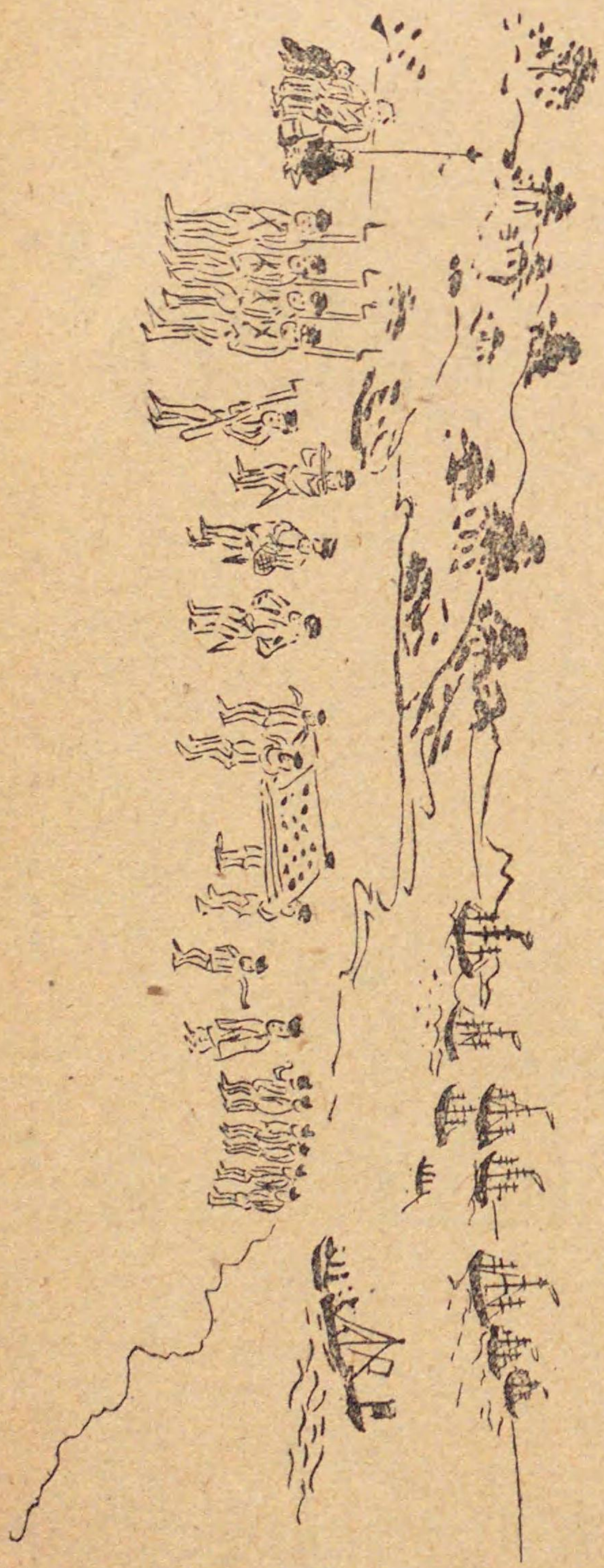
行列

鐵炮組六人

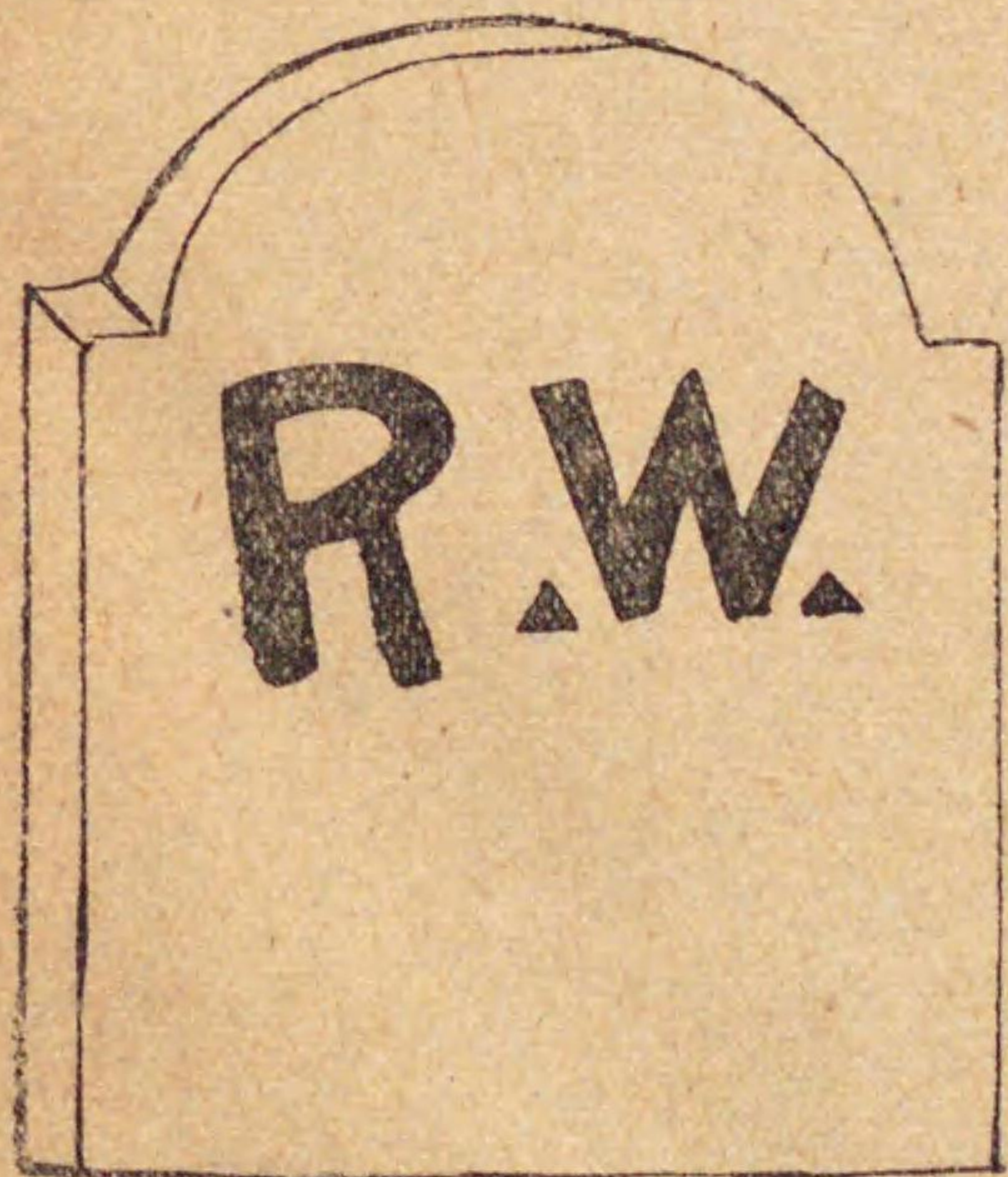
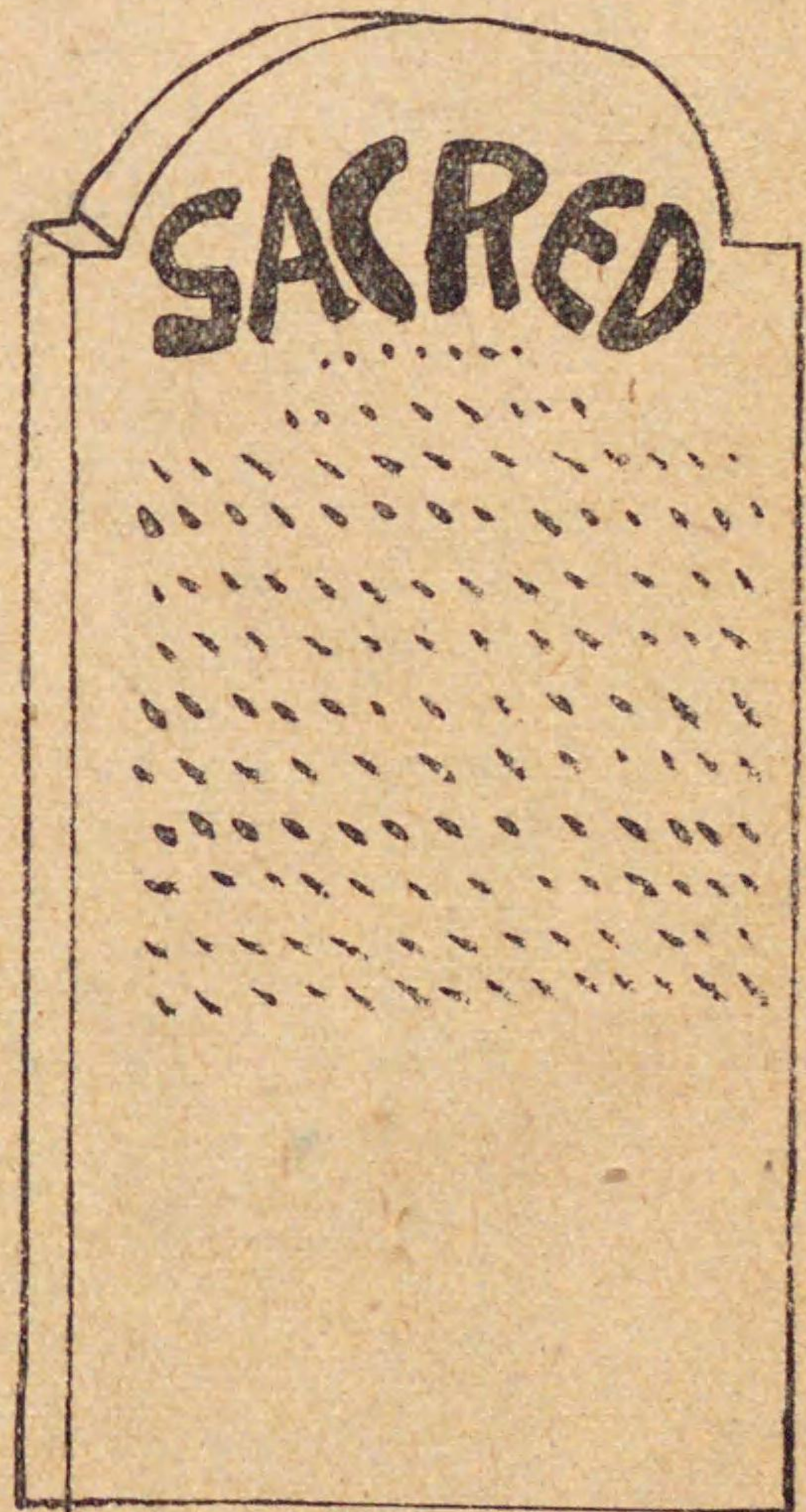


棺ニ棒あしつゝを以て荷ふ

安政元年二月十一日



此死に人の中を一人厚くす



Handwritten vertical text next to the 'R.W.' box, possibly a signature or date.

〔海禁雜記〕

○内閣文庫所蔵本
通船一覽續編所載

一二月十一日、異船之内ニるヲランタ國より雇乗組來候士分之もの壹人病死いたし候を、日本國地の葬度旨相願、浦賀奉行衆聞濟、右横濱村古義真言宗増徳院持墓之續野地之所に爲埋候節、

立會

御徒目付 壹人

御小人目付 壹人

浦賀與力 二人

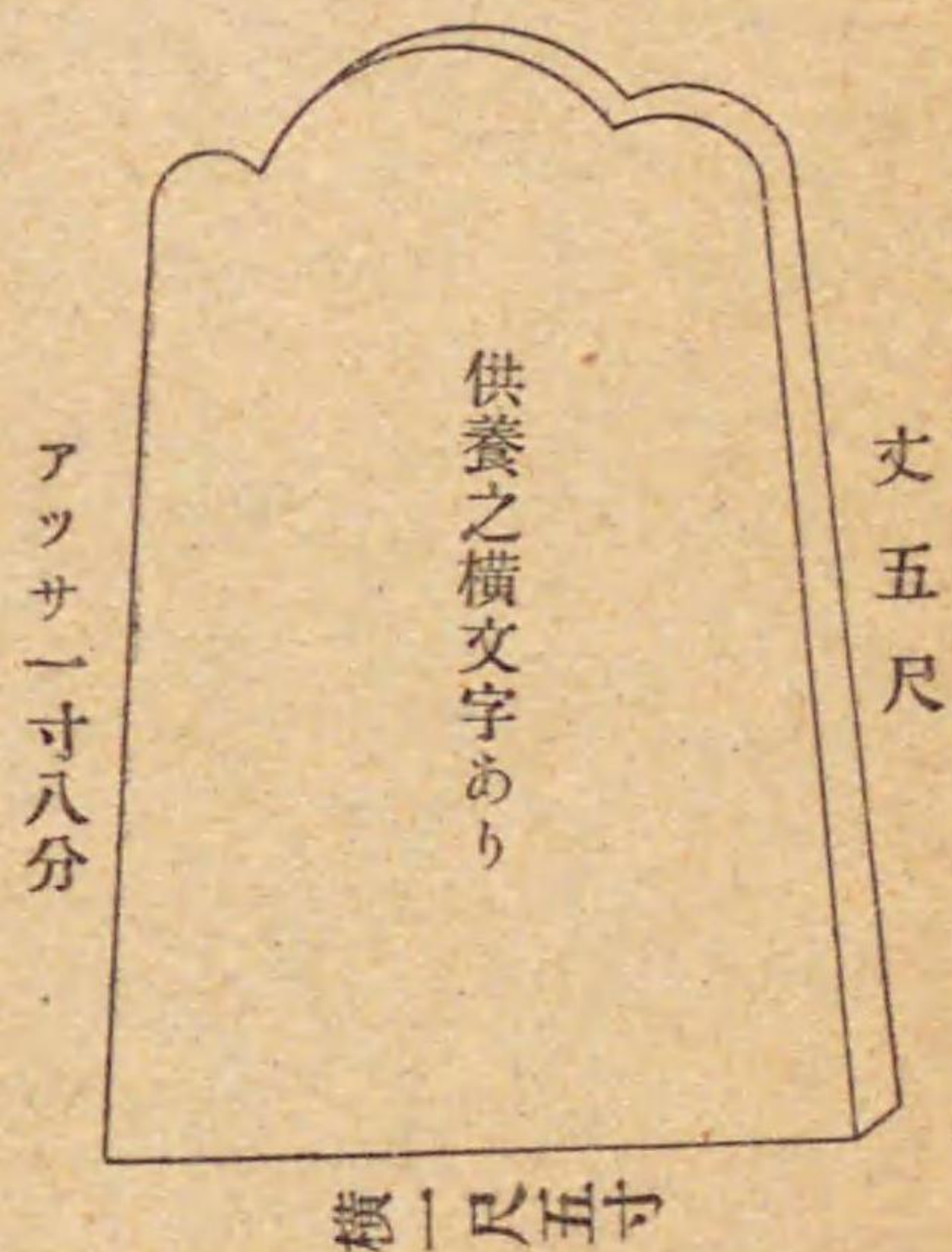
同 同心 壹人

支配御代官役所出役 一人

一赤松板厚壹寸位、長六尺、巾深共壹尺五寸位之箱ニ入、四人にて荷ひ、ハツテイラより上陸、見届後、士分之異人壹人坊主ニハ無之候得共、和尚躰之異人壹人、肩よりひだ有之衣様之品着候もの壹人、下官拾四五人送來ル、篤と埋候て上土搔平均候て、七人にて劍付鏡砲を向、三放ツ、死人之上に空砲打掛、和尚躰之ものハ經文様之本取出し、暫讀、終る退船致候事、

一此死人ゼ子マルカの人のよし、

地黒
字白



〔亞墨理駕渡來日記〕

○公爵徳川 願所藏本

二月十日、○中略右應接有之候其夜之風聞、異人壹人病死之由、下官（云々）候得共水葬可仕候得共、上官之内海軍指磨ノ役人ニ有之候間、御指圖ニ隨ひ地所申受、埋葬仕度由願ニ付、當村之内、海龍山増徳院山内未申之方、葬地御免許有之候、

米人ノ葬式

十一日、異人葬式行列之先（異人名）アハタムス壹人、鐵砲方二人、次ニ三人、次ニ二人、鐵砲都合七人、塔婆持二人、棺持四人、同手代り者拾人、塔婆ト鐵砲ト之間ニ太鼓壹人・横笛壹人、樂調、道之案内合原様・齋藤様御兩人之、異人小舟三艘ニ上陸ス、尤異人頭達あるアハタムス十得衣之如き羽織着用之、導師焼香之心持ニて懷中カ經を出し讀誦之、鐵砲方葬穴（云々）向ひ候て空砲數聲、初メ穴堀カ埋む迄不殘異人仕候、塔婆二本頭之方ト足ノ方ニ立候、文字

ハ蘭字ニて記一有之、別ニ記之、棺ハ（蘭字）淺黄ノ打敷掛ケ持參り候、十二日、異國船碇泊已來應接迄、異人葬式等追々道路之風説種々有之、見物之者群集い（云々）候間、横濱近邊無用之者往來御差留ニあり、後々ニハ神奈川宿の臺、又ハ生麥村之松原邊、江戸ハ勿論十里二十里の遠路カ參り候ニ付、御觸左之通り、

今般異國船渡來願之筋有之、神奈川沖ニ碇泊致一有之候付、見物ケ間敷者も有之趣聞候、已來見物ハ勿論、彼方角要用有之候者も、遠慮可致候、

○中略

先達る二月十一日ニ葬禮ノ異人ノ塔婆ニも三月六日トアリ、是ハ正月三日午甫ノ湊出帆ノ時分、大洋中ニて死ス、右死骸ヲ持來り、日本ニて二月十日應接濟之上ニて病死之由願出ル、右ノ付、塔婆ノ銘（云々）海軍隊ノ役人ス、スミスツビノ遺骸ヲ埋所ノシルシ、日本ノ江戸ニて千八百五十四年三月六日卒、歳二十四（トアリ、日を日本トハ、二日計違イアリ、少し間違アリ、改めて記之、）

〔亞墨理駕船渡來日記〕

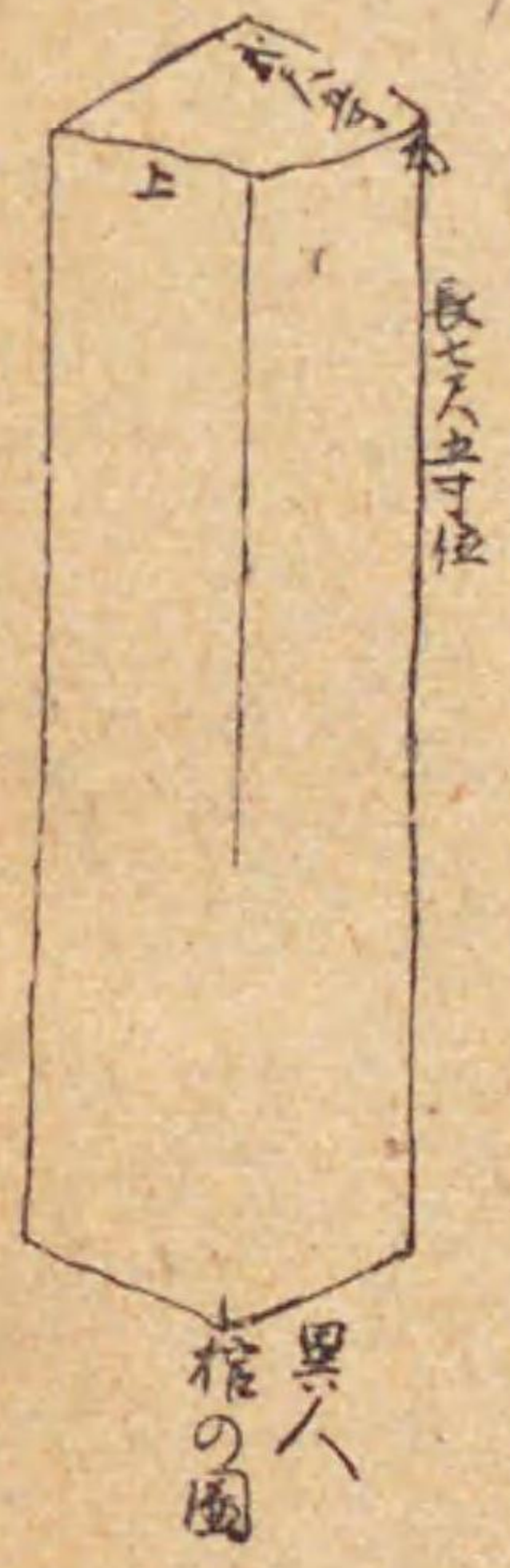
二月十一日、黒船中病死の者有之候ニ付、願濟之上ニテ、今日葬式有之候、其次第左之通り、小船三艘ニ而、横濱村字矢戸ト申處エ舟を着け、鐵砲方・樂人舟カ出候得は、陸地ニ而はやし初候、舟中ニ而棺をかき揚る、追々異人上陸ス、一番鐵砲二人、次ニ三人、次ニ貳人、

葬式ノ次第

安政元年二月十一日

二〇

都合鐵炮七挺、次ニ笛壹人、太鼓壹人、搭婆持貳人、僧ニ似たる衣を着此人上等ナリ、三月十日、初テ知ルス異人壹人、次ニ棺持四人、手傳拾人、都合貳拾五人、路次の案内として浦賀與力合原操藏、異人不殘上陸いたし、道々もはやし仕參り候處、眞田侯御馬屋の近邊通り候時、聞馴見馴不仕異人異形の出立、且笛太鼓の音ニ驚、數十疋の馬一度ニ跳蹴ハネヲドリ躍、大騒動仕候、夫々葬所へ參り、磁石ヲ以方位ヲ窺イ、首ヲ丑寅の方えいたし、半分程埋ミ候時、鐵炮方の内壹人、一聲ハアト申シ手を上げ候得は、六挺の鐵炮一度ニ穴の中エ打放ス事三廻也、但シ玉火薬込返しなしニ三度出ス、尤火繩ハ不用、ドンドロス、右鐵炮の音、六挺の筒響一度ニして少も遅速無之候、希代ニ能ク調練ス、扱埋ミ候前ニ、右僧衣の異人祭文を唱エ申候、當村増徳院上人も、寺内同様の場所ニ付、立合諷經致遣れ候、右之上人、異人の只今讀ミ候品、何の譯合記し有之候祭文かと、鳥渡借用いたし御覽有候所、極々細字ニテ分不申、異人心付、自分の目鏡を上人えかけ進め申候、葬式相濟歸る路々、前の通りニはやし仕候、尤眞田侯御馬屋處ハはやし休、行過了後ニ又々はやし仕候、其後、右葬式の時讀候祭文の小本、海邊ニテ小兒ヒロイ候を見ルニ、蘭字極々細字ニ而、一通之目鏡ニ而は分り不申候、



墓碑

唐艸の淺黄色の打敷ニ包ム。首の方少々高く致し埋ミ申候、此異人本國の方へ首をさし埋と承る、首の方と足の方ニ搭婆を立申候、黒ぬりの板ニ白の蘭字、右搭婆の圖、左ニ記之、

足碑

解役 フルイフエテエ 官名
 軍艦ニ此ノ地ノ海岸ノ出帆シ日本ニ渡ル 地名
 紀原千八百五十四年三月六日 船乗
 二十歳 横中を人
 卒ス

SACRED
 TO THE
 MEMORY OF
 ROBERT WILLIAMS
 PRIVATE MARINE CORPS
 WHO DEPARTED HIS LIFE
 ON BOARD USS MISSISSIPPI
 FEBRUARY JAN
 MARCH 1854
 AGE 24 YEARS

黒人首方立
 黒地白字

R.M.W.

黒人足
 ノ方立
 黒白字

直外久良波郡横濱村海部山増徳院寺書宗
 墳外山下ニアル異人塔婆の銘

安政元年二月十一日

二一

〔安達清風日記〕

二月十一日、晴和微暖、異船無異、終日在礮臺、
十二日、曇、異船無異、終日在礮臺、未牌異人十五輩、乘小船、大聲放歌、過礮臺之下、夜大風、
十二天村民失火、

昨未牌異人數十輩、上陸于横濱、葬死屍二人、雇寺僧數輩、爲葬式、村民輩雜集、吏呵之、不
可、一婦進視異人輩、要之將去、吏呵其婦、達于藩府、

〔合同舶入相秘記〕

○松平慶永手記
内閣文庫所藏本

二月十二日、西曆三月十日、

○中

異人死人有之ハ蘭人之由、横濱某寺へ彼ノ頼ニテ埋葬以多一遣候由、是嘆息憤悶之一也、

略、

十八日、遠西三月十六日、

○中

一簡奉拜呈候、打續烈風別る春寒相覺候得共、益御安泰被成御張陣奉敬賀候、然ハ御承知
之儀ニモ可有御坐トハ奉存候得共、承知仕候儘左ニ荒々申上候、○中

笠井某書翰

異人二人ヲ
葬ル

米人埋葬ノ
件

一昨十三日、終日神奈川邊ハツテ一ラ貳三艘ニモ測量以多一、壹艘ハ神奈川臺下迄參り
碇を卸候内、干汐ニ相成出船難成、御用船ニ手傳、漸々出船以多一罷歸候由、彼是一時
餘も右出船ニ手間取申候趣ニ御坐候、

一於船中士卒一人病死以多一候ニ付、横濱村真言宗德藏院墓所爲見分、黒川嘉兵衛殿・合
原操藏・齋藤太郎助、外ニ御代官手代一人被罷越、十一日九時頃、異人當方御船ニ上
陸、德藏院山際へ穴を掘、暫相立ハツテ一ラ貳艘ニ死骸箱ニ入、頭之者一人、導師一人、
ケヘル筒七挺七人、太鼓一人、笛一人、士卒三人、水夫拾二人上陸、笛太鼓ニ墓所迄
參り、穴之口へ直し、暫導師經文を唱埋候上、ケヘル六挺ニ空炮三發ツ、打放、引取、

一死人ハ蘭人ニ、年廿四歳、士卒之由、

一導師ハ黒絹様之物ニ、襟よりひも有之候衣を着し、下着ハ外異人之通り、

一棺杉之木之様ニ、長七尺程、

一右葬送之節、立合御徒目付壹人、御小人目付二人、香山榮左衛門・合原操藏・同心壹人、通
辭壹人、

○中

右之趣ト、全御知合せニ可相成程之事柄ニモ無御坐、只々雜事而已ニ御坐候へ共、兼る

安政元年二月十一日

二四

蒙仰罷在候儀ニ付、申上候、猶相聞候儀も御坐候ハ、其節可申上と奉存候、右之段御内々申上候間、御聞捨可被下候、早々如此ニ御坐候、以上、

二月十四日

猶以御繁用之御中、御返翰等之儀ハ堅御斷申上候、以上、

有 賀 様

笠

井

〔松宇日記〕

○水戸藩士西野宣明日記
子爵遊澤敬三所藏本

二月廿六日、陰、八時出仕、直宿、

米人ノ葬式

○中略、今日鑒察府穩密下役申出之由、亞墨利加死人、横濱村海龍山増徳寺葬云々、

其塚之形寢棺之由、頭之上ニ



如圖文字百餘數白字 足之方



如圖文字二 黒塗白字

云々、巾一尺五寸長四尺餘 足之方長一尺五寸許 其葬式埋終後、各小筒三發打畢而引云々、彼國土俗不關吉凶以

レ發ニ鐵砲ニ爲レ禮云々、尤清朝人交錯、其容體著ニ被布冠頭巾替袴以レ如佛衣佩之、善

書、其姿貌醜ニ於亞墨人一云々、色黒體短如奴僕、菓子三顆貫來之由、

○如子安貝以豚骨堅

比陰陽氣、

〔海防論及風説書〕

○薩摩藩醫館取書
公館徳川閣願所藏本

亞墨利加人詐て木偶人を葬る事

米人埋葬ニ
關スル巷説

批 朱

○神奈川前沖ふのんど滯船亞墨利加の舟子一人病死せるあり、依之家塋を借りて葬らん
夏を願ふ、應接の代官林・井此二員評議して、おれ被許は、お、おおて其下司横濱村長を
て葬地を監セしむ、即チ同村増徳院持墓地え葬らせんとは、扱葬送の日限來り、彌葬式の
時ふ至りて住僧云、宗門の掟よて亡者の面部を視て葬らしむる禮あり、棺の蓋を開て亡者
を見せらるるゑ、夷人肯て聽ば、住僧又云、左ふくバ愚僧ウ持地に埋葬する夏不相成とい
ひ争て止は、殆ともてあま、懸りの官吏住僧をふとめ、夷の旨ふ任せて無滯葬らしめ、万
端事濟て住僧つらしく思ふ、棺の蓋を披て見せしめは、如何にも不審あり、とし、夜
中密に棺をあぞき、其虚實を探るへと思惟し、住僧一人夜ふ粉を以掘穿て、棺を
開て内を見れば、怪哉、死人ふあらはして木偶人を收め、重量のため石を底敷敷き、篤与
見届埋置、如元墓標を建置されど、知る人更ニ疑し、密に其あらま、濱村吏に訴へぬ、吏即
チ縣令へ聞えとり、かくて其事實を考究するに、魯西亞船長崎ニ在て副使乃病死さへ葬ら
えめは、其餘士卒六拾餘人皆海へ投て水葬せし由、此夏を傳へ聞てアメリカ人工夫
て、彼ノ御茶壺の如く威光を見せむやと、死人ある體ふもて疑し、葬地を乞ハ、必定拒む
夏ふらん、然らむ夫を名とし、難題を言懸ケ争端を開ふんと思ひの外、應接使墮弱ニて
何心なく許容さるる故、無餘儀木偶人を安置せる事あらんと云、人形を埋し故、咒咀と云、

米人木偶人
ヲ葬ル

安政元年二月十一日

二五

調伏と云、諸説紛々たきと取る不足らば、或人云、此吏ハ昔も前證ある吏の由、何きの國取
るや其地を合せんと欲せども、士民驍勇多力、其上軍器充實して力を以責取がとく、因て
方便を廻らし、士卒の死を餌と爲して葬地を望み、年忌供養に事寄せ、近傍の住夷共へ泉
貨布帛を施行し、年々歳々施行の品を加増し、士俗の心を繋ぎ、慾情より悉く士民を懐け、
七ヶ年の間ふ干戈を用はして其地を并吞せりとそ、今其謀略を用ゆる吏あらんと、懼るべ
しと云へり、

右之趣街談巷説ふ御座候得共、風聞ニる承り候儘相認差上申候、猶虚實と追々相糺し、實
説之次第ハ追る可申上候、御序之砌可然様奉願上候、以上、

丑三月

○朱批

本文之事初て聞候節、中ニ何を入候り不分候へ共、あばき見候とて云々申事ハ不相成、
大學にて右を濟せし義以ての外と申ありきり、本文木偶人杯實説あるべし、乍然先方へ
木偶成といふ事ハ不相成ハ、木偶人ニても、又ハ犬の死あるを入あるニても、から棺ニ
ても、是非なき事也、

○朱批ハ徳川齊昭ノ自筆ニカ、ル。

米人ノ葬式

〔京都町奉行組與力〕平塚茂喬雜記

○平塚浦一所藏本

二月十一日、

一異國船中ニる病死人有之、横濱村眞言宗藏徳院々五十間計南山際墓所ハ葬穴を、尤異人
望之由、

但、眞田家上田主水陣屋へ、

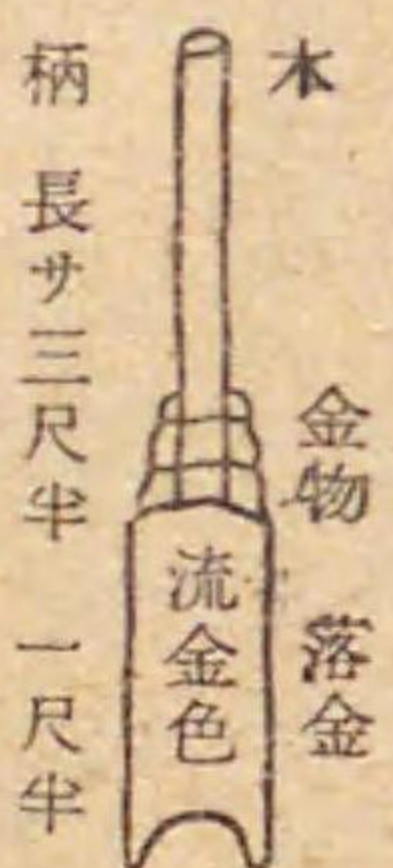
一ハツテイラ一艘、白キ船乗合十人之内七人上陸、

一浦賀與力一人、同心一人ツ、差添、

一齋藤嘉兵衛殿并手附二人召連、立合、

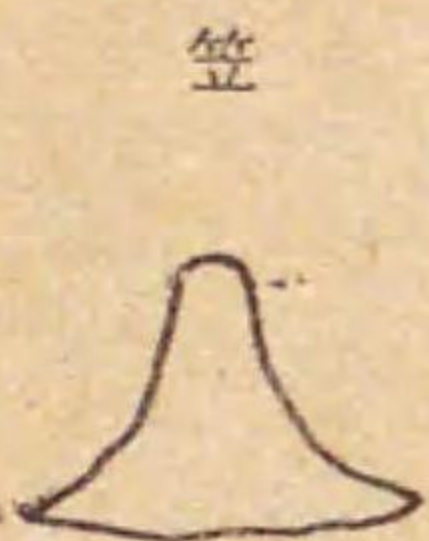
但、嘉兵衛殿・與力丸羽織野袴、余を半てん股引羽折なし、

一異人四人ニる銅様之ものを以掘、村之者五六人手傳は、



柄長サ三尺半 一尺半

形志うのうのとし、



革を以製は、色白と黒とあり、羅紗ニテ包みざる様ニ見ゆる至々和らきもの、

一着服御納戸羅紗縫くるも、肩ニ太刀かつき様のもの付、玉三ツ程付有之、帯居、革銅亂

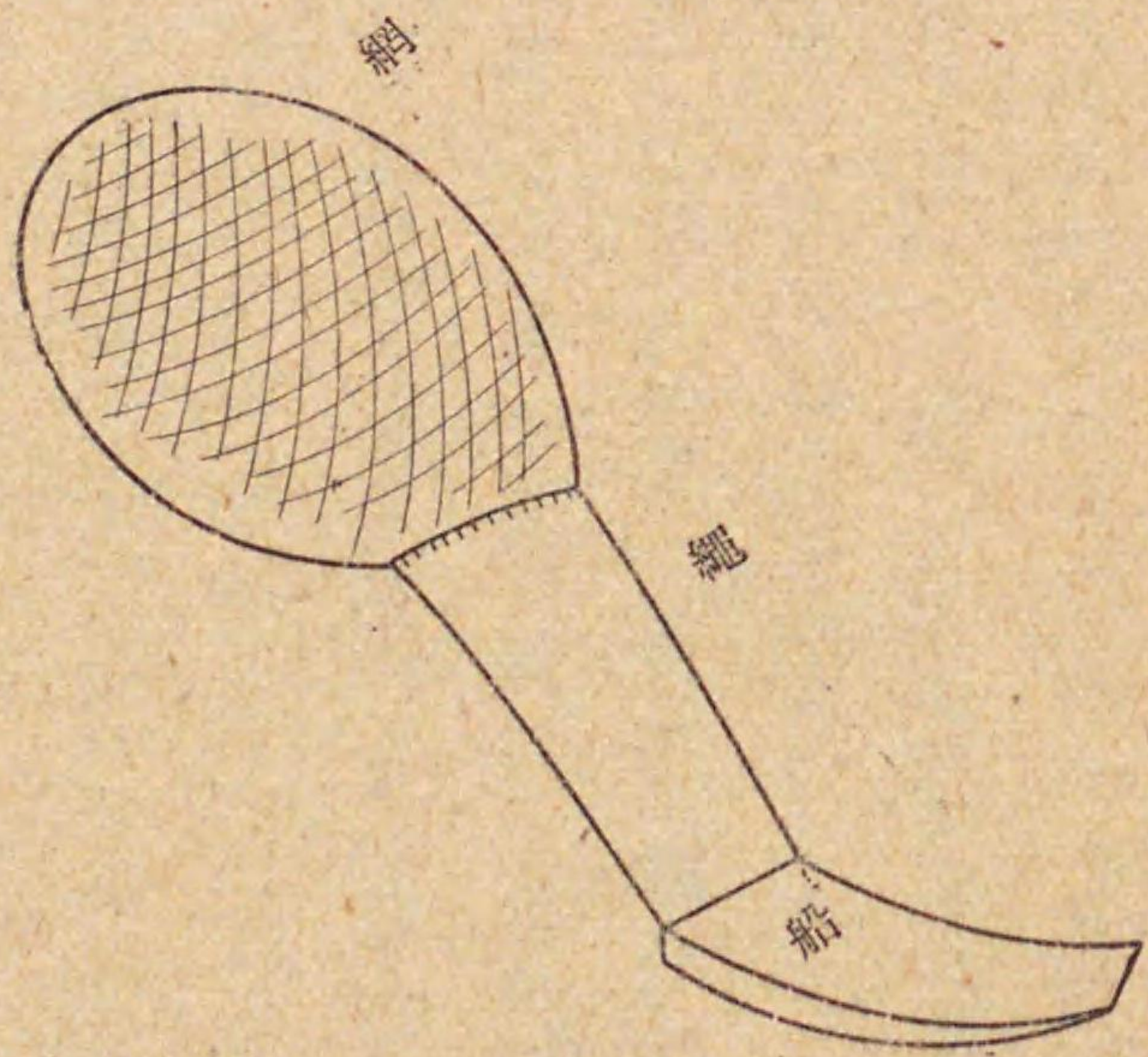
安政元年二月十一日

安政元年二月十一日

二八

- 肩よりたすニ懸る、股引青羅紗革沓、此出立一人頭分ち見ゆる、
- 一右同斷出立ニる、惣黒羅紗肩ニ何もなし、此もの一人、
- 一右同斷青色出立五人、但、内頭巾なきもの一人、
- 一與力手附等に、至そ心やすき様ニ見ゆる、
- 一手傳者働母、度々御汁又免しといふを申ス、
- 一手附差添和尙出そ、穴之側へ來默禮ス、珠數袂見せたるに、異人兩手拵合せ拜む、
- 一棺を臥棺よふよて大キシ、
- 一劔筒銘々所持ス、
- 死人弟之由ニテ大愁傷の躰ニ見ゆる、
- 一葬穴濟そ炮發ス、
- 一朝五ツ時頃より半時計、炮數發ス、但一船中、
- 一今夜例之炮聲なし、
- 十二日、
- 一朝炮聲あし、
- 一晝四半比、大小炮發五六聲、

一九ツ時比、ハツテイラニ乘十二天下へ魚獵ニ來り、むし免ヲ取、村のものへ見勢候由、



- 一應接以來、退帆之様子一向相見へ不申、此上兩三度も應接有之可申哉ニ相聞へ申候、
- 一軍艦蒸氣船都合八艘、横濱沖に碇泊仕居候、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記
宮内省圖書寮所藏本

二月三十日、○中
略、

安政元年二月十一日

二九

安政元年二月十一日

三〇

傳聞、異將軍息死去、依願埋葬相州浦賀之寺院云々、

〔續泰平年表〕

○東京帝國大學所藏本

米人水兵ノ病死

二月十日、○中略、此日、アメリカ船中にて夷人病死せ、名ロヘルトウと云、歐羅巴の内、イースラントの産、當時アメリカ有之、イルレンス行年當寅二十四才、「今度渡來のアメリカ人之内、病死之者一人御座候ニ付、御國地の埋葬仕度旨、浦賀奉行伊澤美作守殿に願出候ニ付、御目付鶴殿民部少輔殿御立合、御聞届相成候間、村内寺院墓所御見分ニる、猶又十一日アメリカ人上陸仕、墓地見届之上、埋遣シ可申旨、被仰付候間、右之通取計仕度、此段御届申上候、以上、二月十一日、横濱村増徳院、名主徳右衛門、「芝二本榎紀州高野山學侶在番觸下、武州久良岐郡寶生寺末同郡古義眞言宗増徳院墓所爲見分、黒川嘉兵衛・合原操藏・齋藤太郎助御代官手代一人相越候、二月十一日晝九ツ時頃、夷人士卒六人、當方之御船ニる上陸、増徳院脇山際地所へ、深五間幅三間程之穴を掘、暫時過ハッテイラ二艘にて右死骸を箱ニ入、頭分之者一人、笛一人、士卒水夫十二人上陸、笛太鼓にて墓所迄參り、穴の口へ直し、暫導師の者經文様之事を唱へ、埋め候上、「ケール」六挺にて空砲三發ツ、打放し、引取、導師ハ黒絹様の物にて、襟よりむご有之衣服を着し、外下着等ハ通途夷人の通ニ、一説、白羅紗にて日本の丸合羽様の服を着せと云、穴堀道具ハ先方の品ニるハ用立兼、此方

葬式

墓碑銘和解

の鋤鍬を以て百姓共手傳掘遣候由、「卒都婆様の物二本、頭と足の方へ一本ツ、建、但し、横文字有之、此時御徒目付一人、御小人目付二人、香山榮左衛門・合原操藏同心一人・通詞一人相越、「増徳院ニ向ひ、同職の義ニ付、宜敷頼むと申様の挨拶致し候由、附添參り候夷人頗ニ愁傷之躰相見、猶其後を夷人共兩三人ツ、日々右墓へ參詣致し候由也、右卒都婆横文字和解、大日本江戸内海の此所ニ航海し來ル水軍別隊ノ兵士、トウキリアムスと云者のシルシの墓、本國一千八百五十四年第三月六日、行年二十四、右卒都婆板地墨塗、文字ハ白きニのニる書、長三尺五寸計、幅壹尺五寸、足ノ方ニ建之、夜リ入、此卒都婆を何人カ盜去と云、「又云、頭立候異人カ引導せ、葬穴へ鐵炮を打込ト、經文を唱ふる施主體の夷人、葬穴へ土を攫ト握程振懸る、夫より棺を埋と云、

〔ペリー日本遠征記〕

○ペリー

Francis L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of Government of the United States. Washington: 1856. Vol. 1. pp. 353—355.
Early next day, (Thursday, March 9,) as had been arranged, a Japanese official

安政元年二月十一日

三一

went on board the Mississippi, to accompany the funeral party on shore, for the purpose of pointing out the burial place selected for the interment of the dead marine. At five o'clock in the afternoon the boats left the ship with the body, attended by the chaplain, Mr. Jones, Mr. Williams, the interpreter, and a party of marines. The flags of every vessel in the squadron were hoisted at half mast as the boats pushed off. The body was borne to a very picturesque spot at the foot of a hill, at a short distance from the village of Yokuhama. The chaplain, Mr. Jones, was robed in his clerical gown, and on landing was received in the most courteous manner by some of the Japanese authorities, who showed none of their supposed repugnance to the Christian religion and its ministers. Crowds of the people had also gathered, and looked on with great curiosity, but with decorous respect, as the funeral procession moved slowly along to the sound of the muffled drum. The road lay through the village, and its inhabitants came out from their houses and open shops to behold the novel scene. The place chosen for the burial was near a Japanese place of interment, with stone idols and sculptured headstones, and as the procession came up a Buddhist priest, in robes of richly embroidered silk, was observed already on the ground.

Mr. Jones read the service of the Protestant Episcopal church, and while he was officiating the Buddhist priest sat near by on a mat, with an altar before him, on which was a collection of scraps of paper, some rice, a gong, a vessel containing saki,

and some burning incense. The service having been read, the body lowered, and the earth thrown in, the party retired from the grave. The Buddhist priest then commenced the peculiar ceremonies of his religion, beating his gong, telling his rosary of glass and wooden beads, muttering his prayers, and keeping alive the burning incense. He was still going through his strange formulary when the Americans moved away, and crowds of Japanese continued to linger in the neighborhood, about the crests and acclivities of the hills which bounded the scene. Mr. Williams, the interpreter, who had lived long in China, and was familiar with the Buddhist worship, recognized its peculiarities in the precisely similar ceremonies performing at the grave by the Japanese priest. A neat enclosure of bamboo was subsequently put up about the American grave by the authorities, and a small hut was erected near, for a Japanese guard to watch the grave for a time, according to their custom.

〔日本遠征録〕

○ホイクス編、ペリー日本遠征記、井坂孝譯
公儀徳川閣願所蔵本

三月九日、(木曜日)、豫定の如く、早朝、日本吏員ミスシッピーニ來る、是れ水兵の葬式ふ供あひ、并ニ其埋葬地ニ案内せん爲之、午後五時、死體を載せたる短艇本船を發せ、法教師ジョン、通辯ウキリアム及び仲間の水兵等之に従ふ、この時各艦半旗の凶禮を行ふ、斯くて死體を横濱より程遠のらざる地ふ於て、景色よき小山の麓ふ送られたり、法教師ジョ

病歿水兵ノ
埋葬

見物人群集
ス

ンと法服を着して上陸せしめ、日本吏員の丁寧なる出迎ふ遇へり、彼等と耶蘇教并ニ其僧侶をぞ、痛く嫌ふあるべしと思ひしゆ、案外ふりし、見物人を夥しく群集し、何れも不思議そうに凝視^{ニッ}をたりしめ、一行が幽^{カス}なる大鼓の音ふ連れて練り行きし時ふへ、皆ふ相當の敬禮を表したり、この路を村中を横切りしめ、村民を馳せ走り、又を店を明拂ひふとして、この珍奇ある行列を見るふ急めとしく見えたり、此の埋葬地を日本人の墓所ふ隣りて、其墓所ふは石像又を墓碑多く并ひ立てり、一行の着せし時、絹の繡箔ある法服を著けたる佛僧已に待ち居たるを見たり、

佛僧ノ儀式

法教師ジョンと新^{プロテスタントイビスコーパル} 大 寺の經を讀みしめ、此間佛僧を其の傍の疊ふ座し、其前に机を置き、之に紙片・米・銅鑼・瓶・酒及び香を置きて之を焚きたり、ジョンの讀經終れと、死體を埋め、行列ふ從ひし者は歸途ふつきぬ、此の時漸く佛僧は其宗旨ふ從て、奇妙なる儀式を初めたり、彼を銅鑼を打ち、玻璃及び木の珠を以て作りたる念珠^{ツツ}を繰り、祈禱を誦し、其間絶えそ香を焚けり、斯くして彼を米人の散し去りて、日本の見物人の未だ小山ふ群り居る頃迄、其儀式を續けたり、通辯ウキリアムを永く支那ふ滞在して、能く佛敎の儀式を知るを以て、其談る所を聞くふ、日本ふ行せる者^者と殆んと類似せり、其より後、日本の官吏を墓の周圍ふ奇麗なる竹垣を繞らし、又其傍に小舎を作りしめ、是れ日本の習慣より

日本官吏墓ヲ守ル

て暫く其墓を守る爲ふりとの、

〔日本行世界周航記〕^{〇ンヤ} 著

Wilhelm Heine: Reis om de wereld naar Japan.

Rotterdam: 1856 p. 215.

30 Mart. 1854.

Enige dagen later moesten wij onzen eersten doode in Japansche aarde bijzetten; het was een marinier van de Mississippi. Een korporaal met eenige manschappen, de kapellaan JONES van de Mississippi en eenige officieren vormden de lijkstaatsie. Aan den ingang van een dorp, dat wij door moesten trekken, sloot zich een priester van Buddha aan den trein en daar niemand hem weerde, nam hij zijne plaats onmiddellijk achter den kapellaan. Het kerkhof, waar het graf gedolven was, lag niet ver van een kleinen tempel. Dr. JONES las de gebruikelijke gebeden. Toen hij gedaan had, vroeg de priester zeer bescheiden, of het hem ook geoorloofd was zijne ceremonien te verrigten, die zich tot het verbranden van eenige met gebeden bescrevene stukjes papier en het offeren van kleine hoeveelheden thee, rijst enz. bepaalden. Het scheen een zeer goeden indruk op de Japannezen te maken, dat hem dit bereidwilling toegestaan werd. In allen gevalle zullen de onschuldige ceremonien des priesters de ziel van den doode geen schade gedaan hebben.

〔日本行記〕○ハイネ著「日本行世界周航記」蕃書調所教授方譯
公爵島津忠重所藏本

千八百五十四年第三月第三十日

後一二日ニハ、最初ノ死人ヲ日本ノ地ニ埋ルコト、ナレリ、其死人ハ「ミシシツピ」船ノ水手ナリ、一人ノコルポラール二人ヲ率ヒテ、ミシシツピ名ノ法師ヨチスト一二ノ將官ト皆葬ニ會セリ、「通行スヘキ村ノ入口ニ當リ、佛氏ノ僧アリテ行列ノ後ニ隨ヘリ、然ルニ誰モ之ヲ拒ム者非レハ、其僧自ラ直ニ法師ノ後ロニ位ヲ占メタリ、」其墓曠ノ在ル所ノ寺廳ハ小キ僧房ニ續キタリ、「學士ヨチス須要ナル經文ヲ讀ミシ、而テ其畢リシ比イニ、其僧甚丁寧ヲ盡シテ、僅ニ經文ヲ記シタル紙片ヲ燒キ、及ヒ僅ナル茶飯等ヲ供スルコトヲ以テ已レニ命セラレタル故、其事ヲ成シテ請ヒシ、」之ヲ其人ノ欲スル所ニ從テ付托スルハ、日本人ノ意ニ甚タ能ク適ヘルコト、見ヘタリ、「凡テ僧等ノ咎メナキ作業ハ、死人ノ心ニ取リテ何ノ障礙ニモナラサルベシ、」

○本月十日「ペリー」横濱上陸及五月二十日玉泉寺改葬ノ各條ヲ參看スベシ。

十二日辛 是ヨリ先二月朔日 福井藩主松平慶永越前守 米國ニ對スル措置ニ就キ、老中阿部正弘伊勢守○福山藩主ニ警告スル所アリ。既ニシテ、横濱應接ノ開

病歿水夫ノ葬式

始ヲ聞クヤ、鳥取藩主池田慶徳相模守・德島藩主蜂須賀齊裕阿波守・熊本藩主細川齊護越中守等ノ同意ヲ求メ、是日、正弘ヲ訪ヒ、通信交易拒絶ノ幕議ヲ確立センコトヲ説キ、明日、マタ名古屋藩主徳川慶恕權中納言ニ書ヲ寄セテ、老中松平忠優伊賀守○上田藩主ニ勸説センコトヲ促ス。此間、水戸藩主藤田誠之進彰・福井藩主鈴木主税重榮・同中根鞆負質師・熊本藩家老長岡監物是容等、幹旋最モ努ム。

〔福井藩主松平慶永書翰〕○内閣文庫所藏本
合同船入相秘記所載

○二月朔日老中阿部正弘宛

朔日、阿部伊勢守ニ指越、○合同船入相秘記

二月朔日、此頃の形勢ニ付、福山侯へ被遣御直書、左之通、○詳要

態々一翰陳述、兎角寒暖不揃之候、先々愈御清安被成御勤務珍重之至り存候、然レ異船追々内海に乘入、或レ小船を以品川邊迄罷越、海底淺深致測量候杯、實ニ御國法を輕蔑仕候儀ニ、日夜苦惱切齒之至奉存候、右測量仕候事故、追々品川内迄も乘入候所存ニも可有御座、右様之形勢ニ至り候儀ニ、實ニ狡猾不屈之次第ニ御座候、是非此處ニ、何と御

安政元年二月十二日

三七

米船ノ横暴ヲ慨ス
今ニシテ處置セズンバ巨患發生セ

所置筋無之候半ると、實ニ恐入候外無之奉存候、殊ニ當時平穩と申奥儀之深慮計兼候へ共、此内彼々兵端を開き候と申ニも無之候共、不法ニ上陸いとし候う、又こ空炮等打懸候ハ、如何之巨患相發し可申とも更ニ難相計奉存候、其上品川備場い往來仕候家臣共々承候るも、都下平々繁華之趣、右こ全ク御鎮撫之御趣意いなる重疊之義い奉存候得共、所謂寢耳ニ水之譬諭之通り、彼より脱兎之勢を示し候ハ、一時ニ擾亂可仕、大厦之覆一木之支る所いらさる勢ニ可相成奉存候得と、今一際海岸御嚴重ニ被成置、都下いも何とう覺悟御示之上、異船いも嚴重御諭告御座候様仕度儀と奉存候、只平穩と申内ニ、一異變等出來いとし候様ニ可相成哉と、實ニ横胸御案し申上候餘り相認候、定いる於公邊て深重之御趣意可被爲在候得共、傍觀いとし候て相考候得と、片時いも不安御儀、尙又深御勘考被下候様奉存候、只々御大事之御儀、何共絶言語候、要用而已草々申縮候、不悉、

二月朔日○昨夢

(昨夢紀事)

〔福井藩主松平慶永書翰〕

○内閣文庫所藏本
合同輸入相秘記所載

○二月十一日德島藩主蜂須賀齊裕・鳥取藩主池田慶徳宛

前略、然こ今般異國船渡來、昨日應接有之趣ニ御座候、扱又先日水戸前君之御所置いて、先

應接掛ニ通
信交易許可
ノ氣組アリ

通信交易ヲ
許可セバ幕
威失墜セン

許可阻止ニ
協力ヲ求ム

々交易通信之御評議と相止い可申御様子ニ候得共、何分應接方いると、矢張兵端を相開候か、又ハ江戸海へ乗込候勢いも候ハ、通信交易ニケ條御許諾之様ニ申唱候段、神奈川探索方より申越候、

幕朝御評議前同斷いと、御動搖ハ有之間敷候へ共、只管應接方右を唱候ると、甚御大事至極之儀いて、當今ニケ條御免許有之候ると、第一昨十一月朔日重いき

上意と申、此間之觸達も反古と相成、諸大名へ被對候る、御信義相失可申、

御代初之折柄之命令ニ御信義相失候ると、誠ニ以御大切至極之儀奉存候間、何卒右之儀い明朝老中へ罷出、及逢對、尋問之上、若御許諾等之口氣いも有之候ハ、抽精心申立度、拙者一人いるいと迎も相通申間敷、右ニ付、今夕委細御面談之上申上度奉存候間、御同意いも被爲在候ハ、弊屋へ御光駕被下度候、且又御兩公様之内之貴館へ罷出候るも不苦候、若拙宅へ御來臨之儀いも候ハ、御繼上下いる御出奉希候、尤御手間取いハ相成不申、乍去其節鳥渡い飯差上度奉存候、右之段申上度用事迄、艸々頓首、

二月十一日○昨夢

越前守

阿波守様

相模守様用事

(昨夢紀事)

安政元年二月十二日

〔德島藩主蜂須賀齊裕書翰〕○内閣文庫所藏本
合同船入相秘記所載

○二月十一日福井藩主松平慶永宛

貴翰忝拜誦仕候、愈御清迪奉賀候、然被仰下候委曲逐一貴答こそ不及候得共、至極御尤之御義、先々謹承仕候、小子何以不差支候間、今夕供揃次第推參仕、其節萬縷厚く御示談可仕、先之差急貴酬如此御座候、頓首拜拜、

今夕推參ス
ベシ

二月十一日

尙々供揃次第ニ推參仕候間、夕刻よりハ早く相出候も難計、左様御承知被下度候、先本文貴酬迄申上候、

因州へも小子より早々申遣候、是も定る罷出候事と奉存候、早々不備、

越國公閣下貴答

阿裕拜

〔鳥取藩主池田慶徳書翰〕○内閣文庫所藏本
合同船入相秘記所載

二月十一日福井藩主松平慶永宛

阿兄より華墨帖相達致拜讀候、愈御清安珍重奉存候、然々尊慮之趣、一々御尤至極、聊間然無之、尤以御同意ニ奉存候間、何卒明朝阿部へ御出御對談之御模様相同度候、罷出候も宜候得とも、却る此節柄目立申候事故、指扣申候、此上之思召次第可仕候間、乍御免倒又々

至極同意

御染毫御投與被下度候、右奉復迄、艸々頓首、

福城賢兄 内用復

鳥取拜

〔福井藩主松平慶永書翰〕○改訂肥後藩
國事史料所載

○二月十二日熊本藩主細川齊護宛

〔卷八上書〕
細越中守様

密用御獨閱

松越前守

一翰致拜啓候、春暖之節愈御清安珍重奉存候、然々異國船渡來一件ニ付る去、兼る御用も被仰蒙候御儀と申、何角御配慮奉推察候、夫ニ付、此間も御觸通りも御座候、一統二百餘年大平ニ浴候御厚恩奉報謝候時節到來と、憤發可仕儀と奉存候、然處、何の於公邊も、交易通信御許容ニ可相成哉とも、神奈川邊ニ専ら風聞も有之趣致承知候、昨年之被仰出申、此間之御觸達と申、左様之儀と有御座間敷筈とハ存候得共、異人之強願ニ被任、萬一風聞之通り御聞濟相成候ると

〔イ禮とある〕
御國體も難相立而已ならず、諸大名へ被對候る御信義も相棄候儀ニ、誠以御大切至極之儀と奉存候ニ付、同席之内申談、今日、伊勢守迄存寄申達候事ニ御座候、右ニ付、御誘引申上候よるも無御座候得共、貴家之儀も右御用も御蒙り之御儀ニ候得と、何卒

交易通信許
可ノ風聞

今日阿部正
弘ニ意見ヲ
述ベシ

中根鞞負ヲ
以テ長岡監
物ニ詳陳セ
シム

御國威之御墮墜ニ不相成候様被仰上候ハ、於
公邊も格別御力よも可被爲成哉ニ奉存候、此末之應接、誠ニ御安危ニも可相拘御時節ニ御
座候故、指過候儀申上候も恐縮失禮ニ御座候得共、不外御間柄ニ任セ、愚存之趣一應申上
試候、猶書外存寄之儀も御座候得共、不及筆紙候ニ付、御家臣長岡監物儀ニ此度御用とし
て被召呼候由承及候故、同人迄中根鞞負を以愚意之趣委細申含候間、御聽取被下候様仕度
奉存候、（右申上度如斯ニ御座候、恐々謹言） 艸々頓首拜、

二月十二日

尙々、時下御自玉奉專念候、本文之趣、推參委細及御謹話度奉存候へ共、勢州へ罷越、其
他此節繁用ニ付、乍略儀呈上野書候、乍末筆聞令君へも宜御致意可被下候、奥より宜申
上度段申出候也、

○合同舶入相秘記及昨夢紀事、マタ本書ト同文ヲ載ス。但、秘記ノ末文ニハ「尙々、時下御自玉奉專念候、以上、
細越中守様内用、松越前守」、紀事ノ末文ニハ、單ニ「細越中守様、松御名」トアリ。

〔熊本藩主細川齊護書翰〕

○内閣文庫所藏本
合同舶入相秘記所載

○二月十三日福井藩主松平慶永宛

花墨拜讀仕候、如仰春色相催候處、愈御安寧奉賀候、扱異國船渡來、防禦筋猶更心配仕候事

ニ御座候、於

公邊交易通信御許容ニ可相成哉ニも、神奈川邊ニる専ラ風聞之趣御承知相成、萬一風聞通
り御聞濟ニ相成候ると、

御國體羨難相立、諸大名に被對 御信義羨相棄候儀ニ付、御存念之趣、御同席之内被仰談、
昨日、伊勢守殿まで被仰達候由、右ニ付、小子も相達候様有之度、不外御間柄之譯を以、
委曲御懇書之趣、難有奉存候、御家臣中根鞞負に被仰含候、家僕長岡監物に羨御存意被仰
下候趣、具ニ申出候、交易通信御聞届ニも相成不申候様ニとの儀、愚存之筋ハ、去秋老中迄
申上置候末ニ付、猶相達候儀ニ、得斗勘考不仕候ると難相成候處、昨日、伊勢守殿に御對話、
交易通信御許容ニ無之段返答之趣、鞞負が監物に申越候通り直ニ申出、右返答之通りニ候
へ、重疊御安心之御事ニ御座候、於小子羨誠大慶仕候、異國船一件ニ、御互ニ心配不少
御事ニ御座候、先奉復而已早略仕候、頓首、

二月十三日

二白、御端書之趣忝仕合奉存候、不揃之氣候相成、御自玉專一奉存候、以上、

越前守 様

越中守

極密貴酬

安政元年二月十二日

安政元年二月十二日

四四

○昨夢紀事、マタ本書ト同文ヲ載ス。但、二白以下ノ文言ナシ。

〔福井藩主松平慶永書翰〕

○侯爵德川義親所藏本
留記所載

○二月十三日名古屋藩主徳川慶恕宛

一、二月十四日、誠之進かいへる尾州公御徳惠の事も、如何様にも然るへからんと思召されしかハ、此日、尾公へ被進たる御内書如左、○昨夢紀事

一翰拜啓、春暖之節ニ御座候得共、先以愈御清安可被成御起居ヲ奉恐壽候、然之是迄ニも御動靜御安否可相伺筈之處、彼是掛違、御疎遠打過、背本意候條多罪之至、御海恕被成下度奉存候、扱又異船碇泊罷在、今度之儀去

水府前君及尊君等ノ外頼ムベキ人無シ

皇國之安危分判〔一〕之秋〔二〕ニ奉存候ニ付ると、日夜不安寢食苦〔三〕腦罷在候事ニ御座候、然る處、方今水府前君と御參謀中、其他ハ愚存之趣申上候程之御依頼之御方も無之、尊君ニハ右等之義兼々御憂慮被爲在候御様子奉拜承居候ニ付、別紙愚衷申上試候間、何卒御熟考被成下、爲天下御配慮之程奉希候、尤遠境往來之日數相懸り、其迄ニハ可及退帆〔四〕も難計候へ共、今度と碇泊長引可申と申取沙汰ニ御座候故、及建白候事ニ御座候、先右之段申上度如斯ニ御座候、恐惶頓首九拜、

二月十三日認

二白、時下御自玉奉謹念候、以上、

尾張

中納言様

松平越前守

内用

○合同舶入相秘記及昨夢紀事、マタ本書ト同文ヲ載ス。但、紀事ニハ「二白、時下御自玉奉謹念候、以上、」及「内用」ノ文言ナシ。

米艦來航以後ノ模様

副啓申上候、然之異船先月中旬頃より碇泊罷在、誠以不容易次第、天下之安危存亡之分界、貴前様ニ都下之光景御目撃も不被成候事故、別御苦惱〔一〕不啻御儀〔二〕奉遙察候、仍之態々申上度儀と、前文申上候通り、誠ニ御一大事至極〔三〕と、萬一彼之兵威ニ御畏れ被成、通信交易等御許諾ニ相成候ると、昨十一月中御代初之折柄、重キ

上意之趣も有之候事故、天下之候伯へ被對候る迄御信義相失可申、御信義無之候得ハ、徳川家之御威光〔四〕これ限りと、深く恐入罷在候儀ニ御座候、是等之處致熟考候得と、何分不失御國體、通信交易等之儀ハ、御許容不相成候様致度奉存候、方今水府前君御參謀

安政元年二月十二日

四五

應接掛通信
通商ノ許可
ヲ求ム

幕議ト應接
掛ノ意見一
致セズ

之御義ニ付、思召通り相成候ハ、小生輩遺憾無之候得共、左様ニも參兼候勢ニ相見え、當時累卵之危殆之時と被存候、扱又小生方ニも、餘り苦心仕候ニ付、神奈川邊へ探索方遣し置候處、彼將官彼理ふる者、通信交易御許し無之候ハ、江戸海へ乗込及戰爭候勢を示し候由にて、於幕朝と甚御懸念ニ、體ニより通信通商御免も相成可申哉と申事も有之候由相聞え候ニ付、猶又種々相調候處、本月四日ニハ、井對^(井戸邊)林大等^(應)之應接方よりハ、何分二ヶ條御免無之候ると、應接出來不申候致決心申張候ニ付、無據可被任其意哉之勢ニ相成候故、水前君ニも被成方無之、被稱病氣御引込ニ相成候由、就夫又老中方ニも評議變替ニ相成、何分御病氣ニも推る御登營有之候様申來り候ニ付、再御出勤御座候處、右二ヶ條御免之儀と御沙汰止ニ相成、何分精々平穩といし、應接二ヶ條ハ御免無之趣申諭候上も、彼夷怒つて江戸海へ乗込、執政ニ逢度と申立候ハ、老中方逢對被致、同様諭告之積、夫ニも不承知よ、彼より兵端相開候ハ、戦具ふしといへとも可及戰鬪廟策ニ相定、別段御觸達も有之趣ニ相聞候ニ付、それ程迄之御覺悟相立候儀、全水府前公之御所置かと難有致降心居候處、其後又々探索方相聞候趣ニ、廷議ハ右之次第ニ候へとも、應接方之様子ハ、矢張同様にて、何分應接方と手強く申立候故、精々二ヶ條御免之儀ハ不^(不)申聞候得共、萬一彼より兵端相開候勢、且江戸海へも乗込候様子ニ候得と、

阿因兩侯ト
議シ阿部正
弘ニ警告ス

正弘通信通
商不許可ノ
旨ヲ答フ

其節ハ無余儀御許容之積ニ、應接方へ御任セニ相成候由ニ申唱候様子ニ相聞候、右ニハ老中方之覺悟有之候内調といハ、更ニ天淵之儀ニ、何分相分り兼、彌增苦惱^(苦)切齒一層を増申候ニ付、種々相考候處、方今水府前公御參謀中、萬事思召通りニ相成候得と異議無之候得共、老中方ニも苦惱^(苦)之餘り、萬々一右等之内評有之事歟も難計ニ付、同席共申合セ、老中へ逢對存寄申達、右等之所承り糺し申度と、一昨日、阿波守^(阿波守)相模守拙宅へ申越、右等之始末柄相咄し候處、尤同意ニ付、昨日朝、伊勢守へ罷越、逢對之上存分申達候處、返答之趣意と、假令彼々如何體嚴敷懇願いとし候も、右二ヶ條之儀と御許諾無之、夫の爲ニ彼より兵端相開候ハ、其節ハ昨午十一月中之被仰出、并近比相觸候通り相心得、必死ニ及戰鬪可申ハ勿論之旨、唯今ニ相成、右二ヶ條御免有之候ると、第一昨年之被仰出も反古と相成、且ハ魯西亞へ被對候も信義難相立儀ニ、旁以決る御許し無之筈候間、其所ハ致安心可罷在段、阿波守相模守兩人へも申通し候様ことの事ニ御座候故、漸安心仕候、尤返答之次第ニより、阿波守相模守も追々逢對罷越、小生同様可申立積りニ御座候得共、右之通り立派之答ニ御座候故、先ツ當分兩人罷越候義ハ相止申候、細川ハ如御承知不外近親ニ付、默止之秋ハ有之間敷段も申遣候事ニ御座候、先右之趣ニ、内々ハ

水府前公より御周旋有之外ニハ、諸大名より申立、
廷議之御一助とも相成候ハ、奉對

東照宮、二百餘年之御恩澤を奉報謝候御奉公之片端とも相成可申哉之婆心而已ニ御座候、
夫ニ付、

尊藩之義と、

幕府之御親胃ハ勿論にて、殊更深く御忠慮を被盡候趣も竊ニ相伺ひ、

大廷之御幸福不過之と奉欽望候事ニ御座候、今般之次第共、實ニ天下之得喪安危分判之秋
と奉存候得也、可相成ハ唯今之處ニ在、

尊藩(松平忠優)上田閣老へ、當月々番之廉を以、砭針之御一書被成遣候ハ、如何計り

公邊御評議之御強ミとも可相成儀と奉存候、左候ハ、定る福閣(阿部正忠)同様之高答も可被申上、

左様相成候得ハ、福閣(松平忠優)ハ小生輩へ言葉質を取置、月番之閣老(阿部正忠)ハ、

尊藩へ證書同様之御請被仕候様相成候ハ、廟算彌確定とも可相成儀ニ在、國家之恐悅ハ

不申及、於小生輩も盡く安堵至極ニ御座候、兎角應接專任之向にて和議の被行候様子ニ

御座候故、夫の爲ニ萬一 廟謨御あやほりニ相成候ると、駟馬も難及、實ニ御大切至極之

御儀と奉存候ニ付、苦惱(苦)之餘り不顧不敬失禮、愚昧之拙策建白仕試候事ニ御座候、若又尊

松平忠優ヲ
説破センコ
トヲ求ム

慮とも相背申さば、貴毫御投與之御運ひとも相成候ハ、本懷至極之儀と難有奉存候、以
上、

松平越前守記〇留

(昨夢紀事 焚餘手翰
合同舶入相秘記)

〔名古屋藩主徳川慶恕書翰〕

〇侯爵徳川義親所藏本
焚餘手翰所載

〇二月福井藩主松平慶永宛

三月朔日、尾州表々、過日之御返翰到着セリ、如左、

如諭春暖相成候處、愈御康寧欣賀之至候、然は今便は朶雲惠投忝致拜讀候、從是も御疎遠
而已打過、多罪此事ニ御坐候、扱ハ

皇國之安危分判之時節、實ニ鬱陶致候、乍不及寸忠を盡度、毎度建議致候事候得共、存候様
にも難行届、御推察可被成下候、先は貴答迄如此候、不一、〇昨夢
紀事

如 月

段々高諭之趣伏讀三復いとし候處、鄙懷と逐一符合之事共、扱々御頼敷、先以欣喜ニ不堪
存候、實ニ如貴命、當今之形勢ハ 皇國未曾有之一大事ニ在、晝夜盡傷不啻存候、殊ニ拙儀
ハ隔地索居之事、即今之 幕議如何之御模様ニ哉、何事も不相分、別る無心元覺候處、貴書

安政元年二月十二日

數度ノ建言
少シモ貫徹
セズ
老中説破ニ
就イテハ別
存アリ
萬事ハ東下
ノ上ニテ述
ベン

こる承り候へハ、既ニ頃日ハ 祖法國威も殆墜地の場合ニ及候趣ニ候處、幸ニ水老人之一
争を得て社、累卵之危を凌候事と相見得、扱々薄氷之思、言語道斷長大息之至奉存候、其一
端ハ先々事濟候得共、其後貢獻賜與之物件も有之候由、是ハ如何之御處置ニや、一圓合點
之不參事共ニ候、乍恐 二荒山之 御餘光を、此ニ至る如何成行可申哉と、實ニ言語道斷
存候、將亦時體云々ニ付御軫念之餘、拙ニ閣老へ皇書之儀御申越、尤易事ニ有之候、抑去
夏以來、拙義愚存之趣、既ニ其砌逐一建白を遂候ひき、且其後も追々水老并閣老へも頻ニ
密封ニも及申候へ共、何事モ貫き不申、隔靴爬痒之心持ニる、毎々歎息至極之事共ニ候、
尤當今之時體、寸刻を不可棄置之機會ニハ候へ共、前々申ス如く、書中ニるハ迎も無詮ハ
必定ニ存候、是ニ付る去聊愚考之趣も候へ共、何分紙上ニ去難述、最早間もなく東下之事
ニ付、萬縷は其上之事ニ可致、夫迄之處猶格別ニ御粉骨御輔翼所祈候、吳々も格別報國御
赤心之御細教不淺々々感荷之至存候、餘ニ面罄と、早々不具、

(昨夢紀事)

〔宇和島藩主伊達宗城書翰〕

○松平春嶽公紀念文庫所藏本
宇和島侯書翰集所載

○三月二十五日福井藩主松平慶永宛

御血誓御同様と有之御密封、雪手奉秘閣候處、去月初旬、應接方より交易通商御免不被仰

慶永ノ報告

付候得ハ、迎も六ヶ敷候故、應對御斷申上候由ニ付、既ニ二ヶ條御免許と相成候事、右ニ
付、水前老公速ニ被稱御病氣御引込ニ相成候故、押る御出仕云々ニ此儀ハ止、渠不致承
引、兵端を開候ハ、不備よても不汚 御國體對戰と決定御座候由、其後も神奈川風評
てハ、兎角二ヶ條御免許も可相成やニ付、徳島・鳥取御密談之上、阿閣へ十二日(前部正史) 明公御
光臨ニる委曲被仰述候處、決る御免ハ無之旨、福被申候由、尙又尾公へも御呈翰ニる被仰
遣候間、尾公よても福へ可被仰遣旨、細越・立花へも被仰談候處、細ハ其心無之、立花ハ十
六日福へ參、存分申立候由、扱々一朝ノ千古無比之

神州大耻辱と可相成候處、全 明公御至忠御英斷之御鼎力ニる無疵ニ相濟候段、千萬苦戰
塵夷奴人舶よりも御忠效幾多の倍候半と、實以難有奉躍然候、乍然溜詰始舉朝皆以ゆるそ
論計故、中々御油斷不相成、此間申上候僕無比之心痛、諸閣老不平云々も病源ハ是よて可
有御座候、水老公と福閣を除候ハ、餘ハ丸る同意輩故、兎角兩所ヲ除候策ありと存、心痛無
止奉存候、既ニ野父(伊達家)も再三松泉州被申越候處を以相考、阿氏奸佞と申越候得共、いまた
拙劣ハ承伏難仕旨申遣置候、何分他閣始離間之策ヲ施候義と存候、それゆへ明公・麟兄へ
巨細御密談申上候様申遣置候、元來野父ハゆるそ方ゆへ、少々考量違も可有御坐哉と心配
仕候、尤當時之形勢目撃不仕候故何とも難申上候得共、昨年來毎々極々機密ニ 廟堂之

溜詰以下舉
朝許容ノ意
ナルヲ以テ
油斷ナリ難

御模様御密示も被下候故、以御庇光憶量仕候義御坐候、將又不遠退帆可仕旨、何分左様仕度、亞退候ハ、魯來可申、實困難之時合候ハ、明公御歸國よても相成候ハ、如何とも致方無之、廟堂之密議ハ不知、晝夜心痛仕候るも、中々以隣兄僕輩之力ハ及間敷と今當惑仕居候、身首違所ハ覺悟之上ニ候得ハ、申立候事ハ可申立候得共、必定御用ハ無之義差見得申候、何よ〜巷説紛紜中極密議相同候間、聊降心仕申候、此間も交易ハ不免候得共、和親之國と可相成と御返答有之候旨、他方傳承仕候處、親和を結の交易ハ深患ある義ハ三尺童も可致辨知、決る空評とハ乍存、いろ〜愚考仕候る苦心仕居候處、初る安心萬福無量奉存候、先ハ密奉復荒々申上度、恐惶頓首、謹言、

暮春念二五時書於府中旅亭

二伸、阿閣計へ責付候るも、中よハ取扱被兼候義も可有之、明公御始諸賢兄、折ニハ

牧・泉二閣へも被仰述候方可然のと存上候、無益ハ歸し可申候得とも、阿方傳承と御

直話とハ又違候義御座候故、左様可有御坐候方宜しきのと心付候故、申上置候、不備、

血誓同様奉復伏希親閱候、

宗 城

牧野松平二
老中ヲモ責
問スベシ

〔合同舶入相秘記〕

○松平慶永手記
内閣文庫所藏本

二月八日、泰西三月六日、

○中略

鈴木主税ノ
談

主税鮫島庄
助津田山三
郎ト會談ス

今日八ツ時比、用事有之、品川持場より鈴木主税罷出候ニ付、直ニ逢承候處、昨夜、薩州浪人鮫島庄助横井平四郎門弟浪人ニシテ、薩州侯の内命授受け、所々周旋奔走ニシ候由、細川越中守家來津田山三郎東海寺へ罷越、水戸御家來藤田誠之進より傳言之趣も有之、主税へ面會致度段申込候由ニ付、於細川菩提所妙解院東海寺内主税兩人へ逢候由、尤主税とも三人一間よ密話之趣、其主意と、今般異國船之儀よ、井戸・林を始應接方ニるも、何分通信交易御許し無之候半あるも、迎モ兵端相開候場合ニ相至り、加之江戸内海へも乗込可申勢之由、嚴く申立候由ニ付、兼その平穩と御主意と更ニ掛隔之事ゆへ、御老中方始メ一同甚心配ニる、當月四日ニハ、無致方已ニ通信交易御許しと申事ニ相成、廟議甚機窮ニ相迫り候ニ付、水前公素より通信交易ハ弗ニ御斷絶之事ゆへ、被稱御病氣御引込ニ相成、御免も御願被成候御様子、是又閣老衆始一同被致心配よ、何分ニも五日ニハ御病氣御押被成候るも御登 城有之候様被 仰出候ニ付、不得止事御登 城被遊候處、先ニ右通信交易御免之災厄ハ御評議相止候趣にて、應接方ニるも承服以とし候様子ニハ候へ共、横濱應接之節、少一六ヶ數相成、彼より兵端をも相開候カ、又江戸海へ乗込候勢ニも相成候ハ、又候右通交二條之御免一之災厄、再發起致間

藤田誠之進
主税ニ慶永
ノ建白ヲ德
憑ス

狛及中根等
ヲ召シテ評
議ス

主税ヲシテ
藤田ヲ訪ハ
シム

通信交易拒
絶ノ幕議決
定ノ經緯

安政元年二月十二日

五四

敷ものにもあらは、何分天下一大事之秋と誠之進も申聞、此上と貴藩より外御恃申候事不
相成由、越前公何ぞ御工夫も被爲在、公邊へ被仰上候様致度、又貴尊藩より御建白等出
候へて、水前公夫を力ニ被仰立候儀も有之候由、越公御建白等被爲在候ハ、私共手筋有
之候ニ付、主人^{山三郎申、細川也、長州}・立花等へも幾重も申て、共ニ建白ヲ相成候様致度積之由申
聞候、依之山城^也・鞆負^{十郎右衛門等}夫々呼集致評議候、何分右通交之二件發起^以候
之、夫も、御國躰失墜之上、譯もふき事^ゆへ、何分明朝伊賀守へ罷越、及説破候方可然段、
種々利解^得失申試候へ共、何分^も庄助・山三郎申口ニる^も、狐疑^以候^も、無之候
へ共、不詰り之事を申立候^も如何ニ付、又々色々申談、山城申候ハ、誠之進・主税と對談
之上、交ハ書通位ニ候ハ、宜候得共、庄助・山三郎御家を遣ひ、爲致建白候様ニ相成候^も、
事輕々敷事ニ付、先只今より主税を誠之進方へ遣^し候^も、歸り次第之事ニ相成候ハ、可然
段申候ニ付、何も同意ニ付、乍大儀主税罷越候様申付、主税直ニ誠之進方へ馬^よて罷越候
也、五ツ半時前主税歸り承り候處、素より庄助・山三郎申口ト格別違^も無之候得共、少々
趣意違之事有之趣、夫も本月四日ニハ、應接方井戸を始、逆も通信交易御免許^ふらてハ、
私共應接ニ相成兼候段申立候事餘程嚴^く有之、彌右之通り之御趣意ニ候ハ、應接方御斷
り申上候段強^く申立、并井戸入海へ乗込候と、兵端相開候とハ尤禁物^よて、夫ハ不相成と

申事也、右如斯申立候ニ付、何も無致方と申鹽梅ニ相成、閣老衆始何レも交易通信應接相
極り候末、御免許と申事ニ相成、廟議甚危迫、如絲又如髮相成候處、水府前公御聞被成、尤
通交二件之儀ハ御素意御斷絶之事故、左様ニ候ハ、遮莫と申意味^ふて、被稱病氣候^も御登
營御斷、且御免御願^も至り候半と申程ニ相成候、其節水前公御一人ニ相成候由、立付候
勢之由、右ニ付、五日御登 城無之處、御病氣^もも推^る御登 營有之候様被仰遣候ニ付、
不得止事御登 營相成候處、昨日、通交一件已ニ御免許と申窮迫之御決評、更ニ變遷^以
候て、閣老衆も大ニ覺悟相付き、何分通交二件ハ御免許相成不申、精々應接方^もも諭告
之上、聞入不申候時^も、此方より指圖致兼候得共、彼より江戸海へ乗入候儀ハ存次第可致、
將軍并執政之命を受け^て此許へ參り、及應接候事^も、江戸へ參り執政へ對話候^もも同意
之事、夫をも不聞入狐疑^以候て云々と申放^し候積、左らハ彼共江戸内海へハ多分乘込
申間敷、且又端船を以テ乗入候ハ、濱御殿へ兼る相詰居候江川太郎左衛門罷出、及應接
候由、江川應接をも不聞入候^も、執政ニ對話と申事ニ候ハ、老中方被罷出被及對面、井戸
始申口と不相變申諭^し候、老中方にて覺悟相極り候趣、右ニ付、應接方^もも致承服、昨日
井戸出立と申事、右様老中方覺悟相極り候事故、多分應接^も及ひ、事六ヶ敷相成候^も、遷
轉之憂患^も有之間敷哉^も被存候由、右等之事ハ、委細庄助・山三郎へ申兼候^ゆへ、荒増相咄

安政元年二月十二日

五五

松平忠優説
破ノ事ヲ止ム

置候處、二人甚致患腦、如何以^レ可然哉と申聞候ゆへ、越藩ニ候ハ、建白も上書も出來可申候得共、其他之君ニ^レる^レ六ヶ敷可有之段申立候ゆへ、山三郎・庄助△△△之心持モ有之候事ゆへ、主税へ罷越相咄候と相見え候由誠之進申聞候、依之多分ハ通交之二件窮迫之御評議再ひ起發も仕間敷、右様之事ゆへ、先伊賀守へ罷越、及説破候段ハ相止候、誠之進申候ハ、ロシヤへハ證文迄被遣、外國より通交申入候とも、ロシヤより先御免許無之段被仰遣候、夫ニ方今之御評議之苦ル敷事ニ候、^{○中}略、

十一日、西洋三月九日、^{○中}略、

中根鞆負へ申聞候^レ、阿州・因州申談、明朝阿部へ罷越云々之積ニ候へ共、尙又外様大名よりも申立候ハ、

廷議彌以相定り可申と存候、幸ひ長岡監物當時此表ニ罷在候様子ニ候得^レ、細川を誘ひ候^レあめ、監物へ申談ニ罷越候ハ、可然段申候處、鞆負申候ハ、甚願ハ敷御尤之御儀ニ候へ共、先日、主税迄監物より申越候ハ、細川侯へ御書被遣御勵まし被下候儀ハ出來申間敷哉、只御書被遣候^レと夫切ニ相成可申候間、監物拜見い^レとさふなれハあらざる様ふして被遣候様ニとの事ニ候、且又當時監物他所之人へ逢候儀御留メニ相成候由故、私罷越候儀^レ六ヶ

中根鞆負ヲ
シテ長岡監
物ヲ訪ハシ
ム

蜂須賀齊裕
來ル

敷、幸立花壹岐ハ有志之趣ニも候由故、私何となく罷越、私限りニ申談試候ハ、如何と申候ニ付、至極可然間罷越候様申候處、鞆負猶又主税へ申談度候間、今より御持場へ罷越度段申立候ニ付、其通りニ相任セ鞆負罷越候、八ツ半時過、阿波守罷越、書院へ相通ス、用人罷出口上承り、其段申達候ニ付、直ニ我等ふも繼上下ニ^{○中}書院へ參り、一應之及挨拶、夫より誘引居間へ相通り、如例茶多葉粉盆等差出^{○中}、茶子差出、直ニ人拂申付候^レ及對談、

我存意十分申聞候處、阿波守も甚尤之儀^{○中}て同意之由、何分只今通信交易等之、御許免ニ相成候^レと相濟不申、貴兄御咄之通り、昨年十一月中命令反古ニ相成候而已^{○中}らば、諸大名へ御信義相失可申ハ勿論之儀、萬一御許ニ相成候^レハ、アメリカ^{○中}カ^{○中}ヲ難有可及退帆哉も難計候へ共、インキレス、おろしや、フランス等追々到來、及強願候節、又御許ニ相成候^レと、何レも三年之御試ニも候ハ、十二年相掛り可申、一旦御免ニ有之候ハ、逆も夫ニ^{○中}相止候彼ノ存念^{○中}有之間敷存候、左^{○中}それ^{○中}と^{○中}りも^{○中}な^{○中}を^{○中}と^{○中}せ

日本之疲弊ハ眼前之儀、今強暴之アメリカへ御平穩ニ御斷、及退帆候ハ、却る萬國も致承知、渡來仕間敷奉存候間、何分被仰立候方御尤と奉存候、被仰立候節、拙者并因州も同意のよし御申聞^{○中}に^{○中}し^{○中}度、且又今日推參會議^{○中}に^{○中}し^{○中}候儀も御咄有之候様ニ致度段申候ニ付、其儀ハ左様ニ可仕段申聞候、萬一貴兄被爲入、阿部之口氣相分り候上、時宜ニよ

り拙者も阿部へ罷出候可及説破候間、左様相心得候様申聞候、阿州も同意ニ付、種々相咄ニ相成、○中略

黄昏、相模守罷越、諸事先刻阿波守取扱と同斷、直ニ兩侯へ一汁一菜外ニ燒物差出、膳之上ニる吸物酒差出相伴有之、相濟用談、

私等并阿州心體存分相模守へ相嘶候處、尤同意ニ候、阿州口氣も同様ニ付、別段不相記、彌明日阿部へ逢對之積ニ取極、○中略

十二日、西曆三月十日、

○中略

四ツ時過、伊勢守被罷出、逢對模様左之通、○我等伊勢守

○申候ハ、今般異船渡來ニ付る去、御處置振如何被爲在候哉、乍恐晝夜不安寢食罷在候、昨年十一月中重キ上意之趣被仰遣も有之、且先日觸達も有之候事ゆへ、定る御許容之可否不被仰聞儀ハ奉存候得共、神奈川邊之風説ニるを、通信通商御免も可被仰付哉之旨承知仕候、品川御殿山邊御固メも被仰付候事ゆへ、尙又奉相伺候、

●被申候去、神奈川邊之風説を、尤とるよ不足之儀にて、異國船長く滯泊之事故申唱候義ニ候、昨年十一月被仰出も有之候事故、決るニケ條御免被仰出候様之義ハ無之事、

阿部正弘ト
對談ス
通信交易許
可ノ意ナル
哉

許可ハ風説
ニ過ギズ

池田慶徳來

彼兵力ヲ以
テ迫ラバ如
何

○申候ハ、彌左様ニ候へハ、誠以難有奉安心候事、
●迎もアメリカへ御許免等之義ハ無之筈、既ニ長崎表へロシヤ罷出候故、ロシヤへも三年之暫見合候様可致、代替等繁用之折柄云々之趣申聞候へ、及承服候る退帆以多し候、今アメリカハ二ケ條御免ニ相成候ると、第一昨年之被仰出も反古ニ相成、諸侯も必定屈服仕間敷、且又ロシヤへ第一御信義相缺、早速ロシヤ浦賀表へ可及渡來ハ顯然之義ニ候、其處ハ致安心罷在候様ニとの事、

○申候ハ、段々被仰聞候儀、安心之至ニ候得共、万一彼等江戸海へ乗込候か、兵端を相開候勢相示一候節を、矢張凛乎右之御英斷ニ被爲在候哉、又ハ左様ニ無之、其節ハ御國體を被枉、彼之情願ニ御任セ被成候へハ、彼ハ難有可及退帆、是又一時之御權道と申物、兵端ニ及ひ候ると、未多 公邊御備も完全と申程ニハ至り不申、諸大名義又同斷之義ニ候ゆへ、如何相運可申哉と甚致懸念候、右様かゝる至重之災厄ニ相成り候節ハ、

如何御心得被成候哉、只今ハ御英斷之所難有奉存候得共、其節ニ相成、御英斷撓屈仕候ると、却る被損 御國威、我々交易を開候ニるハ無之、彼之願ニ被任候事とハ乍申、降參同様と申上度候へ共、實ハ降參と奉存候、其節ハ如何被成候哉、

●如何體困厄之場合ニ相至り候るも、被損

安政元年二月十二日

六〇

御國威候様之儀ハ致間敷候間、左様相心得可被申、夫故ニ必竟昨年十一月朔日 命令も有之、且先日之觸達も出し候儀ニる候、決るニケ條御免相成候様之義ハ無之候事、

●彼より兵端相開候節ハ、不汚

御國體、一同奮發討伐可致義勿論ニ候事、

○右之趣也、同席共昨日寄合申談、何レも同意ニ付、先惣名代とし申上候儀ニ御坐候、

昨日罷越候と阿波守・相模守ニる候、越後守も申談度候へとも、當時病氣中、三河守ハ部

屋詰、兵部大輔も多分存有之間敷と存候ニ付、旁以前文之通りニ候事、其外存寄不殘淵

底申達候へ共、問答之紙上よて我意相分り候故、別段不相記、

●右之趣、阿波守・相模守へも可達候、

伊勢守送り無之、四ツ時過、常盤橋へ歸宅、

靱負申聞候ハ、今朝長岡監物方へ罷越候處、委細相心得居候旨、御直書之儀也是迄之御振

合ニる、大奥ハ御廻しニ相成候様ニとの事、依之罷歸候上、大奥へ差出候段申達之、

〔鳥取藩從江戸之日記寫〕

○縣立鳥取圖
書館所藏本

二月十日、○中

一今日御供揃次第七時過、早觸ニる松平越前守様ハ被成御出、夜五時御歸 殿之事、

〔水戸藩士藤田誠之進書翰〕

○昨夢記
事所載

○二月十二日福井藩士中根靱負宛

芳翰拜誦、如諭昨日は始而得拜晤、大慶仕候、扱は御内話一條、其 君候、今朝福閣へ御出、御存分御申達被成候處、至極御尤之筋に承諾被致、今更通信通商等御許容被成候而ハ、外ハ魯夷、内ハ列侯へ被對、御信義を御失被遊候段、台慮も有之儀故、決而左様之義にハ不相成候間、彼ハ不法之舉動有之候ハ、其時こそ過日之御觸通り御心得可然云々、立派の御返答之由、元より右様之御懷とハ奉恐、察候得共、如何にも平穩々々と世上一般申ふらし候間、如何成平穩ニ成可申哉と、御同意甚苦心仕候處、御立場がらの御方へ、立派に右様御返答御坐候のみならず、阿因兩侯迄の御傳達も御坐候上ハ、實以爲國家恐悅無此上、畢竟其君侯格別の御精誠に被爲渡候ゆへ、右様慥なる證據を御聞被成候段、毎度奉感服候、右ニ付、

御廟算尙更御確定の御一助と御了簡被成、御近縁之廉を以、熊本侯へ云々の御打合せに相成候由、逐一無殘處御義ニ御坐候、長岡方の模様、外三家衆迄ハ及び兼候由、遺憾ニ御坐候得共、長岡も漸々海防一手のみの請負にて、醫師ニたとへ候得ハ、外科持前之外ハ手を出し兼候様子ゆへ、左も可有之、とかく有志の諸侯・有志の藩士ハ、皆外科一偏、洪嘆之至ニ

安政元年二月十二日

六一

御坐候、此節立花侯老寡君へ逢被申度よし御申入有之處、御逢ハ不被申候得共、右様御申入有之上ハ、定而和議御主張にハ有之間敷奉存候處、貴考如何、藤堂侯杯は専ら和議の論御申越に御坐候、被懸貴意縷々被仰下、大慶仕候、御厚意ニ任せ燈下書ちらし候段、御海恕可被下候、頓首、

二月十二日

二白、福侯御答の立派ハ實ニ可喜候得共、一昨日應接之風聞は、扱々笑止千萬ニ御坐候、尤幕の内の事ハ外官^(マ)へハ分り不申候得共、衆人の見る處如何にも不堪切齒候、定而御聞も被成候半、ばつていら廿八隻計にて乗込、海岸ハ應接場まで一町計の處、彼異人とも貳行ニ劍付銃にてびつしりと固め、其中をペルリ夷等奏樂にて上陸、此方ハ案内に出候ものも、何となく彼等ニ警固被致候姿のよし、扱又下官ども處々我儘ニ步行、小倉の陣所等へ入、弓鐵炮等を圖ニ取、其外婦人等追かけ候よし風聞、虚實は不詳候得共、苦々敷事共ニ御座候、腹中に戰を含ミ、顔色を和らげ懸合候ハ、彼も自ら承服可仕處、腹中も顔色もたますに計か、り候而ハ、ますくのられ可申哉、御覽後御投火可被下候、別啓、一昨日應接之時、墨夷中ニ此節死人出來候間、海邊へ埋め申度願出、種々押合候得共、遂ニ彼カ願通り、横濱某寺へ爲葬候筈ニ答候よし、最早御府内近海の地へ、夷人の墳

横濱應接ノ
批評

墓迄ハ出來申候、右をえんにいたし、如何様の事を巧ミ可申も難計、あまり御手ゆるき様奉存候、是ハ其 君侯へ御申上のみ、先御他言被下間敷候、以上、

又啓、尾州殿には中々正論に被有候、毎度感服仕候、其 君侯ハ御一通被遣、御月番之廉にて上田侯へ一書被遣、上田侯ハ福侯同様之御答出候ハ、尙々確定可仕哉、尾州へハ道路隔遠候得共、當節の模様にてハ、尾州往復位の日限随分御間ニ合可申歟と奉存候、敵藩カさそひ候ハ容易候得共、夫にてハ却而不宜様愚慮仕候、分外の愚存、御投火可被下候、

鞞 負 様 拜 復

誠 之 進

〔福井藩士中根鞞負書翰〕

○改訂肥後藩
國事史料所載

○二月十二日熊本藩家老長岡監物宛

今朝初而拜晤、高諭共相伺孔幸存候、其節及御内話候通り、今朝福山侯へ御出御逢對之上、段々御存意通り御申陳ニ相成候處、御尤ニ御聞受よて、扱御答之趣ハ被仰述候通り、外ハ魯西亞、内ハ列侯へ被對候而も、交易通信等御許容相成候而ハ、御信義不相立候趣、左様之儀を決而無事よて、夫カ爲に彼より不法之舉動ニ及候得と、御觸通りニ御心得被成候而宜旨、御立派之御返答御座候由よて、越前守様よも聊御降意之旨相伺申候、右ニ御周旋之

正弘慶永對
談ノ狀ヲ報
ズ

安政元年二月十二日

六四

御心組も可相成哉ニ奉伺候、一應内啓仕置候事ニ御座候、匆々已上、

二月十二日

中 根 鞞 負

〔上書折巻〕
長 岡 監 物 様

〔内啓親展〕

〔熊本藩家老長岡監物書翰〕

○改訂肥後藩
國事史料所載

○二月十二日福井藩士中根鞞負宛

拜讀仕候、如諭今朝は初而得拜顔、大慶不少奉存候、扱今朝尊君上福山侯御應接之御模様、心得にも可相成と御委細被仰下候趣、夫々奉敬承候、天下之御爲誠奉恐悅候、此方様思召之處ハ、未た如何様とも得貴意候程之處にハ至り兼候間、迫而御模様ハ可申上候、先は貴答如此御座候、不具、

二月十二日

中 根 鞞 負 様

貴 答

長 岡 監 物

〔福井藩士中根鞞負書翰〕

○肥後藩國
事史料所載

○二月十四日熊本藩家老長岡監物宛

拜誦仕候、先以愈々御安寧被成御盛務奉拜賀候、然者過日罷出、御内話申上候趣、早速尊君

上へ被仰上候處、御尤に被思召、猶御勘考可被爲在御旨御座候由、則、昨夕此方様へ御直書〔前二摺之〕を以て傳進候趣、御沙汰も相伺候事に御座候、將又此頃御内命にて罷出候事故、爲御請御書も可被成御座候處、御用多にて御延引相成候段、御丁寧被仰越候御紙上之趣、具に拜承仕候、早速可申上候間、御不參之段、決而決而御懸念不被成御座候様奉存候、右尊報如此御座候、草々已上、

二月十四日

二白、昨夕者福山侯より小船御固之極御内意も被仰出候由、嘸々御多務之儀は不及申候、御不審奉拜察候、何日異船之模様も、例之平穩、明日は献上物も差出候趣、名は相顯れ不申候得共、實は返信之姿には無之哉、貴慮如何、

中 根

長 岡 監 物 様

奉 復

〔昨夢紀事〕

一、二月十一日未明に、藤田誠之進の許に到りて初而及對面たり、扱此比主税か承りたると、神奈川細作の密書と犬牙齟齬之次第を物語、目今の廟議如何と推問せしに、老公の仰

安政元年二月十二日

六五

中根鞞負藤
田誠之進ヲ
訪フ

せの次第ハ、今以主税に告たる如くなれとも、誠之進か遣し置たる探索方々承る處も同じ趣にて、畢竟應接方ニ而は二ヶ條許諾相好居候事候へハ、各老始(前)の申され候事ハ不承知なから畏り居候ても、又變遷も難計、神奈川にてハ先日井戸罷歸候而も、矢張和議の説被行候由ニ候へハ、下戸の者へ酒を飲むへく申付候而も、兎角酒をやめて菓子に相成候半も難計、此上は弊藩之老寡君(徳川幕府)にては六ヶ敷、老寡君も參謀とは申條、譬へハ外科醫者の如く、刃鍼を刺し金瘡を縫ふ如き人の嫌惡する外療にハ用ひられ候へとも、内服藥餌の相談にハ加はられぬ事多端にて、不都合も不少、其上耳遠にも候へハ、事情の委曲に至つてハ聞誤らるゝ事もなきにしも候はず、只今之處にてハ、何卒越侯の御周旋相願度候なり、且不外御近親と申、細川侯へ被仰談とも被仰立候半にハ、幕府の御聞受もよろしからん歎といへり、又云、此比於屋形浦應接の節、彼か申せしハ、通交の二條御許容無之ハ定而國王の尊意なるへし、貴所達の一存にハあるへからず、若左あらんには承服にハ及びかたし、實に國王の尊旨ならハ其信牌を給はるへしといへるよし、應接方に而ハ信牌を遣してハ夫切の事故、直様如何なる變事到來も難測、林祭酒も大に困究にて、分らぬ事を漢文に認て遣したる由杯を物語れり、師質罷歸て右の趣申上たりしに、公御眉を蹙せられ、如何なされんと思召煩はせ給ひしか、阿州侯・因州侯ハ兼而仰合たる御事も坐せハ、左(前二編之)の通被仰

藤田慶永ノ盡力ヲ希望ス

進、

前略、然は今般異國船渡來、○中略、

右ニ付、阿州侯ハ未刻過、因州侯暮時前御出あつて、被及御内談しに、兩侯素々御左袒にて、閣老衆へも今日御會議御同意之段、被仰達様なされ度、且自然閣老衆之口氣(つ勝之)よては、阿侯も御相對あつて御説破あるへしとの御談寄にて、初更比御退散、

阿州侯因州侯來ル

一、公師質を召て、公にハ明朝福山侯へ被爲入、可被仰立候得共、誠之進か申せし如く、外様方も申立候方可然、細川家之長岡監物ハ聞えたる男なるか、幸此節爲海防出府致居事されハ、罷越可申談との仰ニ付、師質申上げるは、主税方嘗而承候は、此節熊本侯へ御書成共被進、御獎勵被爲在候様願はしき由、夫も監物も拜見して參謀すへき様に被爲在度と、監物より主税へ内談せし趣にも候へハ、此度屈竟之御義にハ不被爲在哉と及言上しかハ、公もさる事あらんにハ猶更の事なれば、書翰をも遣はすへけれハ、師質にも明朝監物か許へ可罷越との御沙汰ありき、熊本侯へ被進たる御直書左之通り、

一、翰致拜啓候、春暖の節、先々愈御清安珍重奉存候、○中略、

一、二月十二日、公福山侯の邸へ御出、御指懸り被仰込、御逢對ありて仰せられしハ、○中略、

○以下正弘トノ對談記事ハ、前掲ノ合同舶入相秘記ニ載スル所ト略々同文ニツキ、省略ス。

一、今朝仰によつて、師質熊本藩の長岡監物之許へ至りて、此比神奈川の風説の如く、萬一通信交易御許容ありてハ、諸侯も可及解體趣、海防當路之四家熊本・岡山・萩・柳川を申立あらハ、大に廟算を裨益すへしと 思召ニ付、幸熊本侯ハ御近親にも坐せは、御直書前二通之を以被仰進たる儀も有之、監物へも御相談可有之條、何分にも十分御昇力被爲在候様に、監物相心得、可致周旋旨の御趣意なり、右尊慮之趣を監物へ申傳へたるに、監物畏り、乍恐御至當之思召と奉伺候へは、侯へも申上、被仰談も御坐候ハ、精々盡力可仕、乍併三家之御方々へも被仰合候儀は如何可有御坐哉、監物限りに奉畏段は難申上趣、御請に及ひたりき、

長岡監物は細川家之長臣三家之一にて、九州之名士なり、文武の心懸厚く、廉介剛正、賢を愛し、士に下るの聞えあり、去夏來海防先鋒の惣督を被命、此度手勢三百餘人を引率して、弓鐵炮長柄等皆其手の足輕にもたせて、數百里の行程を押陣の體にて參府せり、長々の出府中、陣中同様士卒と食を共にせしかハ、監物か手の從類は、肅然として一人も不足をいふ者なかりしなり、今は執政の職を辭して、防禦の一方をのミ受持たれば、周旋の委曲に至つては、盡し兼る處もあるよしを物語れり、年のほと四十未滿、容貌溫和、小語低聲にして、圭角更に表に顯はれずといへとも、慷慨の氣あまりあり、應答殷懃にして、絶て大身踞傲の風ある事なし、御兩家の御親睦の事につきても、御内治御行届

の事杯を申出て、深く吾 公の御徳誼を景慕し奉れり、方今事務の談論等も漸其要領を得て、只管國體の損せん事を憂ひて、士氣の衰弱を嗟嘆せり、

一、公御歸殿の上、福山侯御返答之趣、誠之進前二通之監物へも可申越旨、仰によつて申遣したるに、誠之進前二通之か返書如左、

芳翰拜誦、如諭昨日は始而得拜晤、大慶仕候、○中略

一、二月十五日、如例御登城あり、於營中柳川侯立花鑑寛へ御逢ありて、此比阿・因兩侯御談にて、福山侯へ御對話之御次第、且細川侯へ被仰遣たる趣をも御物語ありしかハ、侯も大に御同心にて、幸ひ明日福山侯へ御相對の御序も坐せハ、其刻御申立あるへしとの御事なりしとぞ、
○其後、慶永、神奈川派遣ノ課者ノ報告書ヲ閱スルニ、横濱應接ノ内狀、阿部正弘ノ答フル所ト大ニ相違ス。爲ニ頗ル憂悶シ、屢々侍臣ヲ派シテ正弘ニ質疑セシム。次ニ其史料ヲ收ム。

〔合同舶入相秘記〕○松平慶永手記 内閣文庫所藏本

二月十八日、遠西三月十六日、
先日我等及逢對候節之勢州話と、又淵藏野村々申參り候趣意と、如何にも天淵之相違ニ付、我等二も日夜不安心候へ共、誠分明無之事ニ候ゆへ、表向承候義ハ出來不申候事故、内々鞞

安政元年二月十二日

七〇

負辰ノ口ハ罷出、藤田與一兵衛迄談見候ハ、少しも相分り可申との鞆負見込ニ付、及指圖、鞆負辰ノ口ハ罷出候、藤田與一兵衛へ逢、申聞候ハ、先日越前守様被爲入御逢對之節、御談話之趣ヲ決る御疑被成候之御尋向ニハ無之候へ共、何分應接方ニ於るハ、頻ニ交易通信等相許し不申候半、彼も承服致間敷と之事ニ、其説大ニ行ハレ申候趣、内々金川邊へ探索ニ遣置候者ハ申越候ニ就ると、甚御案思被成候義ニ御座候間、尙又貴前様迄内々伺候様被仰付候由申述候處、與一兵衛暫ク相黙し居、何分伊勢守様へ申上、御内々伺見可申段申聞、其座を退候由、無程與一兵衛罷出、鞆負へ申聞候去、

伊勢守様へ相伺候處、御尤之御儀ニ被思召候、極々機密之儀ニ、難申事ニ候へ共、左程ニ御苦惱被成候事故、

廟議之根元相漏し候、元來本法ニモ申候へ共、今度之様ナル御措置と、誰しも快く取扱候儀ニるゝ無之、泣血不得止次第ニ、切齒憤悶ニ堪へ兼候事と申もの、乍去只今諸有司ハ勿論、諸侯之内交易を唱へ候ものも有之、御國威を示し度と申ものも有之、半々ニ相成居候事故、何分ニモ今度ニ平穩ニ爲濟候積、昔ニ候ハ、獻上物も御返却ニ相成、拜領物も無之筈ニ候得共、前文之次第ニ付、不快事ニハ候へ共、右之通り候、乍去通信交易と、とよ迄も御免無之事ニ候、併先月中旬ハ渡來長滞留相成候ニ付、彼ニるゝも失費不

少儀ニる候間、當年限り石炭ハ爲雜費被下候、尤渡場所之儀ハ長崎之積之よし、此五ヶ年之間通信交易御斷之儀ハ、彼ニるゝも致承知候、五年之間、若難風力其他ニるゝも、食量^食水石炭等相願度候ハ、蘭人之手を以テ相願候様可仕、且又世上ニるゝ如何申ものも難量候得共、是等之儀ハ、悉ク水府前公と御參謀御同意迄之上ニ候、勿論 廟議ハ井戸・林を始、應接方之模様と相替し儀も無之、應接方ニる自儘之取計致し候儀有之間敷、其子細ハ一々加奈川應接方ハ伺出候義ニ候間、極密之儀ニ候間、内々越前守様へ申上候様可致旨、與一兵衛申聞之、

〔昨夢紀事〕

一、二月十八日、右等之次第にて、過日福山侯の御應接とハ懸隔之儀ニ付、公御憂勞の御餘り、急度なく福山侯臥内之寵臣藤田與一兵衛迄内談致試候様、師質へ被仰付候ニ付、此夕、福山侯の後宮へ參上して與一兵衛ニ逢ひて、去日侯の御對談之御次第を御疑惑あつての御尋問にハ無之候得共、何分應接方は頻ニ交易通信御許容無之而ハ、彼等承服仕間敷と申説のミ大に行はれ候趣、内々神奈川邊へ遣し置候探索方ハ相聞え候、夫ニ付、深く御案し思召候ハ、應接方之面々表向閣老方へハ品能く申上置、應接之上に臨ミ、無餘義譯を以御許容之運ひに取計候事には無之歟、萬々一さる次第に相成候而ハ、上下御同心にて御許

安政元年二月十二日

七一

容に相成よりも御不都合の次第に可相成歟、此邊如何之實況候哉、與一兵衛か知りたる限り、將考量の筋もあらへ承り來るへしとの御内慮なるよしを申談たりしか、與一兵衛暫く考へて、いつれにも御内々候へ伺ひ申すへしとて引入たりしか、良ありて出來りて申けるへ、御内々申上たりしに、公の左程に御案勞思召御儀候へハ、極めて機密の事に候へと、廟議の根元を御洩らし被成候よしにて、元來今般の御措置ハ正論にて申候へハ、誰かは快心に取扱可申、泣血漣々不得止事次第にて、實に不堪憤悶御義候へ共、當今諸有司ハ勿論、諸侯の内にも、交易を唱候者有之、又

御國威を示すへしと申者も有之、評議般々に相成候故、何分にも此度之處ハ、只管平穩に御濟セの御廟算之由、昔時候へハ献貢も御不納、賜與も無之筈候得共、前條之始末故、御不聊なから是式之儀は被取計候由、乍去通信交易之儀ハどこ迄も御許容ハ無之候、まかし彼も去月中旬々長々之碇泊、失費も不少ニ付、當年限石炭之儀は雜費の料の方へ被下筈、尤於長崎御渡之御積之由、通信交易の御返答ハ、五ヶ年之間御斷之事ハ承伏にて、もし其年限中に、難船又は其他にも無余義譯にて、食糧薪水石炭等蘭人を以相願候へハ、被下置筈之由、世上之浮説ハ種々難量候得共、前件にて悉く水老公も御參謀、御同意之上之事に候由、尤應接方よりは一々伺之上取計にて、廟議と齟齬すへき事はあるへくも候はず、兎

阿部正弘廟
議ノ機密ヲ
漏ス

角の義も明日の應接にて治定致すへきなれば、今日の處は、先ツ此よしを御内々御答被仰進との御事なりき、さて與一兵衛かいへるは、異船も遠からぬ程に退帆に及ふへきやうに聞え候なり、されと日限ハ彼より前以は申出ぬ習ひにて、二三日となりて申達する振合なるよしを物語れり、

一、御廟算右之如くなりしに、廿一日にハ應接方出府して、營中も殊之外騒々敷、廿一日・廿二日ハ閣老衆の御退出も初更を過て、事のさま唯ならず見えたり、

又細作の密告せる趣も左のことし、

一、五ヶ年の間、長崎にて、石炭食糧薪水等望の品與へ候由、又五ヶ年後ニ至り、湊を開き交易等致候事ハ、それハ其時の模様により相定候段、彼へ申聞候處、彼致承知候様子御坐候、又願之内湊を吟味致置度候ハ、其儀ハ勝手次第、伊豆なり越後なり致吟味候様相許候由、

一、彼申候ニハ、石炭等被下切ニ而ハ御貰ひ申かたく候、何ぞ替を差上度と申候ニ付、左候ハ、他の物ハ入用無之候間、金銀錢を指上候様申聞候由、右之儀ハ、此度應接方の極意と奉存候、先唯今之處ハ、右之次第にて相濟候様子に御坐候、但、是迄十九日朝探索

細作口達ニ云、此金銀錢をくれと申事甚思ひ入にて、彼方も中々澤山にハ無之様子、されハ夫は上げられぬと申、それあれは石炭もやらぬと申積之由、又云、此工夫手前免狀、趣向倒れにて、行不申事ハ末へ記す、

一、彼兼而申候にハ、相分る事ならハ一日も早く分り候様致くれと申、左候へハ、一艘歸帆爲致度と申、左もなく候へハ、追々國元ハ軍艦差向候筈候間、其先へ指越度と申候儀、右之儀ハをどし候哉實事候哉、相分り不申候、

廿日附
一、十九日應接有之處、落合不宜、二時計もかゝり相濟、右ニ付、明廿一日應接方に而ハ、組頭黒川外ニ御徒目付浦賀與力伊豆下田へ出張致候筈、彼ハハブカナン將官軍艦二艘にて下田へ罷越候筈、夫故下田ニ而も當月一杯ハかゝり候沙汰ニ御坐候、委細之儀ハ明日迄に相分候と奉存候間、明日御人御遣し可被下候、

細作口達書、此應接不落合と申ハ、應接方々下談之通り、五ヶ年之間ハ長崎とやりかけ候處、一向承知不致、松前を望候由、是ハ案外之事ニ而行詰り候へ共、何分深き工ミ有之事と察候、夫ハならぬと申、段々六ヶ敷相成候處、彼ハ申候ハ、夫なれハ是非に不及、兵端相開可申と申出候處、林・井戸餅の咽喉へ詰りたる如く目を白黒する計にて、返答ハ不出、甚恐怖之體ニ無言、笑止千萬之體ニ付、組頭黒川嘉兵衛袖をひき、何分伺

之上ニ可致と相談して、此日は相濟由、夫故先ツ下田見分と申處ニ、黒川注を付候由、

此日ヘルリ初おそろしき顔色をいたし、談し合ふてハ致返答候由、傍觀人之咄之由、

一、十九日、異人へ御饗應ハ余程御丁寧之由、

一、廿一日、早朝井戸・林江戸表へ罷越ニ付、神奈川出立有之、應接方黒川其外下役之者、

下田へ罷越、

一、二月廿三日、昨日鈴木主税出府して、神奈川邊之風説事情、大約細作密告之次第申上しに、過日、福山侯御應答之趣とハ天淵之差違ニ付、

公も御慨歎之餘り、猶又幕府の御内定を被爲聽度と、今朝、主税を藤田誠之進か許ハ遣はされたるに、誠之進かいへるハ、極めて御厄運指迫り、恐入りたる御時態とハありにたり、既に去ル十九日應接の節、石炭ハ下さる間、於長崎表可受取と申聞しに、長崎は好ましからす候へハ、松前にて御渡あり度と申ニ付、松前ハ大名の國ふれハ、此處にてハ取極めかたしと答へたれハ、さらハ願ふ事ハ惣てかないかたきと申ものに候へハ、不得已事手荒なる取計にも及ふへしと申出せり、此時應接方之面々、勝手次第たるへしと衝き放して答へたらハ善かりしに、左ハなくて、一向に窘迫し、言吃して出す、漸くにして江戸表へ伺ふへけれハ、來ル廿六日迄延引すへし、伊豆の下田は石炭の渡し場所として如何あるへき、

鈴木主税ヲ
シテ藤田誠
之進ヲ訪ハ
シム

廿六日迄の暇に下田へ行き見て見分セはよからんと遁辭せり、扱廿一日に歸府して、幕府の御評議となりしか、此等の事老寡君ハ一昨日初而承知いたされし故、大に激怒を發せられ、何分林・井兩人之取計ひ以外の外不宜候間、應接人を取替へて成とも、下田ハ勿論、松前も難適候間、何分にも長崎迄受取ニ可罷出と説得してしかるへし、もし其儀不服にて、彼方兵端を開き候ハ、心力を盡して可及防戦と建言せられたり、又昨朝、阿閣迄内書を差越されたり、其答へハ、松前も下田も難免、是非長崎にて請取候様申諭さん事も、舊名目の應接方兩人ニ而ハ難叶事故、林・井二氏ハ切腹にても被仰付、輕易の應接に及ひたる罪を鳴らして墨人に謝し、幸に長崎へも罷越、夷情ニ通し、且老練成筒井肥前守・川路左衛門尉を出して、先度の應接不行届の次第を一洗に取懸り可然との御事ふりしに、いまた阿閣方之御返答ハ無之よしにて、御内書の御草稿をも見せたる由、誠之進又云、公邊にても阿閣杯ハ、此度の屈辱は致し方なければ、今後におゐてハ越王勾踐の臥薪嘗膽の勢ならては難適と申おかれ候由候へと、誠之進かおもふには、臥薪嘗膽尤願は敷事にハ候へ共、當今頻に膽薪を被唱候ても、目前之患を逃避する口實とありて詮ふし、他日の事業に驗すへしといへるよし、主税罷歸りて申上たり、

一、此日、御内書御頂戴の御禮として御登城ありしか、於 營中佐倉侯 堀田備中守 へ御逢あ

下田許容ノ
内情

りしか、此人ハ何にしても當時兵端開けてハ適ふ間敷由を、頻に唱へられたりとぞ、其他營中の風説に、筒井・川路の兩氏ハ、於長崎表魯西亞への應接は惣而御舊法を以て申諭し、御國威を墜さ、りしに、歸府の上、御膝元ふる墨利堅の御取許ひを見て、大に驚歎せしとぞ、又一説、林・井二氏下田の事を申出せしハ、兩氏杜撰の意見にあらて、内實は閣老衆の兩人へ被命し時、爲んかたなくは下田位ハと、何となく申されたる事もあれハ、閣老衆にてハ強ち二氏を咎め得ざるの勢ひなりとぞ、又一説ニ、閣老衆下田の事をいなひ申されしかハ、井對州左候はんには應接ハ御免下さるへしと、(前カ)唯彼理と刺違へ候へしといへる故、止事なく下田の事も許されたりとぞ、

一、二月廿四日朝、福山侯へ被進たる御内書如左、

前略、然は風説に承候へハ、伊豆下田港へアメリカ船二隻、石炭御渡場爲見分罷越候由、左様相成候而ハ、十分彼か勢ハ益猖黠ニ募り、實に

皇國存亡之分判、御當家御興廢の秋と、切齒苦慮不啻奉存候、機密之儀相伺候て、必竟出位之多罪候へとも、日夜御案し申上候餘り、御内々御垂諭被下候ハ、聊安心の途も可有之、就夫又々申上度事も御座候間、何卒被仰聞被下度奉存候、御返答書御六ヶ敷候ハ、靱負可差出と奉存候、下略、

阿部正弘宛
書翰

安政元年二月十二日

七八

右御書を、師質福山侯へ持参せしに、已ニ御登城後となりしかハ、老女花井へ渡し置て退出せり、此夕、細作密告如左、但、細作出府、於江戸表之探索ニ、

一、一昨夜廟堂之御策、伊豆之下田におゐて塗物之類・反物之類・鐵炮・刀・槍被下候積相成由、右銃炮・刀・槍之儀ハ、御役方々私に被遣御積之由、右御評義相定候而、昨夜林・井戸出立致候由、被下候銃炮・槍ハ、昨夜神奈川の方へ相廻沙汰承り申候、尙々本文之趣、御徒目付々出言之由承候間、申上候、

細作之者の口達せるハ、交易品願ハ反物・塗物にて、銃炮・刀・槍ハ無之由、是ハ年々被遣にてハ無之、此度限り御役人々自分音物之由、鐵炮ハ三十目・二十目・十目三挺之由、刀ハ白鞘之由、二振、槍も二本、何れも鈍刀のよし、何分下田にて交易ニ決候由、黒川嘉兵衛下田へ黒船連れ行き、彼是手間取、其内ニ此表御評義相決候積之由、

一、二月廿五日朝、又主税を誠之進か許に被遣たるに、誠之進か申處も、愈下田に決したる趣にて、松前の事も來年ハ見分に來るへしと答へんとの事にふりて、最早挽回すへくもあらず、廟議之趣も、此度の不都合ハせんかたなし、今後ハ屹度思ひ立すしてハかなふへからすといへる如く、云ひ甲斐なき事になりたりと、歎息せりとぞ、

一、此夕、福山侯々昨日の御返答あるへしとて、師質を召されて参りたるに、例之與一兵衛

を以て仰聞けられしハ、今度亞墨利迦船御處置之事ハ、於公邊も閣老衆御初、一同御殘念にハ候へとも、無余義御場合に迫り、水府老公御始、御一同之御決評に有之よし、初の御廟算ハ、此頃被仰進たる如くなりしか、又十九日の應接に、彼より繪圖を出し、本國より支那へ通航便宜の爲に願出候事なりしに、長崎にてハかくのどく入込たれハ、態々參候はんにハ相なりかたく、甚不便之事にて、更に願意に適ひかたく候へは、琉球・松前・浦賀・下田の内に而御わたし下さるやうにと申せし故、左様成事ハ相成かたきよし申候へは、さらはせんかたなく候へハ、兵端にも及ふへしと申付、さほとまてに存込たる事に候ハ、江戸表へ參向して伺ひ來らんと申聞せしかハ、夷人共申立しは、此事ハ昨年退帆の節より、當年御返答伺に參候事は、御約定に及ひおきたる事なるに、かくのどく御手間取に相成事ハなき筈なるに、合點行すといへる故、應接方にて、如何にも尤にハ候得とも、我方におゐてハ、かねて長崎と取極めおきたる故、ケ様の次第となれるよしにて、申宥め候ひぬ、初め彼より松前を願候節、彼の處ハ兼而内々交易の事もこれある故、願ひ候よしを申せしかと、さる事あるへくもあらずと押付而、我國王も松前にて許容致度と存し候へと、松前ハ大名の國ふる故、心に任せすと申せしに、さらは是より松前へ行き、志摩守へ懸合ふへしとの事なりし故、左様いたし候ても、松前より又江戸へ伺ふ事とふれハ、夫而已にてハ事

安政元年二月十二日

七九

調ひかたしと申諭せしに、さらハ如何すへきやといへる故、此方にてとりしらへ返答すへしといへハ、遠方に候へとも、來年までには事分り可申候へハ、來春御返事伺ひに參り候半と申せしよし、琉球の事は手遠ふる旨にて御斷りなりしに、是は快よく致承知、取下り、通辭へ申せしハ、琉球も内々にてハ事濟居候へとも、表向にて濟寄候へハ、猶更心持宜故、申試みたるなりと、物語りしよし、昔日の

御威勢候ハ、猷貢も御斷り、少々の賜與にて事濟へく候へとも、何分當前の形勢、交易を唱候者も有之、拒絶を申立候者も有之、諸有司を初、諸大名共銘々各々と相成居、加之武備も未だ完全にも至り兼候折柄故、御殘念ふから右等の御處置ニ相成候得とも、いつれに諸大名初め、一同固結御嚴備にも相成候上ハ、御取計ひ方も可有之、又浦賀下田の事はふるへき丈ヶ遠き方宜しからんと、下田に決し候へとも、此兩端の利害得失ニ付、種々の御評議ありて決しかねしかと、遂に下田に治定して、大學頭、對馬守も引取たれハ、明日の應接にてハ多分落着すへけれハ、無程歸帆にも及ふへきとの御旨なりき、爾後細作密告如左、

課報

一、十九日應接大意、彼云、交易之儀、御制禁之儀候ハ、強而願ひは不申、去ふから船中致難澁候節、石炭食糧薪水相願候而も、御取上無之而ハ、不仁之國と存候、左候へハ是非なく戰爭に及ひ候と申、我云、船中石炭食糧薪水等乏敷候而、致難澁候節ハ與へ候が、長

崎表におゐて相願候へハ、願之品與へ候由申聞候、彼云、長崎は好みにあらず、長崎表へ參候事なれハ、清之國へ參候へハ、如何様にも相成候、只日本東海邊よはより處無之故、松前と江戸近海ニ而願ひ申候と申、我云、長崎ハ是迄諸國の應接場にも候故相叶ひ候か、其外にてハ六ヶ敷と申、彼云、いよ／＼松前ハ江戸近海之處御取上無之候ハ、是非戰爭に及ひ候と申、我云、其義は即答難申と申、彼云、昨年々東海之儀願置、且御重役と申、其上此度之義に付御出張被成候御方にて、是程の事御即答難被成とは如何之事と、いろ／＼責かけ、何分にも只管御即答承度と申張候、我云、我方ニ而ハ長崎ニ於て相渡候積りに定置候、且昨年之願に、此處か彼處かにてと、さしての願にも無之事故、何の處か宜敷とも吟味致し置かす、夫故即答難致と申、彼云、左候ハ、早速御調らへ被下候様申候、我云、來る廿六日又應接致候段申、彼云、別に二ヶ條申上候儀有之候へとも、今日は不申と申候由、

一、應接中、彼云、一ヶ處相定候得ハ、漂流人ハ格別、其外ハ御定被成候より外へハ指出し不申段申候、彼又云、松前ハ如何、我云、松前ハ大名之國にて六ヶ敷と申、彼云、左候ハ、相談に罷越候と申候由、我云、浦賀ハ如何、彼云、浦賀は舟掛りあしく、且湊狭く候故、不好と云、我云、伊豆の下田ハ如何、彼云、下田は見分いたし候(度脱)と申由、右ニ付、軍艦二艘、

廿二日神奈川出帆、下田の方へ罷越候、

一、廿一日、右之儀ニ付、井戸・林江戸表へ罷越、御城におゐて廿一日・廿二日御評定有之由、御評議大意、應接方より承候御老公にハ、長崎の外に異國の港を開き候事、御好み無之付、種々御議論被仰出候處、應接方云、左候へは手切之挨拶仕候、然ル時ハかならず戦争に及候間、早速諸家始へ、御嚴重に御備へ有之様、被仰出置候へと申候、然ル處、閣老方始諸有司云、今戦争に及ひ而ハ天下の大變に相成候間、先場所丈ケ之事あらハ、何方にても相許し、當時之處穩便に取扱ひ致候様と申候由、應接方又云、彼云、別ニ可申二ヶ條有之候と申候間、只今之處天下御大事の場合、其上諸家へも對候事有之候間、何分にも閣老方御出張有之様申立候處、閣老衆被申候ハ、致出張候へハ却而騒ケ敷相成候間、何分にも應接方にて取扱致候様と被申候由、應接方又云、左候ハ、參政の方々なりともと申候へ共、是又同様之挨拶之由、

一、廿二日、井戸・林神奈川へ出張有之、

廿五日付

一、廿四日、書取を以、石炭食糧薪水東海湊ニおゐて御渡被成候段、彼へ申越候由、彼大ニ喜ひ、左様相成候へハ、別ニ二ヶ條之儀も不申上とも宜候、此度ハ一艘出帆爲致、國王へも可申聞旨之挨拶之由、

一、廿六日早朝、フカナン乗り居候蒸氣船出帆致候、右フカナンハ異人中之悍雄之由、此者ハ戦争に及し度心中故、此度ハ應接にも不用候由、

一、來る廿九日にハ、應接方彼舟へ罷越、饗應有之由、此饗應相濟候上、退帆ニ相成候様子ニ御坐候、此節アータムス迎ひとして、神奈川迄參候様子に御坐候、

一、來月朔日にハ、横濱應接場におゐて饗應有之積之由、

○本月十九日・二十日・二十二日・二十六日、晦日ノ各條ヲ參看スベシ。

富山藩主前田利友出雲守 卒ス前年十二月二十日 是日、養子主計利聲○後主計頭○利友弟 家督ヲ承

ク。

〔老中申渡〕○内閣文庫所藏本 諸用留所載

○二月十二日富山藩主前田主計へ

扣久世廣周、老中 大和守申渡候書付、列座

二月十二日、

拾萬石

弟 松平出雲守跡

同

主

計

八三

安政元年二月十二日

八四
同道人 前田丹後守（新撰、七日市部志）

出雲守奉願置候通、主計儀養子被 仰付、遺領無相違被下之、

右今晚、於大和守宅、老中列座大和守申渡、大目付井戸石見守相越、
〔余書〕右十二日、持歸、

〔諸用留〕○内閣文庫所藏本

二月廿八日、

御白書院

松平主計

家督ノ御禮

家督之御禮、

〔溫恭院殿御實紀〕○續徳川實紀所載

二月廿八日、○中略、

一今已上刻御表に 出御、月次之御禮、其外御禮衆有之、○中略、

家督之御禮

松平主計

金三枚
綿三十把
御馬一疋

〔前田富山家譜〕○東京帝國大學所藏本

利保

小字啓太郎

實利謙二男

文化十四年十二月從五位下ニ被シ出雲守ト稱

文政七年十二月從四位下ニ被

天保九年十二月任侍從

弘化三年十月致仕改長門守

安政六年八月十八日卒享年六十諡ノ龍澤ト曰フ

室安藝守淺野齊賢ノ女

利鎮

嵩丸 早世
文政四年十月廿六日

利謚

祐次郎 早世
文政七年七月廿二日

女子

鑓 早世
文政八年八月十五日

女子

鐵 天保十二年五月二十八日卒

利文

鑢三郎 早世
天保元年十月廿二日

利繁

鑲之助 早世
天保元年十二月廿二日

利清

鉞之介
天保十年二月三日卒

女子

辰 早世
天保五年四月十四日

安政元年二月十二日

安政元年二月十二日

利友

小字鏑之丞 又啓之介

利保男

弘化四年從五位下ニ敍シ出雲守ト稱

嘉永元年十二月從四位下ニ敍ス

六年十二月二十日卒享年二十證ノ晴嶽ト曰フ

夫人不娶

利聲

房之助
爲利友嗣

利登

健之丞 早世
嘉永六年三月三日

小字房之助 後主計

利聲

實利保七男

安政元年十二月從五位下ニ敍シ主計頭ト稱

同月從四位下ニ敍ス大藏大輔ト改

同六年十一月致仕メ舞山ト稱ス

利保

利保、小字啓太郎、利謙ノ第二子、寛政十二年三月朔、江戸邸ニ生ル、母ハ某氏、文化八年閏二月、利幹ノ嗣トナル、十四年十二月、從五位下出雲守ニ敍任ス、文政七年十二月、四品ニ敍セラル、天保六年十月、封ヲ襲フ、八年、天下大ニ饑ス、利保封内窮民ノ爲メニ百方力ヲ

利友

竭ノ賑濟ス、大農豪商モ亦各食ヲ飢民ニ與フ、此ニ由テ道路餓孍ヲ見ス、利保國雅一首ヲ賦メ、大農豪商ノ仁惠ヲ施ス者ニ與フ、其歌ニ曰、アル、トシ何カツミセンウヒ人ヲ救フハ我ヲ救フ成計梨、九年、侍從ニ任セラル、弘化三年、致仕メ長門守ト稱ス、安政六年八月十八日、卒ス、享年六十、諡ノ龍澤ト曰フ、正室淺野氏、安藝守齊賢ノ女ナリ、女弘、備後守前田利義ニ嫁シ、女定、飛驒守前田利國ニ嫁ス、初メ利保其封内ヲ治ルヤ、先ツ奢侈ヲ禁シ、紀綱ヲ正シ、自ラ文學ヲ修シ、武術ヲ演シ、以テ文武ヲ振作ス、且ツ教官ヲ勉勵センカ爲メノ故ニ、履校約言ノ撰アリ、時ニ白井流劍術・駒川流劍術・起倒流拳法始テ之ヲ演武場ニ備フ、致仕ノ後、最モ國雅本草ヲ嗜ム、海野遊翁ニ從テ歌學ヲ受ケ、小野蘭山・巖崎常正ニ從テ本草ヲ學ヒ、宇多川榕庵・畑中善良ニ就テ洋學ヲ受ク、是ヲ以テ皇漢洋ノ書、本草ニ干涉スル者該覽セサルハナシ、猶且ツ封内ノ諸山、遠トナク邇トナク跋涉セサルハナシ、跋涉ノ間、七十以上ノ老人有ル毎ニ、輒チ必ス金穀若干ヲ與ヘ、以テ優待ス、然ラハ則唯本草ヲ窮ムルノミニ非ス、亦能下民ノ情狀ニ通セント欲テナリ、其著述スル所、本草通串暨ヒ本草通串證圖・袖珍鑑等若干篇、國雅ハ則國領・專門・神用晶々・天門推明方・專門露々・山途蠹々等若干篇、利友、小字鏑之丞、又啓之介ト稱ス、利保ノ長子、天保五年二月朔、江戸邸ニ生ル、母橋本氏、江戸處士某ノ女、弘化三年十一月、封ヲ襲フ、四年、從五位下ニ敍シ、出雲守ニ任セラル、嘉永元年十

安政元年二月十二日

安政元年二月十二日

二月、從四位下ニ敍セラル、六年二月、土風ノ交弱ニ流ル、ヲ憂ヒ、乃チ武ヲ講シ兵ヲ鍊ス、十二月廿日、卒ス、享年二十、諡ノ崎嶽ト曰フ、

利聲、小字房之助、後主計ト改ム、利友ノ弟ナリ、天保六年二月十七日、江戸邸ニ生ル、母橋本氏、嘉永六年十二月、利友ノ嗣トナル、安政元年十二月、從五位下ニ敍シ、主計頭ニ任セラル、是ノ月、從四位下ニ敍シ、大藏大輔ト改稱ス、文學武術一藝アル者、之ヲ左右ニ置キ、自ラ文武ノ業ヲ修ム、最モ武ヲ嗜ミ、自ラ鑛匠高川某ニ命シ劍ヲ鍛セシメ、鈍銳ヲ察識シ、百鍊ヲ經サレハ用ヒス、二年十月二日夜、江戸地大震、士民ノ宅舍震倒算ナシ、且ツ處々大火、時ニ邸傍近街ノ者、火切、救ヲ乞フノ聲、囂々邸内ニ聞フ、利聲直チニ板塀ヲ斫リ破リテ、皆盡ク之ヲ邸内ニ入レ、粥ヲ與フ、尋ヒテ其近街ノ民口ヲ計リ、米若干苞ヲ與フ、三年、一藩上下ノ服色ヲ定メ、侈靡ヲ禁ス、四年、家老富田兵部不軌ヲ謀ル、然レトモ事破綻ス、是ニ於テ兵部其罪ヲ謝シ自裁ス、五年二月廿五日夜、越中地大震、新川郡立山以南ノ大鷲山大ヒニ崩レ、澗ヲ埋メ谷ヲ塞キ、泉流通セス、四月廿六日、其山間ノ潜水潰決シ、十里餘ノ間、波浪淼漫、時ニ封内常願寺川邊ノ十箇村盡ク沙石ノ地トナル、爾後三年ノ間、其窮民ニ米二千石餘ヲ分與ノ之ヲ賑救ス、六年、致仕シ霽山ト改稱ス、男利篤、大和守松平直克ノ嗣トナル、

十三日壬午 外警ニ因リ、重ネテ近畿警備ノ狀ヲ幕府ニ問フ。

〔武家傳奏通達〕

○子爵脇坂安之所藏本
外寇京地御警備一件所願

○二月十三日京都所司代脇坂安宅へ

〔後明〕
坊城前大納言被差越候書付寫

異國船之義、先平穩之趣ニ候得共、〔不審多〕(嘉永六年十一月二十七日)先達る及御内談候通、異情難測義ニ候得去、萬一京地最寄之海岸に、不意ニ入船いとし候る去、實ニ當地不安之義ニ有之、右ニ付、御備方之義、御問合申入置候〔坊城俊明日記ヲ以テ補フ〕處、今以何等之御返答無之、唯々心配之事ニ有之候、關東差向御繁多之時節ニ去可有之候得共、何卒畿内近海防禦等、夫々之御模様、早々相分候様、御勘考有之度、再應之義ニ去候得共、及御内談候事、

二月

〔坊城俊明日記〕
水戸藩史料

畿内近海防禦ノ狀ヲ問フ

〔坊城俊明日記〕

○孝明天
皇紀所載

二月十三日、壬午、異國船之儀ニ付、從同役内々被示候旨有之、一紙案文被送之、依之殿下

安政元年二月十三日

傳奏通達發
令ノ理由

安政元年二月十三日

九〇

參向、以牧申入、一紙入覽、一昨日、殿下被仰候儀モ有之、御答申入候儀モ有之候間、如何可有之、併同役切角内々被示候事故、先可申達哉、可見合哉、申伺之處、左様之事ナラハ、申達方宜旨被命、過日同役ヨリ肥前守へ被尋合、所司代へ内々承之處、未關東ヨリ何モ沙汰無之由、從兩人書取ニテモ遣候ハ、都合宜夫ヲ以關東へ可申遣、所司代一分ニテハ難申遣由、肥前守同役方ニ來、申開候旨、依之一紙以書取、淡路守へ申遣、

〔京都所司代脇坂安宅上申書〕

○子爵脇坂安之所藏本
外寇京地御警備一件所取

○二月晦日老中阿部正弘等へ

〔采書〕
〔小奉書〕

異船之義、先平穩之趣ニ候得共、先達る被及内談候通、異情難測義ニ候得去、萬一京地最寄之海岸に不意ニ入船いとし候る去、實ニ當地不安之義ニ有之、右ニ付、御備方之義、猶又被及問合候、其御地差向御繁多之時節ニ去候得共、何卒近海防禦等、夫々之御模様、早々相分り候様、勘考有之度、再應之義ニ去候得共、被及内談候旨、坊城前大納言被申聞候、依之被差越候書付寫壹通、入御披見、此段申進候、急御評議可被下候、以上、

二月晦日

脇坂淡路守

阿部伊勢守様

牧野備前守様

武家傳奏通達

急評議ヲ求ム

松平和泉守様

久世大和守様

松平伊賀守様

内藤紀伊守様

〔東坊城聰長日記抄〕

○宮内省圖書寮所藏本

二月十四日、癸未、當番殘番之外、御用不差支様申合、已刻頃、可參關白殿被示之旨、當番以狀被示送、已刻頃、參關白殿、追々來會、〔實久、同七〕右大將、橋本前大納言・予・萬里小路中納言等也、直令出逢給仰云、昨日、所司代以附武士伺申、異國船渡來ニ付、京都警衛之事、先日被仰下于關東、何程之思召哉、内々伺申間、譜代武士可然、其上尾州或彦根之類、爲總督者可然哉、外様大國武士雖可有其望、不可然之旨、答給之旨也、一同譜代可然之旨、同心申了、其子細ハ、被近外様之時ハ、自然申乞將軍之宣旨之恐有之者歟、乘外夷猾夏之隙之聞非無之故也、又於關東於以大炮打拂者、直廻南海取淡路島、入攝津迫京師之計、見彼國之書、然則警衛雖固可有臨幸城郭歟、其城郭可在武家沙汰、而行幸之御、〔女脱力〕渡不具微之間、御日用之中、被減其支度可然、深可勘考之旨被命、一同申同心、賜酒飯之後、退散、
十九日、戊子、異船入津ニ付、京都守護藤堂和泉守、松平豐前守被申付、其餘畿内大名、所司

關白邸ニ集會シ京都警衛ニ關シ議ス
譜代大名ヲ任用スベシ

安政元年二月十三日

九一

遷幸ニツキ
議ス

代可催被申渡之由、水戸前中納言内々言上之旨、關白殿以一封、内々被示、參上御請申入了、
右大將來談、亞美利加國船雖在浦賀、自然可廻若州浦不可量、若州京師其間不滿十里、甚可
恐也、萬一之時可有御立退之旨、所司代申之間、其心得可然、關白殿被命之間、參集可示談
之旨、被命、直參内、大略之處、注一紙、了退出、

廿二日、辛卯、參關白殿、亞美利加着若州之時、御立退之事、所存以一封、内々言上、

天子難ヲ避、出御、是ヲ蒙塵于外スト唱候、行幸トハ大ニ趣意相違ノ候、名義甚不好事
候、當今ノ汚辱、後代迄相殘、何共恐入候、云々、略之、

直令出逢給、名義相汚共、不絕皇胤之方專一也、予申云、實ニ不得止之時ハ不能左右事也、
平日玉食大名、厚於奉守護、何難有之、只其上可從時權變之旨、言上、了直參内、雖神事中、
當番入魂爲別儀之間、設丸火、相役示談、御立退一件也、酉刻許、退出、

〔橋本實久日記〕

○東京帝國
大學所藏本

二月十四日、癸未、晴、辰下剋計、自殿下相卿各可參入示給、仍各直參入、
會給、内々示給有子細、依異船渡來、武家
内々申伺事、各承之、予參内、午刻
計、依番之、酉刻退出、御用閉之間、近
習公卿入加勢、

〔萬里小路正房日記〕

○孝明天
皇紀所載

二月十四日、癸未、殘番廣橋以書狀被示、只今殿下賜使、今日已刻頃御用不差支、當役可令參

上、御内談事被爲在由、被示、即刻參于殿下、衣橋本・東坊城等參上之後、令面會給、於梅此

間廣幡參上、直召一同御内談之事有之、午半刻許御用了退出、直參内、

遷幸ノコト
ヲ議ス

○中略、昨年已來度々異國船長崎并浦賀表へ來、乞求和親通商、武家警備モ無油斷由候得共、
元ヨリ蠻夷族類狡黠之性、如何成變事ニ及間敷共難申、萬々一皇都ニ近寄之節、皇居ヲ
可被移御手當可有之歟、議奏一同異見所存次第銘々以一封可申上、付テハ、供奉警固之
邊共、尋常非常トハ又々事相違可致歟之旨、細々有垂命、巨細難記得、

十九日、戊子、相役申合、兩三人午刻後可參入旨、殿下以使示給、午刻參上、右幕下廣橋前亞
相等參上、對面、去十四日同事也、未刻過御用談了、
廿四日、癸巳、關白殿令參給、召御
前右幕下已下三人、於殿下御候所有御咄之事、異國船
之事也、

〔久世通熙日記〕

○孝明天
皇紀所載

二月廿日、傳聞、異國船之事ニ付、萬一近國へ襲來之節心得方、於殿下亭兩役列座有評定云
々、浦賀異國船未到著、因之返辭之儀不承知共、或與北津輕外ヶ濱ニテ不毛地貸與、年貢本
朝へ上納、十分一異國へ可遣坏、種々之街談有之、一同不安堵之至也、京都固藤堂和泉守、
本多（藤堂）守、其外平生固之大名被相催旨、内々從水戸黃門、殿下へ被申入候由、
三月廿六日、於學院源亞相面會、被示之云、

異船近國襲
來ノ際ノ心
得方ヲ議ス

家領所取調、子細ハ當時所々ニテ砲術習練稽古毎々有之候ニ付、自然アヤマチ火散亂非常之大事ニ相成儀モ難計、然トキハ遠所へ御立退可被爲在哉、其期ニ至リ候へハ、諸臣供奉勿論ニ候得共、遠所之儀家内向モ御跡ヨリ御方角へ從ヒ可然由、彼是厚御憐愍之儀、殿下垂命其時ニ至リ候へハ、一同糧米モ被充候ニ付、其家々高割ヲ以被定、百石ニ付十五人割、右員數之外并老年病者等供奉無之輩ハ、領所領所へ立退可然、且又家内始又者等ハ、其主人於領所扶助可致遣儀、左候得ハ、其領内ニテ暮方出來候村ヲ勘考内定可然事、前件巨細之儀ハ、近々便宜申入候、右ニ付、去日御指出有之候一紙返進候間、被内定候村へ印被付候様致度候事、

右之通、右大將被示候間、印可付旨也、殿下八个村之内貳个村被印付、跡ハ事ニ臨ミ、武家へ被預趣意之由、依之各數村之處ハ、貳村ツ、被誌候趣也、予ハ壹村之間印之邊、（久我建通）宜源大納言へ憑置畢、

〔六角博通雜記〕

○維新史料編纂會所藏本

二月二十六日、晴、是比、禁中非常御立退之御用意也、從武家向申出由ニ多、挑燈杯統る日切ニ御用意之由、局向杯も挑燈用意之由、風聞ハ、亞墨利加ニ付、若哉内亂之程難計故ト、云々、

〔京都町奉行組與力 平塚茂喬雜記〕

○平塚清一所藏本

（朱書） 嘉永七寅年二月廿二日、悲田院年寄より差出候風聞、

非常立退準備ノ風聞

非常御立退場所ニ關スル噂

非常御立退御場所

- | | |
|------|---------|
| 聖護院宮 | 照高院宮 |
| 青蓮院宮 | 大覺寺宮 |
| 實相院宮 | 曇華院宮 |
| 三寶院宮 | 曇珠院宮 |
| 梶井宮 | 妙法院宮 |
| 知恩院宮 | 九條殿河原御殿 |
| 近衛殿 | 河原御殿 |

右ノ今日修理職役所ハ御達有之、御破損所も有之候、取調候様被仰出候よし、

○中略

出火之節、差向

御立退之箇所、此度御取極メ相成候ニ付、右書付壹通、爲御心得差進候、以上、

二月廿三日

長谷川肥前守（藩編、禁裏附）

淺野中務少輔様（長祚、京都町奉行）

岡部備後守様（豐常、同上）

長谷川清福書翰

安政元年二月十三日

安政元年二月十三日

九六

御紙面之趣致承知、被遣候簡所書壹通落手いふし候、
猶右之趣去所司代にも被 仰上置候儀与存候、以上、

二月廿四日

淺野中務少輔
岡部備後守

出火ノ節御
立退簡所

出火之節、差向 御立退之簡所、

東之方

鷹司殿河原御殿
近衛殿河原御殿
有栖川宮河原御殿
聖護院宮
青蓮院宮
仁和寺宮
大覺寺御門跡
寶鏡寺殿

西之方

南之方

妙法院御門跡
曇華院殿

北之方

伏見殿
實相院御門跡
林丘寺殿

右之通、當年中相心得可申旨、且年を経候得て、破損等なる差支之儀も御座候間、年々相同候様、坊城殿被申聞候事、

〔曇華院日記〕

○維新史料編纂會所藏本

二月晦日、己亥、陰、

一禁裏様非常御立退御場所之儀、御治定被 仰出候趣、

去年以來夷國船度々渡來、世上騒々敷時節柄ニ付、此度關白様方御附衆に御達ニ相成候由、
御内儀諸役人、左之書付之通被觸候由、此御方にも何方にも觸無之、

非常御立退
場所治定

安政元年二月十三日

九七

安政元年二月十三日

出火之節御立退箇所

九八

- 東之方
 - 鷹司殿 河原御殿
 - 近衛殿 同
 - 有栖川宮 同
 - 青蓮院宮
 - 聖護院宮
- 西之方
 - 仁和寺宮
 - 大覺寺御門跡
 - 寶鏡寺殿
- 南之方
 - 妙法院御門跡
 - 曇花院殿
- 北之方

- 伏見殿
- 實相院御門跡
- 林丘寺殿

右破損差支等滋難計候之間、當年中右之通相心得可申候事、

二月廿一日

米國使節「ペリー」、書ヲ應接掛林輝等ニ致シ、修好通商條約ノ締結ヲ促ス。輝等、書ヲ復シテ^{十七日}漂民撫恤・缺乏品供給ノ外、其要求ニ應ジ難キヲ告ゲ、之ニ關スル條約草案ヲ示ス。

〔米國特派使節「ペリー」書翰〕

○公爵徳川順順所藏本
豆州下田港亞墨利加船所載

○二月十三日米使應接掛林輝等宛

二月十三日、亞美理加使節より差出候書翰、

亞美理駕合衆國特命欽差大臣專到日本國兼管本國師船現泊日本海提督被理、爲復咨事、

茲因二委員帶來回音接到知悉、本欽差甚加喜悅、畢竟得知

貴國欲於前時國法之凝固者、意欲擬寬一些、以得與別國互相和會、而肯同本國、初開交友往

安政元年二月十三日

九九

漢文本書
外國處置ノ
改革ヲ喜ブ

安政元年二月十三日

來之道、現接讀

大人回音之各條款、得明知

貴欽差乃是明達之人、前本欽差所呈各條款、若將細心查閱、自能明白稱善、但恐未能滿足大統領之旨意、即不能盡快於本欽差之心、今據

大人稱說、如有風颶壞船飄來船隻、必能保護於他、或入港埠、或買食物等情、本欽差見於此款事理甚善、別說如有火船到埠、以平價亦可買取煤炭、此款亦善、今此款若善、則以此添入和約內可也、惟本欽差先奉

命與兩國議立寬濶之章程、今已得知

貴國係識時勢者、自必曉然於本欽差到此則有和睦之意也、此後望無延遲於和約之事、而兩國各有相益、本國現時船將繁盛貿易到此海、必宜港口如中國一般多而在港口貿易、亦不可設例攔阻也、再說勸請

大人、此時便即議明寫立成約、日後兩國民人互相樂從、自能永遠遵守順利、本欽差之善心亦無庸多稱說、但於章程亦宜兩邊公平酌允以決成約、今

貴大人應知此事亦為關鍵也、茲若能成此約、則本國亦無庸別臣奉急命、坐師船而到此矣、本欽差有權、有欲與

林等ノ返翰ノ趣意ニ満足スルコト能ハズ
難民救助及
缺乏品供給
ノ承諾ヲ喜
ブ

使節ノ奉ゼ
ル國命ノ趣
意
開港通商ノ
必要

條約締結ノ
必要

早ク談判ヲ
決スベシ

談判ハ是際
ヲ以テ可ト
ス

漢文和譯

外國處置ノ
改革ヲ喜ブ

林等ノ返翰
ノ趣意ニ満足
スルコト能
ハズ

難民救助及
缺乏品供給
ノ承諾ヲ喜
ブ

貴各大臣誠心相待、別時決此各事、不若此時決定立永交友之為可也、因我兩國疆界相隔不遠、此有智者所必明成約於今日、以免日後之虞矣、右此復

咨、

即候

崇安、不一、

甲寅年二月

十三日

二月十三日、亞美理駕使節ヨリ差出候書翰和解、

亞美理駕合衆國特命欽差大臣專到日本國兼管本國師船現泊日本海提督被理の御返答を致し候と、二人の御掛り役方過日の御返答書(第二編三三收)を持參する拜見致し、委曲の意味を知る事を得て、拙者甚々喜悅致候、其譯を、貴國ニ於て是迄御國法の堅固ふるをも、一段御寛のニ被成、別の國々とも御付合被成、合衆國の意ニ同き事を御許しなる、交友往來の道を初て御開き被成候趣致承知候、且其許様の御返書のケ條々々を詳讀候て、其許様方誠ニ明に通達被成候御人物ふるを知り得候、先日此方をり差上候ケ條書も篤と御覽被下、明白ニして善と被思召候事と存候得共、是るを未タ我君主の意旨ニ満足と致間敷、就るを拙者之心ニも未タ十分快しと存候、其許様被仰下候ケ條を、若シ我國の船々大風ニ逢ひ、破損して漂着致し候節を、程能御手當被成、御救ひ可被下候、或ハ港の内へ入置き、或食物を買調へ

安政元年二月十三日

使節ノ奉ゼ
ル國命ノ趣
意
開港通商ノ
必要
條約締結ノ
必要

早ク談判ヲ
決スベシ

候義も御承知被下候趣ハ、拙者拜見致一甚々事理ニ相叶ひ宜き義と存候、且又被仰候こと、若我國の蒸氣船貴地ニ到り候節ハ、相當の直段を以て煤炭を買調へ候義を御許しの旨、此亦善事と存候、今此ケ條若實ニ宜き事ニ候得と、此ケ條を以て和交の約條比内ニ添へ入候て宜敷儀と存候、然ルニ拙者先キニ國命を奉して來ル者ハ、我國と日本國と兩國相議して、固より寛濶ニ無差支の章程を立定んとする所あり、今已ニ貴國の時勢を能々御心得御坐候御方ニと、我の此ニ來ル事ハ、全ク和睦の意ニして、惡意ニ非ざるを御悟り被成候を知る所り、左候得と、此後和約の事を遅延無くして、早く兩國各相益する事有る様ニ願ひ望む所あり、然ル上ハ、是をりて我國の貿易繁昌して、日本海ニ到り、多くの船々港口ニ在りて、貿易致事、唐土比如クニ可相成候得と、例制を設ケ成して、是を攔阻被成候儀ハ有御坐間敷候、其許様方ニ勸メ請ふ事ハ、何卒只今直ニ御評議ニ、明白ニ條約を立定て、此後兩國の民人互ニ相樂て、永遠に遵ひ守り、自然の順利を得候様致度存候、左候得と、拙者の善意も多く申述候ニ不及候、但章程之定メ方ハ、双方公平ニ斟酌して相決可申事ニ候、今貴所様ニと、此事の緊要ある事を御承知ニ可有之候、今若能此約條御決しニ相成候得と、我國より別臣をして急命を受ケ、軍船ニ乘して此所へ來らしめ候様の儀ハ有之間敷候、拙者存意ニと、貴所様方と誠心を以て御付合致事を欲する所ふれと、追る此ケ條の事を御決

談判ハ是際
ヲ以テ可ト
ス

しニ相成候たりと、只今決定して、立ところニ永遠交友之儀を御結被成候こと不如と存候、思ふニ我兩國疆界相隔る事不遠る儀ニ候得と、有智の人と、必約定を今日ニ成して、後日の患を免事候事の宜敷を明ニ知り候事あるべし、右御返答を申、就るを御平安の御様子を相伺候、不一、

二月十三日、差出候横文字和解、

林大學頭様宛、

蘭文和譯
外國處置ノ
改革ヲ喜ブ

一 黒川嘉兵衛・大通詞森山榮之助持參被致候御書面之御請申上候儀と、右御書面中、貴國政府既ニ外民ニ携候御所置御改革ニ相成、合衆國と穩和之交親御免許之趣、私ニ於て大慶之至ニ奉存候、

一 御書面之御趣意ニ屈伏可仕と之思召ニ候得共、右御趣意私志願通ニも無之、且我國王ニ於て、満足致し候哉難計奉存候、

一 御書面之御趣意、我船々向後貴國港内ニ來り、其海濱ニ於て難船ニ及候得と、乘組賓客之御取扱、食料缺乏之品々、相應之價ニ御渡被下、我蒸氣船緊要之石炭相應之高、通用之價ニ相調候儀可相叶旨、誠ニ以歡喜之至ニ奉存候、

一 右之廉々ニ至極良善之御趣意ニ候得と、夫々取極相立可申奉存候、乍去我國命之趣と、

安政元年二月十三日

林等ノ返翰
ノ趣意ニ滿
足スルコト
能ハズ
難民救助及
缺乏品供給
ノ承諾ヲ喜
ブ
使節ノ奉ゼ
ル國命ノ趣

意

開港通商ノ
必要

條約締結ノ
必要

早ク談判ヲ
決スベシ

談判ハ是際
ヲ以テ可ト
ス

安政元年二月十三日

一〇四

廣大之意ニ有之、就るに貴國政府時勢を辨へ、私志願之通治穩和親之談判を遂げ、兩國人民満足之取極相立候儀、猶豫無之様奉存候、

一我國之通商日々繁昌いとし候得と、唐國と相立候取極之如く、貴國よ於ても多く港津を相開候儀專要ニ御坐候、尤其港内之御所置と、緩優之人民堪へ難き屈致之廉々御差止有之度奉存候、

一速し事を相辨候爲、双方書面取替し、我人民并貴國臣下よ對し、法度を相立、兩國人民之有益永久之親睦專要よ有之候、

一右談判首尾能相整度儀、再應申上候も無益よ候得共、諸事取調候よ、無益之時日を厭候而已よ無之、我國が船々差向、嚴重之沙汰無之様仕度奉存候、

一私其御許様方と聊無心置御談判仕候得と、双方懸合事當節を第一と奉存候間、兩國安寧之趣意を治定仕度候、右兩國近隣よ有之候得と、親睦取結候儀、不得止義ニ御坐候、恐惶、

合衆國紀旗船ボウハタン船號江戶湊

横濱村ニ於て、曆數一千八百五十四年、

東印度唐國日本海よ在る

水師提督日本わ之使節

(M. C. Perry)
エム、セ、ペ、リ、イ

右之通和解仕候、以上、

寅二月

森山榮之助印
堀達之助印

(墨夷應接錄
通航一覽續輯)

〔米使應接掛林輝等書翰〕

○内閣文庫所藏本
通航一覽續輯所載

○二月十七日米國特派使節ペリー宛

二月十七日、差遣し候咨文、但、答無之、

本月十日相會時面呈一書、以達旨意、十三日見投答書、乃併相會時所示貴國唐山貿易事(前二編之)、(第三編ノ三ニ收ム)乃併相會時所示貴國唐山貿易事、

宜、皆得細閱、此或將使我邦亦仿唐山之爲乎、十日所呈書意、在就

大統領致書見求之旨陳其可否、書中備道、

大君新繼 洪緒、凡百政令皆要寧謐、未遑他議、是以去歲秋使和蘭船首轉達此意于

貴國、蓋其所求條件中、如保護周濟漂到船隻、給過往船隻以石炭及諸缺乏物二項、則不得

不時爲應副、至貿易諸事皆仿唐山之說、今日事勢斷未易爲也、我邦之人性情風習、異諸

難民救助及
缺乏品供給
ノ外ハ望ニ

安政元年二月十三日

一〇五

應ジ難シ

長崎ニ來レ

五年後別港
ヲ開カン

安政元年二月十三日

一〇六

外邦、欲遽改舊法以學諸邦之俗、其事極難、且唐山之與西洋諸國相通久矣、若我邦惟有長崎一港、僅延唐山和蘭二國人已、外此則絕不與外邦交易有無、是以所有土產未易較其多寡^(イ)矣、

貴國之人只當來歲正月爲始到長崎港、而取薪水石炭等物、但彼此嗜好既殊、物價所值亦復不同、必當公同驗試、五歲之後、別開一港、以便于

貴國船隻常々往還矣、故創條約以相商量、各存一通、以備證據、

嘉永七年二月十七日

林 大^(官、備役) 學 頭

井 戸^(幕政、町奉行) 對 馬 守

伊 澤^(政義、浦賀奉行) 美 作 守

鶴 殿^(長崎、目付) 民 部 少 輔

前書和解

漢文和譯

當月十日、會合之時通達に及候趣、書取を以て申入候處、同十三日、黒川嘉兵衛・森山榮之助に被相渡候返書令披見、尙十日對談之折心得之爲被差出候貴國と唐國との申極書、翻譯之上^(第二編ノ三ニ收ム)一覽いとし候處、當節右同様之振合よて、双方取極いとし度との趣よも可有之候得共、昨年被差出候其國主書簡報答之心得よて、當十日通達いとし候、貴國政府之志望ハ悉く許

容し難く、其次第ハ右通達中ニ有之候、

新君主繼世之折なれハ、我國家治穩之政事大切よて、貴國の志望無余義次第ニも候へ共、逸々取行候時節ニ無之、依之其中薪水・食料・石炭・破船難民救助并船々缺乏此品手當之儀^(前二編ノ)と、據なき事なれハ、此度許容よ及候迄よて、今唐國同様之振合よ取極いとし候時宜い^(第二編ノ三ニ收ム)とらば、且我國也、其風俗外國ヨ異なり、其情も亦同しとらされハ、今俄ヨ舊法を改め、萬國諸州の風儀ヨ習ふて難あるへし、唐國也、往古より西洋各國との驅引も有之候國ニ候へとも、我國也、是迄長崎ヨ唐和蘭人渡來する外也、外國人民と交親いとし、る仕來ニ候へとも、我國産此多少分明ならば、就るを來春正月より長崎に渡來ありて、石炭・薪水等を求むへし、然れとも其品物よハ、好むと好まざるとあり、價の高下もひとしとらされハ、夫等を^(次二編ノ)とめし試みて、五年を經、別地ヨ港口相開き、追々貴國の船渡來候様可相成候、然レ別紙取極箇條相立、承伏之上也、双方書面取替候事、

(墨夷應接録)

缺乏品供給
及難民救助
ノ外ハ望ニ
應ジ難シ

長崎ニ來レ

五年後別港
ヲ開カン

〔日米修好條約草案〕

○内閣文庫所藏本
通航一覽續編所載

二月十七日、差遣し候條約、但、答無之、

條 約

安政元年二月十三日

一〇七

缺乏品供給

安政元年二月十三日

一〇八

一亞美理駕合衆國船到長崎港時、應與以薪水食糧石炭、若其有缺乏者、亦應以我所有者給之、且期以來春正月爲始、五歲之後、應開一港以容之、

其講價一准唐山和蘭例、而

抵以洋金洋銀、不以他物、

一合衆國船遇風漂到我邦、不論何處、使我舟護而導之長崎港、還附其人、漂民所携諸物件亦并還之、

五歲開港後、則護送新

港或長崎、各從其便、

難民救助

一漂到船隻、難保其果爲良民與海匪、所在不許恣意行走、

制

一長崎港唐山和蘭人所寓、有舊例難遽變者、故合衆國人到此者、亦不許恣上岸、

長崎上陸禁

制

一開港之後、應給以何等物品、及事宜條件、要應反覆商議以定之、

條約細則ノ

商議

一琉球島屬遠境、其開港之議、非當今所能辨、

琉球開港拒

絶

一松前亦係遠陲、且有世守之侯、開港之議、亦難立辨、俟來春貴船到長崎港、徐議之、

松前開港拒

絶

前書條約和解

漢文和譯

申極書

缺乏品供給

一來春正月より、長崎に渡來之節、薪水糧食石炭船々缺乏の品あらハ、我國産相渡し可申、

難民救助

五年の後より、別に一港を開きて、貴國の船を入るべき事、

但、價之儀と唐和蘭比振合ニ准し可申、代品之儀、金銀ニ限り候事、

一貴國難民之儀と我國何浦ニ漂着あるとも、長崎に船路よて差送可申、其漂民所持の品々も、一同差送可申事、

但、五年の後、別に港を開くも、その港より又ハ長崎よ送る事、其便宜ニ從ふへし、

一漂民ハ海賊の輩なるも分明ならは候へし、漂着之場所にて、猥ニ徘徊難相成事、

一長崎と唐和蘭の見合も有之候へし、港内猥り上陸不相成事、

○此間一條續譯文ヲ缺ク。

一琉球之儀と遠境り候へし、同所開港之談判難行届候事、

一松前と是亦邊境よて、且松前家之所領なれハ、今度談判難相成、來春長崎渡來之船へ治

定之返答可致事、

嘉永七年二月十七日

林大學頭 花押

井戸對馬守 花押

伊澤美作守 花押

安政元年二月十三日

一〇九

安政元年二月十三日

一〇
鵜殿民部少輔 花押

〔墨夷應接錄〕

○公傳藤川家達所藏本

二月十三日、○中略、此日、漢文一通、洋文一通指越ス、二書別存、

十七日、近日應接之儀、承知いとし、明日よても宜候段申遣候、且條約書爲持遣ス、答ふ、

〔通航一覽續輯〕

○内閣文庫所藏本

二月十三日、○中略、此日、ふれ願望の趣意、漢文・洋文の二通を出セリ、

〔東湖日録〕

○水戸藩士藤田忠日記
公傳藤川開順所藏本

二月十四日、昨十三日、墨夷の書翰を呈ス、是ハ去ル十日、此方通信通商ハ難及挨拶、漂
民撫恤と石炭長崎よて被下ハ、相濟可申哉と申遣候答書之、昨日原八歸來、原田八兵衛金川模様甚

悪一、

〔水戸藩士茅根泰筆記〕

○公傳藤川開順所藏本
鈴木大雅集所載

二月十三日出せし横文字書付翻譯を呈ハ、交易御濟一難有、併シ此儘にてハ難歸交易之事ハ
濟し不申之

書翰ノ内容

墨夷書翰ヲ
提出ス

事ふき共、此濟一ニ相成云、扱石炭被下ニ付てハ、地面を拜借、屋室を作り度、尙又國王之屋室、將
々と申來候由、可惡、扱石炭被下ニ付てハ、地面を拜借、屋室を作り度、尙又國王之屋室、將
官之屋室、是々之大小より作り申度候、日本軍艦之雛形、其外武器・刀劍・書籍・錦絹・器物等
頂戴致度、尤右ハ其直相應ニ銀錢指上ケ可申、又地面拜借ふまハ、地代何間ニ付何程宛指
上ケ可申、舟も入候ニ隨ひ、夫々之運上可指上候、猶又日本詞を書付候書を頂戴、國人ニ學
せ度、又亞墨利加語を貴地之人ニ學せ度候、是等之處御評議之上、御挨拶ニ致度旨、申候由、
〔亞米利加船渡來日誌〕

二月十七日、仄カニ聞、去ル十日、又十五日ノ應接ノ問答、彼國ヨリ請願スル小笠原島沖ノ
ハダカ島、并交易上ノ件ハ、阿蘭陀・漢土・朝鮮右三國ノ外ハ、祖宗ノ遺禁モ有之、容易ニ許
容成シ難ク、殊更昨年武將新タニ宣命以來、百般改令ノ日淺ク、此際ニ於テ、交易市場等ノ
儀は、取調出來難ク、凡五六ヶ年ノ間ハ、何分ノ返答致シ難シ、併小笠原島沖ノ荒島新開ニ
付、薪水等ノ義は、豆州下田港ニ於テ、兎角ニ役人共ノ取計ヨリ談合可申、假令明年下田表
へ渡來ストモ、交易ケ間敷儀ノ願ハ、決テ不相成候、且其國ノ船、唐土渡海ノ節漂流シ、本
國ヨリ積來リシ薪水糧米欠乏シ、我國ノ海岸へ漂着ノ節、保護ノ義ハ相互ノ事ニ付、承諾
致ス、只ニ信實ノ通義ハ天ノ公道、人情ノ欲スル所ナリ、尙其餘ノ義ハ、來ル廿六日、互相
和樂應接ニ讓ルトノ事ニ有之由、傳聞ス、

談判ノ模様

安政元年二月十三日

一一一

〔秋藩浦元襄日記〕○維新史料編
家老 靈會所蔵本

二ノ廿二日、天氣、

略、中

一今度亞墨利加御返翰之大意、是を韓文ニ直し被差贈候様、近藤晋一郎取出候由、眞偽ハ不明ニ候得共、記置候、左之通、

今度以使節被申越候趣一覽之處、尤之次第ニ有、所望之通致度候得共、御代替之砌、國中人心も安堵不致、御一代限り之事ニ候得共、此節御返答ニ被及候も不苦候得共、御祖先以來數百年定り居候御規則を御改革と申候ハ、日本國中抱抱り候義、御一存を以難及御返答ニ、三家三卿之貴族、并ニ日本國中諸侯伯伯も被及御評義、一同一致之筋ニ無之候ハ難相成候間、此度來翰之趣を以相示候處、先ツ三家三卿之面々、并ニ諸役人ニ於てハ、素より交易之道、有を以無ニ易ル趣意、當時日本ニ拂底成所之金銀彼國ニ余計生し、右をも交易不差支由、左候得ハ所望筋御許容ニ有、石炭等之品々相贈り、右金銀と交易有之候得ハ、一廉之御國益ニ相成候義ニ有、通信交易御許容有之候方、可然旨を申ス、然處、東西之諸侯伯ニ至り候得ハ、其義不服ニ有、數百年永同之格を崩シ、通信交易有之候ハ、此一事より國體を失ひ、萬民歸服ニ抱抱り、不可然旨申立候、左候得ハ、評義

返翰ノ大意

兩端ニ相成、難決、不服之義を強る申聞候義ハ難相成、日本ハ一旦永く究候事永代不變風議故、相決候も又隙取候間、從是三ケ年之間、治定之返答被相待候様、其内得と申諭し、一致之上、交易ニ相決候得ハ、其趣可申遣、其節ハ貴國ノ之使節計ニ無之、永久取極候義ニ候間、此方も使節差出可申之趣、

〔東坊城聰長日記抄〕○宮内省圖
書寮所蔵本

二月廿八日、丁酉、右大將來談、其後參關白殿、墨夷從去十日對談、十三日返翰渡等之風聞、先以珍重、猶待言上給、

〔ペリー日本遠征記〕○ホー
クス編

Francis L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of Government of the United States. Washington: 1856. Vol. 1. pp. 355—356.

On the same day the prefect, Kura-Kawa-Kahai, and the chief interpreter, Yenoske came on board the Powhatan with a copy of the Imperial reply to the President's letter, duly certified and signed by the four commissioners. The two Japanese officials

subsequently repaired to the Mississippi, where they conferred for some time with Captain Adams. They appointed the Monday following (March 13th) for the reception of the presents, and it was arranged that those persons who had the supervision of the telegraph, the Daguerreotype apparatus, and steam engine, should land on the previous Saturday, to arrange a place for their suitable exhibition. The Japanese stated that two of the commissioners would be in attendance, with a scribe, to receive and record the various presents, and the names of the persons for whom they were intended. Upon Captain Adams saying that all the presents received by the officers of the United States were, by law, the property of the government, Yenoske remarked that a similar law existed in Japan. To the inquiry of the Japanese as to when the Commodor's reply to the answer to the President's letter would be ready, it was promised for the subsequent Saturday.

Captain Adams now asked what ports the commissioners had selected for the trade of the Americans, and where they were, and remarked that five years, the time appointed for the opening of them, was deemed by the Commodore much too long, and that he would never submit to having a place so restricted as Dezima for the use of the Americans. The prefect waived all immediate consideration of the subject, saying that it was one upon which the commissioners would negotiate and deliberate, and that it would necessarily require time. Yenoske, the interpreter, was then told

that he could forward the purposes of the expedition, since he was familiar with them; he promised to do so to the utmost of his power, but he declined, although a map was placed before him, to name the ports for American intercourse, saying, as he refused, that the whole matter was so new, and so opposed to the laws of the Empire, that time would be required to bring matters to such an issue. In regard to the question of going ashore, which had been submitted to the commissioners, Captain Adams asked for some explicit reply, stating that the surveying party, which was at the time at work in the bay, would require to plant signals along the shore, but would not go into the interior. To this the prefect answered that the views of the commissioners had not been yet fully matured, but seemed to concur in the necessity of the signals, if the Commodore had so ordered it. He, however, expressed his fear of trouble and confusion, if the officers, engaged in their duty, should enter the villages, and hoped they would go down the bay, and not northward. The subject of supplies was next spoken of, and the question of payment seemed to be conceded by the Japanese, who proposed that as soon as a port was selected, certain compradors should be appointed for the sale of articles of every kind, but in the meantime, they said a single person would be chosen, whose duty it would be to supply what was necessary, and receive in payment the American coin, to be estimated weight for weight with the Japanese money. They would prefer, they said, that Nagasaki should

be the place for such transactions, but granted the necessity of carrying them on for the present where they were. The hours for the future meetings being settled at from eleven o'clock to one, instead of the previous irregular mode, the Japanese took their departure.

On the next day (March 11) a short conference was held by Captain Adams with the same Japanese officials in the treaty house on shore. He also bore a communication of the date of the 10th of March from the Commodore, addressed to the commissioners, in which the answer to the President's letter was acknowledged. The Commodore, while he expressed his satisfaction at the determination of the Japanese government to alter its policy in regard to foreign governments, at the same time stated that the concessions proposed were not enough, and that a written compact or treaty, with wider provisions, was essential. The chief points talked of were, the answer to the Commodore's notes in reference to the proposed treaty, and the privilege of going ashore. In regard to the former, they stated that a reply was not yet prepared; but as for the latter, the interpreter remarked, unofficially, that there would be no objection to the Commodore and his officers going ashore; but that if the permission should be general, difficulty with the people might ensue. Some general conversation followed in regard to the necessity of dispatch in the negotiations, Captain Adams stating that it was the Commodore's intention to send one of his ships to the United States, in

the course of a week or so, to inform the government at home of the progress of the negotiations, that it might know whether it was necessary to send more vessels or not. The Japanese evinced some uneasiness at this statement, and asked, "Whether the Americans are friendly?" "Certainly we are," was the answer, and the conference closed in the most amicable manner.

〔日本遠征録〕

○ホークス編「ペリー日本遠征記」非坂孝譯
公館徳川閣順所蔵本

(二月十三日)

黒川嘉兵衛
返書ヲ携へ
來ル

贈物授受ノ
商議

此日、奉行黒川嘉兵衛及び通辯榮之介ポーハタンふ來り、將軍より大統領ニ贈る返書を濟
そ、是ふハ四人の使節の記名調印あり、次ふ二人をミスシッピーを訪ひ、艦長アダムスと
商議し、次の月曜(三月十三日)を以て贈物を受くるの日と定む、又電信機・ダゲレラタ
イブ機及び蒸汽機關等を取扱ふ者も、看覽ふ供ふる場所の準備を爲さざる可らざるを以
て、前土曜日ふ上陸せべきことを約し、又贈物受渡しの際も、日本使節のうち二人出場し、書
記を従ひて之を受け取り、其品名并ニ何人ニ贈るべきや等を一々記録せべきことを告げた
り、此時アダムスは、合衆國ふてハ其國の官吏のうけたる贈物も、法律ふよりて政府の所
有とあることを告げしに、伊之介ハ、其を日本よても同一ふりといへり、又彼等を先きの返
書ふ對する提督の答も、何時受くることを得べきやを問ひければ、次の土曜日を約したり、
アダムスは問ふて曰く、日本使節も通商の爲に何港を開らんとするや、又其港ハ何處ふあ

「アダムス」
開港場ニツ
キ質疑ス

るや、又ハ使節之を開く爲に五年を費さざる可らまといふも、提督之を緩漫ふ失する者と思惟せり、又若し出島(長崎)の如き地を以て、米國の爲に開らんと欲するも、斯る邊避邊の土地を、到底提督の同意を得ると能ざるへしと、然るに奉行を、是等の事を使節の商議し、又熟考すべき所ふして、急速に答ふべき者ふ非をといひて、直接ふ斯る談話を爲せざるを避くる者の如し、由りて又アダムスを榮之介榮之介向ひ、足下を米人と相知るの故に、能く吾人の遠航の目的を達せしむるを得べしといへしに、榮之介を力の及ふ限り之を爲さんと答ひしも、彼の前ふ地圖を示して、何れの港の開あるべきやを問ふふ及んで、彼曰く、是れ頗る新しき問題ふして、時間を費さざれと考ふると能わざ、又斯る事を直ふ發表せるは、我國の法律ふ違反せる者ふりとて之を拒みたり、又先に使節ふ要求せし上陸の件ふ付てハ、アダムスを精確ある答を求め、且つ曰く、測量隊を當時灣内ふ於て其仕事ふ從事せれとも、彼等と海岸ふ標竿を立つるを望むり、彼等と海岸ふ上陸せると雖、決して内地ふ入るを爲さざるべしと、奉行を之ふ答へて曰く、使節の意見未だ熟せされとも、提督より命せし者ふれを、標竿の事ハ或も同意すべきものと、彼を、此際殊に其事ふ從事せる士官ふして、村落ふ入るの如きあらハ、夫の爲、係累を引起すべきことを配慮せり、且つ測量隊の北方ふ進まざらんとを希望せり、次て談供給の事ふ及ふ、代價ふ關する談話を

上陸ノ件

缺乏品供給ノ件

「アダムス」提督ノ書面ヲ交付ス

一體ふ日本人の避くる所ふして、彼等を曰く、若し港ふして開り、不至らハ、諸種の貨物を賣渡せ爲に其係人を設くべく、同時ふ一人を撰んで求むる所の物品を給與し、其の代價を米貨ふて受取り、其重量を日本價の重量ふて量り、以て計算せべし、是等を取扱ふは長崎最も可ふり、然れとも今は此地ふて處理せるの必要ありと、又次よりハ其會合を從來の如く不定ふせせして、十一時より一時迄とあせべしと約して、彼等は辭し去る、翌日(三月十一日)條約館ふ於て、アダムスと前日の官吏との間ふ簡單なる會議あり、アダムスは三月十日日附の提督より使節宛てし書面を濟したり、其中に大統領への返書を受取りしと認めたり、又提督を、日本政府の外國ふ對して、從來の政略を變化せしに満足を表せし、之と同時に、政府より許（與ノ讓之）し（與ノ讓之）准許の不充分なるを論し、浩翰なる條款を有せる條約の必要を説きたり、此日談せし所の者ハ、先ふ提督の條約ふ關して送りたる注意書の返答、并ニ上陸の許可ふ關する二點ふりし、前者を未だ用意なしといひ、後者を通辯の一人の資格を以て告ぐる所ふよれを、提督及び士官を上陸せるも差支ふるべし、然れとも之を一般ふ許す時を、人民との間ふ係累を生するふ至るべしといひり、夫より雜談ありし、この時アダムスハ、可成速ニ談判の終らんとを望みたり、是れ提督の一週間前後のうち、本國政府ふ一船を派して談判の抄取を報し、他船派遣の必要の有無を知らし

めんの爲あるを説きたり、之を聞きて日本人を少しく不安の色あり、彼等も實際米人を交誼を欲するふやと問ひければ、慥ふと答ひて、此日の會議も、快く濟みたり、

○參考

〔安政甲寅日記〕

○帝國圖書館所藏本

二月十二日、

一 異船模様相替候御沙汰無御坐候、明十三日、二度目應接有之御沙汰ニ候、御返翰御渡々、幾日頃ニ可相成哉相知不申候、尤此度々御返翰被遣間敷哉、風聞仕候、何分曉と相知不申候、被下物御納戸之分相知申候間、差上申候、紅羽二重拾疋、白羽二重拾疋、紋縮緬五疋、板ノ縮緬五疋、右々亞墨利加國王に、白羽二重三疋、紅羽二重貳疋、紋縮緬貳疋、板ノ縮緬三疋、右使節に白羽二重壹疋ツ、紅羽二重貳疋ツ、板ノ縮緬貳疋ツ、右船將始九人、板ノ縮緬三疋、右通辯官に、二月十二日、後、十三日、

一 今日頃二度目應接有之趣申上置候處、今日も無之、來ル十五日頃、異船ヲ獻備物有之積ニ付、其頃應接も可有之と御沙汰ニ御坐候、且被下物別紙書取申上候、幾日頃ニ被下ニ相成候哉、相知不申候、料紙、火鉢、花入、廣蓋、置物、吸物碗十人前宛六十通、六百六十、右之通御細工所に、上箱等之御支度被 仰渡、尤御品々何れも御買上之御坐候、二月十三日、善、俊、

十五日甲申 仙臺藩主伊達慶邦陸奥守・岡山藩主池田慶政内藏頭 參府ニ依り、

佐野藩主堀田正衡攝津守・小田原藩主大久保忠愨加賀守・萩野山中藩主大久

保教義長門守・多古藩主久松勝行豊後守・牛久藩主山口弘徹筑前守・吹上藩主有

馬氏郁備後守 就封ニ依り、大坂定番田沼意尊玄蕃頭○相良藩主 赴任ニ依り、各登

城ス。

〔幕府沙汰書〕

○東京帝國大學所藏本

二月十三日、

（思傳、考）
上使松平伊賀守

松平内藏頭

右就參府、被遣之、

○中略

十五日、

一 今四半に三寸五分前、御黒書院出御、○中略

御目見過る御白書院に渡御、例月次之通御禮相濟る、左之通御禮被爲 請之、

國許方歸府

松平陸奥守

伊達慶邦等
ノ登城

安政元年二月十五日

銀三十枚
卷物十枚

參勤

松平内藏頭

御暇

半年代

堀田攝津守

大久保加賀守

同

同

大久保長門守

松平豊後守

山口筑前守

有馬備後守

一一三

○安政年録、マタ同文ヲ載ス。

〔諸用留〕

○内閣文庫所藏本

二月十五日、

御座間

大坂御定番

田沼玄蕃頭

御白書院

松平陸奥守

上使老中

松平内藏頭

半年代

堀田攝津守

大久保加賀守

同

大久保長門守

松平豊後守

山口筑前守

有馬備後守

一一三

大坂の御暇

國許より歸府

參勤

御暇

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

一二四

○伊達慶邦・池田慶政ノ官位陞進ニ關スル史料其他ヲ次ニ收ム。

〔老中申渡〕

○東京帝國大學所藏本
幕府沙汰書所載

○二月十五日仙臺藩主伊達慶邦・岡山藩主池田慶政へ

二月十五日、

從四位上

松平陸奥守

未昇進之御沙汰ニ難被及
候得共、思召ヲ以少將、

松平内藏頭

右於御白書院縁頼老中列座、^(久世廣庵)
大和守申渡之、

別段

松平内藏頭

今度少將被 仰付候儀之、全ク安房上總國御備場御用引請被 仰付、防禦筋之儀、萬端御
委任被成候ニ付、別段之 思召ヲ以被 仰付候儀之相心得、防禦筋之儀、格別入精相勵候
様可被致候、

右於同席同人申渡、書付相渡之、

(小戸藩御城書海防箇
條書拔 異國船紀聞)

〔仙臺藩主 橋本九八郎日記〕

○維新史料編
纂會所藏本

二月十三日、晴寒、

一明後日頃、御昇進之御模様、向々々内々申聞候事、

同十五日、雨、

一今日御禮濟、御居殘ニ從四位上被 仰出、御禮御廻勤共御供相勤、

(三好、誠徳)
但し、御坊主部屋御借受、御先武三郎方相勤、

(池田慶政)
一岡山様少將被 仰出候事、

但し、年若并御持場等之御書付あり、

同十八日、雨、

一御位階被 仰出候御禮之願書御進呈、稻葉金之丞様へ御願之御使者相勤候事、

但し、御献上物御伺書共一同若老衆へ被相渡、右へ御進呈之段、私共持參御用番へ可

差出部之事、

同十九日、社日、曇、夜少雪降、

一御位階被 仰出候ニ付、御用番へ御會被 仰入、御出ニ付、御供相勤之、

但し、右へ御逢之御禮無之御例ニ候事、

同廿八日、朝小雨、
晝晴、

安政元年二月十五日

一二五

伊達慶邦ヲ
從四位上ニ
池田慶政ヲ
特ニ少將ニ
被ス

防禦處置ニ
格別勵精ス
ベシ

一御位階御昇進之御禮ニ付、御先詰相勤武三郎方御供之、
但し、何れノ一々麻上下御先ニ在、御献上物并女中へ被遣之の方兼候事、

〔諸事留〕

○内閣文庫所蔵本

二月十五日、御禮過、

〔朱書〕 松平陸奥守儀、今日從四位上被

仰付、是ハ初席ニ被仰渡、内藏頭ニ二席目也、

扣之ニ一紙ニ認、官位帳ニ留有之、依之留置之、

達も一紙認ニ遣ス、

松平内藏頭

未昇進之御沙汰ニ難被及候得共、思召を以少將被 仰付之、

右於御白書院縁類、大和守申渡、老中列座、

別段達

同 人

今度少將被 仰付候儀之、全く安房上總國御備場御用引請被 仰付、防禦筋之儀、萬端

御委任被成候ニ付、別格之

思召を以被 仰出候儀ニ被相心得、防禦筋之儀、格別入精相勵候様可被致候、

右於同席同人書付渡之、列座同前、

右惣扣 よせ 申渡、別段達ハ御老中方に計認上ル、

大目付

松平陸奥守
松平内藏頭

右御禮過可被留置候、

右當朝大和守殿御渡、

一陸奥守ハ去年領分凶荒ニ付、爲取締參勤中、不時御暇、此節歸府ニ付、今日 御目見被

仰付、内藏頭ハ御備場御用ニ在、早參府之儀相達、是又此節參府、今日參勤之御禮申上候

ニ付、兩人共留置ニ在被 仰渡、ふれニ不及、

一陸奥守儀ニ付、伺之趣官位帳ニ留有之、

一内藏頭儀昇進之事、去十二月、細川越中守〔實録、熊本藩主〕・松平大膳大夫、鎗三本舊復之儀、初筆伺ニ

籠メ伺相濟、左之通二月十四日、伊勢守殿〔阿部正秋、老中〕より、去年之伺濟ハ書取相添、被 仰上、相濟、

覺

松平内藏頭儀、參府仕候ニ付、去暮伺相濟候通、官位昇進可被 仰付哉、左候ハ、

明後十五日、參勤爲御禮罷出候ハ、御禮過留置申渡候様可仕候事、

安政元年二月十五日

〔表右筆言次〕○内閣文庫所藏本

二月十六日、

一松平陸奥守 從四位上、松平内藏頭少將、昨十五日被 仰付候書付、(志賀、奥右筆)金八郎持參、位記口 宣奉書下書、同人に爲見置、御禮之日奉書廻しも談置候、

二月廿八日、

(備前、表右筆)孫 之 丞

一松平陸奥守 從四位上、松平内藏頭少將、位記口 宣奉書貳通、伊勢殿に廻ス、大和殿宅渡、但、兩人去ル十五日被 仰付、今日御禮申上候、

〔廣幡家〕諸大夫詰所日記〕○東京帝國大學所藏本

二月三十日、巳亥、晴、

一仙臺屋敷方

當 番 定 義 愛 貢
關 彌 一 左 衛 門

右を以手紙、如左、

(伊達殿形)中將殿に過日十四日、御老中方御連名之御奉書到來ニ付、翌十五日、登

城、歸府之御禮被申上候處、則刻被殺從四位上之旨被仰出、重疊難有被存候、此旨被申

候、

〔備前岡山池田家譜〕○東京帝國大學所藏本

安政元年甲寅二月十五日、任左近衛權少將、四月戌兵ヲ房總ニ遣ス、家老番頭初人數總計二千人餘、房州北條・總州竹ヶ岡兩所ニ分營、

〔岡山藩江戸惣觸〕○侯爵池田宣政所藏本 岡山藩留帳所藏

二月廿四日、江戸惣觸、

兼々被 仰出候御法度之條々、不及申堅固ニ相守、就中火之元之儀、隨分念入可申候、銘々(不脱之)寢番等留守之節去、猶以無沙汰無之様可申付候、

一博奕之儀去不及申、都る勝負ケ間敷儀、御制禁之上去、彌以相守候様可有之候、惣る主人之留守ニ人寄致し候義、御停止之事有之候、是等之儀、兼々被

仰出候趣、堅く相守可申候、足輕小人等、奉行方夫々嚴敷可申付候、

一御屋敷之士中、其外に對し、末々無禮ケ間敷義、供先法外之躰、有之間敷候、高難談高笑御法度之義候、惣躰末々渡り者之風躰を見真似、風儀不正様ニ相成るちニ候間、能々相心得、猥ケ間敷事無之様可致、或ハくゞへきせる等致し、戸口外に出、又ハ火入等往來に持參、煙草給候族も有之哉、相聞、火之元之儀去、重き御締之儀ニ有之候得共、等閑ニ相心得、并夜廻り等に對し、不作法之族も有之趣相聞、甚不埒之事候、以後屹相心得候様、主人々々可申付事、

安政元年二月十五日

伊達池田兩
侯ノ位記口
宣ノ處置

火之元用心

博奕制禁

無禮無作法
制禁

放歌高吟制
禁

無刀出入制
禁

門限嚴守

住居ノ清掃

安政元年二月十五日

一三〇

一大聲之酒興小唄うとひ騒候事、兼々御停止之儀、殊ニ往來に聞候る、御屋敷之御外聞不
 宜、并表御長屋筋窓簾外し卷上、或去窓を相對致し、又去買物等致し候事ハ不及言、御法
 度毎度被 仰出候得共、末方心得違候者共間々有之趣相聞候、夫々嚴重敷可申付候事、
 一家來末々之者、無刀ニ御門出入之儀、度々被
 仰出も有之候得共、兎角等閑ニ相成候儀も有之、別る渡り者共之内、其類多く有之趣ニ
 相聞候、主人々々屹心付可申付事、
 一御足輕拘不足之儀、度々被 仰出候通、隨分無油斷候様相心得可申事、
 一勤番中川岸廻り御免之者、并御馬役馬醫共、馬御用ニ致他出候とも、御定之通、支配頭
 大御目付に出入相届、晚七半時限り可罷歸候、若又御用筋ニ寄、歸時剋延引ニ相成候事
 も候ハ、其由相届可罷出事、
 一出火之節、御馬をめし罷出候御馬役共、罷歸候節、可相届事、
 一在府之面々、致他出候共、夜ニ入罷歸候去、大御目付に可相届事、尤勤番之面々去、是迄
 に通、晝夜とも、出入大御目付に可相届事、
 但、土鐵砲以下、御徒目付に可相届事、
 一銘々居申御小屋邊去、掃除等之儀、夫々取計候様、前々被 仰出候處、近來等閑之族も

樂書制禁

田沼意尊ニ
登城ヲ命ズ

有之哉ニ相聞候、銘々屹家來々々々に可申付候、
 一御屋敷内ニ樂書等之類去、勿論不致管之處、供腰懸之邊其外ニるも心得違之者共も有
 之様ニ相聞候、在府之面々ハ、子供其外一統家來々々々にも、屹可申付候、
 但、此已後心得違之族も有之候去、及見次第可申出旨、見廻り之者に申渡置候、
 右夫々之趣、度々被 仰出も有之候得とも、兎角弛のちニ相聞候、以來嚴重ニ相守可申
 との御事、
 二 月

○田沼意尊ノ目見其他ニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔諸用留〕

○内閣文庫所藏本

御用之儀候間、明十五日五時可有登 城候、以上、

二月十四日

田沼玄蕃頭殿

〔朱書〕
二月十四日、鍵番持歸、以徒士使遣之、

〔幕府沙汰書〕

○東京帝國大學所藏本

二月十五日、

安政元年二月十五日

一三一

連

名

安政元年二月十五日

一三二

御座間

大坂の御暇

大坂御定番

田沼玄蕃頭

御黒印被下
金十枚
時服五

右 御目見、○中
略、

一田沼玄蕃頭於御黒書院溜老中列座、

御下知狀奉書等大和守相渡、畢而於芙蓉之間列座同前、拜領物頂戴之、

○中
略、

廿六日、

御座間

大坂御定番

田沼玄蕃頭

出發ニツキ
賜謁

右近々發足ニ付、御目見、

〔高麗環雜記〕
○東京帝國
大學所藏本

二月十五日、

御座間

大坂の御暇

大坂御定番

田沼玄蕃頭

金十枚
時服五

右 御目見被下之、

御勝手より

大坂御定番引渡御暇

新番頭

山口勘兵衛

金三枚
時服二 羽織

右 御目見被下之、

〔表右筆言次〕
○内閣文
庫所藏本

二月八日、○中
略、

一田沼玄蕃頭、來ル十五日御暇之由、御禮書取扱、善八郎申聞候、○中
略、

九日、○中
略、

安政元年二月十五日

一三三

田沼意尊御
禮書ノ取扱

安政元年二月十五日

一三四

一大坂御定番田沼玄蕃頭（翁木、小繪戸）に被下之御黒印押伺、大和殿（翁木、小繪戸）に以榮次郎上之、來ル十三日可差上旨伺濟、奉附返上、○中略、

十三日、○中略、

一明後日御禮ふき支度達一置候、

一同斷渡大坂御定番田沼玄蕃頭（翁木、小繪戸）に被下、御黒印押相濟、下知狀御判も相濟候、繼手御印も濟、順ふくる可入御覽候事、

一玄蕃頭爲引渡罷越候、新番頭山口勘兵衛御暇（片山、奥谷）ハ明後十五日ニ候得共、御渡物ハ出立前々日ニ相成候旨、與八郎申聞候、依之明日御朱印白紙出一候ニ不及、奉書も廻スニ不及、尤出立日限治定候ハ、可申聞筈、

十四日、

一明日御禮ふれ十六通、善八郎（善八郎）に渡、御納戸斷川村惣五郎（善八郎）に渡、

一田沼玄蕃頭（善八郎）に相渡候下知狀、御判塗出來、入御覽仕廻置候、

一同斷證文壹通、御連印取置候、

一同斷奉書三通、伊勢殿（藤井、表右衛門）に廻之、明朝被下候様申上候、○中略、十五日、

左 助

黒印及下知狀ノ御判出來
引渡役山口勘兵衛御暇ノ件

田沼意尊ニ下知狀其他ヲ交付ス

一御禮相濟、

一今日御禮相濟、直ニ於御黒書院溜、大坂御定番田沼玄蕃頭（善八郎）に下知狀奉書證文月番大和殿御渡、御黒印ハ於御前頂戴之、今朝玄蕃頭（善八郎）に逢候ニ、奥之懸（善八郎）に玄蕃頭出候間、御黒印下知狀（善八郎）に二月十五日（善八郎）と認メ入候旨申、其通り認メ入候様、善八郎申聞候間、直ニ認メ入置候、御登城直ニ御黒印（善八郎）にのせ、三方（善八郎）ニ載、大和殿（善八郎）に以善八郎上之、頭書添、○中略、

十九日、

一京都・大坂・長崎飛脚永井岩之丞（永井、表右衛門）に渡、○中略、

大坂田沼玄蕃頭并山口采女、去ル十五日御暇、近々出立之志（善八郎）せ、

廿四日、

一明日渡り大坂御定番田沼玄蕃頭引渡ニ相越候、山口勘兵衛（善八郎）に被下候御朱印白紙、大和殿（善八郎）に以仙次郎（善八郎）出一置候、奉書二通伊勢殿（善八郎）に廻之、御判濟候ハ、明朝御城（善八郎）に被下候様申上之、罷出候様被御申、

〔御黒印下知狀之留〕○内閣文庫所藏本

嘉永七寅年二月十五日、

大坂御定番田沼玄蕃頭（善八郎）に御渡物

安政元年二月十五日

一三五

條目

不慮ノ儀ハ
三人ニテ協
議決定スベ
シ

定

一 忠義之志を專よし、城中を相守、若不慮之儀有之時も、三人相談之上を以萬事念を入、無私様よ可申付之、三人之儀といふよ及もす、大番頭・加番之輩よ至迄、一切城外に出へらざる事、

一 城中在番之外、證文無之輩、一切本丸・二丸に入るからさば事、

一 若於西國不慮之儀有之時、差當事は三人相談之上、存寄之旨連判を以可申付之、遅々よ及ひても不苦儀を、早速可相同事、

右堅可相守此旨、其外載下知狀者也、

嘉永七年二月十五日

御判取候節ハ、月日共明ケ置候る、判座懸紙致し、上ル、

上包同紙
上書中之通
充所計、

三名とのへ

(親直、土浦藩主、大坂城代)
土屋 采女正とのへ

(昌隆、武藏金澤藩主、大坂定番)
米倉 丹後守とのへ

田沼 玄蕃頭とのへ

一 御黒印并下知狀奉書共、不殘御暇之日附ゑる、御暇之日御渡し物へ、

下知狀

謀惡ノ輩ヲ
申告スベシ

條々

一 大坂御城中、就萬事、計策を以て惡事相頼む族於有之も、可申出之、領知又も金銀ふても、其約束之一倍御褒美可被下之旨、下々に至迄兼々可申聞事、

一 采女正・丹後守・玄蕃頭、町奉行與力同心并召仕之者共、縁邊之儀相互よ可申合、近國御譜代之面々家中之輩をりといふとも、其者を撰ひ、慥成ふたゐてハ、是又可相結事、

一 下々に至迄慥成者を撰ひ、可拘置事、

一 御城米之儀、入念手置可申付之、相定員數、貳拾萬俵之分、不足無之様み常々可改置事、

一 加番之面々御弓御鐵炮割渡し、手入いよさすへし、其外諸道具も常々改之、於令損も可拵置事、

一 御鐵炮之藥、入念不損様ふ可申付事、

一 御城近所并町方等火事出來之節、町奉行一人罷出、諸事可申付之、但、及大火候も、兩人共可罷出事、

一 攝州・河州・泉州・播州萬事仕置之儀、町奉行可申付之、和泉國堺奉行取計來候儀も、堺奉行可申付事、

火事ノ際ノ
心得

城米ノ手當
武器ノ手入

安政元年二月十五日

一三八

耶蘇宗門制
禁

武器移送ノ
心得

一 攝州・河州より出候女手形之儀、町奉行可出之事、
 一 耶蘇宗門堅爲御制禁之間、町中彌入念可相改事、
 一 町中切々遂穿鑿、不審成者不有之様、不可申付事、
 一 西國筋船御用之節、差當儀ふおゐてハ、不被 仰出以前より相談之上、近國に申觸、遅々
 無之様、可致、沙汰相延不苦時、致言上、御下知を可相待事、
 一 御鐵炮玉藥具足以下、何方にも急之御用、差遣し可然、わゐてハ、不及得 上意、相談
 之上可遣之、致遅々不苦節、其趣致言上、御下知を可相待事、
 一 不依何事、急檢使被遣之可然儀有之時、是又相談之上可申付事、
 右可被相守此旨者也、仍執達如件、

嘉永七年二月十五日

御黒印之通り、
御渡し之節、
月日書入之事、

紀伊守判 (内藤信興、老中)
 大和守判 (久世廣周、老中)
 伊賀守判 (松平忠盛、老中)
 和泉守判 (松平樂全、老中)
 備前守判 (牧野忠雅、老中)
 伊勢守判 (阿部正弘、老中)

上包
下知狀

御城代 土屋采女正殿
 御定番 米倉丹後守殿
 町奉行 田沼玄蕃頭殿
 石谷因幡守殿 (藤田)
 佐々木信濃守殿 (顯徳)

前廣御城代・御定番・町奉行
名前認、名順并別條無之哉、大目付に可問合事、

一筆令啓候、

公方様益御機嫌能被成御座候間、可被心易候、將又田沼玄蕃頭被下御暇、其許に被差遣候、
 依之 御黒印并下知狀持參之事候、萬端可被相談候、恐々謹言、

二月十五日 連判 (老中)

土屋采女正殿
 米倉丹後守殿
 近藤石見守殿 (致月、大番頭)

安政元年二月十五日

一三九

老中連署書
田沼意尊派
遣

安政元年二月十五日

遠山安藝守殿(景高、大番頭)

石谷因幡守殿

佐々木信濃守殿

同文言、恐々謹言、

大久保佐渡守殿(忠保、鳥山藩志)

四加番 内藤山城守殿(政文、擊莊藩志)

三宅對馬守殿(兼保、田原藩志)

井上筑後守殿(正和、高岡藩志)

前廣名順并當時別條無之哉、大目付に問合之事、

田沼玄蕃頭其許に被差遣候間、米津越中守御番所并與力同心可被引渡候、恐々謹言、

二月十五日 連判

米倉丹後守殿

山口勘兵衛
派遣

於其地田沼玄蕃頭爲引渡、山口勘兵衛被差遣候間、可被得其意候、恐々謹言、

二月十五日 連判

土屋采女正殿

米倉丹後守殿

近藤石見守殿

遠山安藝守殿

石谷因幡守殿

佐々木信濃守殿

同文言、謹言、

大久保佐渡守殿

内藤山城守殿

三宅對馬守殿

井上筑後守殿

覺

爲米津越中守跡役、田沼玄蕃頭被差遣候、越中守元組與力同心玄蕃頭に御預候間、彼御切
米御扶持方、向後玄蕃頭以裏判手形、如引付可被相渡候、以上、

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

嘉永七寅二月

證文二通共、御暇之時之月附之、御役成之月附之、あらず、

紀 大 伊 和 備 伊
伊 和 賀 泉 前 勢

大坂御藏衆

覺

御證文懸リニ出來、

一米三千俵

但、四斗入、

大坂御定番

田 沼 玄 蕃 頭

右之通、爲御役料、如書面被下候間、向後注引付、以直判手形可被相渡候、尤去丑冬御役料之於當地請取候間、當寅年より書面之通可被渡之候、以上、

嘉永七寅二月

紀 伊

大 伊 和 備 伊
和 賀 泉 前 勢

大坂御藏衆

御朱印

人足八人馬七足、從江戸大坂迄上下可出之、是を爲 御使、彼地山口勘兵衛被差遣付る被下之者也、

嘉永七年二月廿五日

御朱印ハ、當日當番之認る也、

右 宿 中

田沼及山口
出發

田沼玄蕃頭并右引渡山口勘兵衛、去十五日其地之被下御暇、近々當地發足之事、爲心得相達候、以上、

二月 日 連 名

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

土屋采女正殿
米倉丹後守殿
石谷因幡守殿
佐々木信濃守殿

渡物書付

ツマ
渡物書付

二月十五日、

御黒書院溜老中列座

田沼玄蕃頭

御黒印を於
御前頂戴之、

一下知狀 一通
一奉書 御城代
御定番頭
町奉行 一通
一奉書 加番に 一通
一奉書 米倉丹後守に 一通
一證文 大坂御藏衆に 一通

以上

ツマ
渡物書付

先例御渡物、
御定番御暇之日、
緒ニ渡候處、此度ハ
新番頭にも出立
前々日、別段ニ御渡
相成候間、渡物書付
列座無之出來、
尤懸合之上如此、

二月廿五日

御黒書院

列座無之
山口勘兵衛

奥より來ル

一上意之書付 一通
一得朱印 人馬 一通
一奉書 御城代
御定番頭
町奉行 一通
一奉書 加番に 一通
以上

來ル十三日御判押差上可申旨奉長候、

二月九日

藤井釜之助

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

伺

大坂御定番

田沼玄蕃頭

右被下候 御黒印、幾日頃 御判押差上可申哉奉伺候、以上、

二月九日

御黒印押候覺

奉大和守

嘉永七年二月十三日、

大坂御定番

一通

田沼玄蕃頭

一御黒印
右 御判押候事

黒印ノ處置

御判押之節、大美濃ニる例之通包、平紐ニるトンボウ結ニシテ、御黒印之箱に御代り共一同ニ入ル、箱之紐むそび候る、その間へ御黒印押書付挟と候る、奥御右筆を以上ル、御印濟下り候ハ、箱へ當番之組頭衆封印附仕舞置、御戸棚へ御黒印入置と張紙いとし置候事、

被下 田沼玄蕃頭

田沼玄蕃頭

上書 御黒印
御代りの方
上書 御黒印

御代

下知狀ノ處置

下知狀丸くぐるくと巻上也、同斷長薄ぶとニ入出ス、裏の方へ御判座之印附候る出ス事、認方可聞合事、

被下 田沼玄蕃頭

上書 下知狀

繼目裏御印共

下知狀御代りの方ハ奥へ不出、御役所ニ置、

但、上包同様之事、

一御黒印并下知狀被下之當朝、白木三方二つ出、一つハ小硯ふとをのせ、其上へ 御黒印をのせ、奥御右筆を以奥へ上ル、

但、小硯ふとハ、前廣御納戸を受取置候事、三方一つ之方々、御定番より借用致し度旨申越候間、のし遣ス、

一御定番へ渡り候奉書三通・證文二通一同ニ平紐ニる結、其脇へ下知狀も一同にいとし、角薄ふと一つへのせる、

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

一四八

一新番頭之御渡一奉書二通、御朱印一通、上意書付一通、右四通一同平紐之るむきひ、角薄ぶとのせる、

〔金銀裏書〕○内閣文庫所藏本

請取申拜借金之事

金三千兩

右去此度大坂に引越候ニ付、願之通拜借被 仰付候間、書面之通請取申候、返納之儀を來寅方亥迄拾ケ年賦之積、上納可申處、仍如件、

嘉永六丑年十二月

田沼玄蕃頭印

高橋義左衛門殿

蘆澤軍次郎殿

星野一郎兵衛殿

今井一郎左衛門殿

表書之金三千兩可被相渡候、斷て本文有之候、以上、

老中指令

紀 伊

病氣付無加印

大 和

伊 賀

和 泉

備 前

伊 勢

幕府、勘定吟味役竹内清太郎保徳○後下野守・同松井助左衛門ニ松前蝦夷地用

掛江戸取扱ヲ命ズ。

〔老中申渡〕○内閣文庫所藏本 諸用留所藏

○二月十五日勘定吟味役竹内清太郎等へ

扣、廻久世廣周、老中、大和守申渡候書付、

二月十五日、

御勘定吟味役

竹内清太郎

松井助左衛門

松前并蝦夷地之御用、當地ニ取扱可申候、

松前蝦夷地御用江戸取扱ヲ命ズ

右於新番所溜、伊勢守申渡、列座無之、

〔朱書〕右十五日持歸、伊勢殿に廻し出す、

安政元年二月十五日

一四九

〔村垣範正公務日記〕

○村垣範正所藏本

二月十五日、五時、出仕、○中略、

一竹内清太郎・松井助左衛門、松前蝦夷地之御用於當地取扱可申旨、於新部屋伊勢守殿被仰渡候、

米國使節「ペリー」、「マセドニアン」、Macedonian 艦長「アボット」Captain Abbot・艦隊參謀長「アダムス」Adams, the Captain of the fleet 等ヲ横濱應接所ニ遣シ、其齋ラス所ノ方物ヲ應接掛林輝等ニ贈ラシム。

〔米使應接掛林輝等上申書〕

○公館徳川園順所藏本
豆州下田港亞墨利加船所取

○二月十二日老中へ

アメリカ船方獻貢物差出候儀ニ付申上候書付

- 林 (尊、備忘) 大學頭
- 井戸 (長次、町奉行) 對馬守
- 伊澤 (政義、補氣奉行) 美作守
- 鵜殿 (長次、目付) 民部少輔

- 松崎 (純徳、備忘) 滿太郎

獻上品受領ノ日取

此度渡來之亞墨利加船方獻貢物、來ル十五日横濱應接場へ異人上陸持參仕度旨、使節方申立候間、私共一同同所へ出張仕候積御坐候、委細之儀去、右請取候上、可申上候得共、先此段申上置候、以上、

二月十二日

- 林 大學頭
- 井戸 對馬守
- 伊澤 美作守
- 鵜殿 民部少輔
- 松崎 滿太郎

〔米使應接掛林輝等上申書〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

○二月十五日老中へ

甲寅二月、

今十五日、亞米利加獻貢物差出候上付、私共一同横濱村應接所へ出張仕候所、使節ヘルリ
之不快之由申聞、名代として船將アボット、其外アアダムス以下、先日罷越候をの共不

横濱應接

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

一五二

殘相越、私とも應接談判仕、且獻貢物請取迄、將又御老中方御六人、私共五人へも贈物有之候、今日獻貢し付差出候横文字壹通、并獻貢之品目錄壹通、彼方願之品書壹通、翻譯出來し付奉差上候、御老中方へ差上候書類へ、翻譯出來次第猶又可申上奉存候、依之此段申上候、以上、

寅二月

- 林 大學頭
- 井 戸 對 馬 守
- 伊 澤 美 作 守
- 鶴 殿 民 部 少 輔
- 松 崎 滿 太 郎

〔米國特派使節へリ一書翰〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

○二月十五日米使應接掛林輝へ

甲寅二月十五日、

林大學頭様へ達之、

一我國主之命し寄、聊之獻貢物差出申候、右敢る價し拘り候儀し無之、緊要を專一といたし候品し有之候、

一我國主謹る推考仕候へ、世上近來大し變し、貴國人勢商賣盛し相成候へハ、方今發明肝要之品、貴國政府し於て試験可有之、就るハ其用方御明辨之爲、アメリカ之學士并職人差越候し付、貴國臣下し其器運用之傳授致し度候、恐惶、

合衆國作用 鋳船ホウハタン 船

江戸港横濱村し於て、

曆數一千八百五十四年三月十三日

東印度唐國日本海ふ在る使節

エム、セ、ヘルリ

右之通和解仕候、以上、

寅二月廿日

森山榮之助印
堀達之助印

〔川越藩主松平典則届書〕

○前橋市立圖書館所藏本
川越藩日曆所載

○二月十四日老中へ

明十五日巳刻頃、亞墨利加人獻貢物持參、横濱應接場に貳拾人余上陸致候旨、神奈川出張之浦賀奉行し達有之旨、同所出張之家來之者し申越候、此段致御届候、以上、

安政元年二月十五日

一五三

安政元年二月十五日

二月十四日

〔川越藩届書〕

○前橋市立圖書館所藏本
川越藩日曆所載

○二月十四日大目付

明十五日巳刻頃、亞墨利加人獻貢物持參、横濱應接場に貳拾人余上陸致候旨、神奈川御出張之浦賀御奉行様々御達有之旨、同所出張之家來之者々申越候ニ付、松平伊賀守様御届申上候、此段申上候、以上、

二月十四日

松平誠丸家來

加納 銓 次郎

(合同舶入相秘記)

〔川越藩主松平典則届書〕

○前橋市立圖書館所藏本
川越藩日曆所載

○二月十六日老中

昨十五日巳上刻頃、異人共獻貢物持參、横濱應接場に致上陸、未下刻頃引取候段、神奈川出張之家來之者々申越候、此段致御届候、以上、

二月十六日

松平 誠 丸

(合同舶入相秘記)

米人上陸

米人二百人
計上陸

〔彦根藩主井伊直弼届書〕

○東京帝國大學所藏本
如是我聞所載

○二月十五日老中

今巳ノ上刻比、アメリカ人獻貢物持參、横濱應接場へ二十人程上陸候旨、浦賀奉行達有之候段、家來之者々申越候、此段御届申達候、以上、

二月十五日

井伊 掃 部 頭

(彦根、會津藩主) (奥州、川越藩主)
但、右同文言ニ有、松平肥後守殿・松平誠丸殿より御達書出ル、

(異國船紀聞
安政元年記事)

○二月十六日老中

昨十五日、アメリカ人凡貳百人計上陸、獻貢物差出相濟、八時比々追々本船へ漕戻し候段、出張申付置候家來之者より申越候、此段御届申達候、以上、

二月十六日

井伊 掃 部 頭

右浦賀奉行方申越候ハ、二十人程と有之候處、十六日届ニ有、貳百人計と有之、按ルニ彼方へハ二十人計と申立置、其節ニ相成、多人數上陸、獻貢もの持運候由ニ相聞候、○如是
我聞

(異國船紀聞
安政元年記事)

安政元年二月十五日

〔忍藩主松平忠國届書〕

○内閣文庫所蔵本
通航一覽續編所載

○二月十四日老中へ

嘉永七寅年二月十四日、松平下總守御届、

明十五日四時、亞墨利加人獻貢物持參、横濱に上陸いふし候に付、神奈川驛伊澤美作守（或後、浦賀奉行）より達有之候段、同所に出張家來之者も申越候、此段御届申達候、以上、

二月十四日

松平下總守

○二月十六日老中へ

嘉永七寅年二月十六日、松平下總守御届、

昨十五日巳之刻頃、横濱に亞墨利加人上陸、獻貢物有之、未中刻頃相濟候旨、神奈川驛出張家來之者より申越候、此段御届申達候、以上、

二月十六日

松平下總守

〔江戸町名主上申書〕

○帝國圖書館所蔵本
徳川幕府書類外國事件書所載

○二月十六日町奉行へ

〔表紙〕

〔上〕

魚船問屋

米屋與右衛門船

上乘 久藏
同 直 吉

右一昨十四日仕立船なる、神奈川へ罷越、見張居候處、昨十五日晝四半時頃、異船が小船八艘程おろし、人數七八十人乗組、横濱に附、上陸いとし、猶又跡が小船三艘漕出し、横濱海岸迄參候處、風出雨強く降出し候に付、直に漕戻し申候、已前上陸いとし居候八艘之儀も、右同様追々漕戻し、異船元船へ夕七時迄に立歸り候を見留、此段御注進申上候、右奉申上候、以上、

二月十六日晝九時

名 主 共

〔米使應接掛町奉行支配組與力〕

浦賀御用日記

○帝國圖書館所蔵本
徳川幕府書類外國事件書所載

二月十四日、晴、夜雨、

一明十五日、彌獻貢物の差出候に付、御奉行衆五時御揃、此方共六半時揃なる可罷越旨被仰渡候、

二月十五日、雨、

安政元年二月十五日

井戸覺弘等
出張

「アダムス」
等出席

安政元年二月十五日

一五八

一今日五時御揃、横濱の御出、御奉行衆と、浦賀御船長津呂丸、御徒目付と、同千里丸、此方共、同日吉丸の乗組渡海いとし候事、

但、長津呂丸と、御座船之通御道具御飾付有之、千里丸・日吉丸と、バツテイヤ造り大船、八挺鱸水主貳拾人乗、中黒之御船印并帆相用候得共、御道具飾付と無之候、

一異人ブカナン・アーダムス其外貳拾人程御席に相通、獻貢之品并御老中方・大學頭殿〔井戸覺弘〕・御頭・美作守殿・民部少輔殿・滿太郎殿之呈上もの持参いとし差出、御菓子御料理被下候事、

〔神奈川日記〕

○明石藩士山本一政所録
東京帝國大學所藏本如是我聞所載

二月十五日、

一今巳刻、横濱へ異人上陸、獻上物致し、應接有之、

一バツテイヤ 廿七艘

一惣人數 貳百人餘

一嚙子方 壹組

〔亞墨理駕船渡來日記〕

二月十五日、二度目應接、異人凡四百人計上陸ス、行列等十日應接通り、今日、獻上物之内

獻上品略目

手重キ品不殘持參致ス、其荒増し、蒸氣車一組、但、未組立、保命小艇三艘、蘭名バツテイヤ、是ハ傳馬舟也、外を銅ニ而包ム、依之銅保命とも申候、色種々有之、大浪の中ニ而水ニ沈む事無之候故ニ保命と云、外ニ百姓農具一切、鋤鎌等仕掛有之、鎌の刃四尺も有之候、艸を刈り候時、其艸不殘一所ニ鎌の仕掛けニ留り、一束宛ニなり、甚タ便利の仕掛なり、鋤ハ火取十能の如き双金を付け、日本の鋤が都合よし、唐箕 唐臼 挽臼 萬石篩ドレン 礪石リウゴシ 龍吐水、何れも皆機連車ゼンマイ仕掛ニ而仕候、其外農具多シ、外ニ白酒の樽大小數多シ、廿六日處目録ニ記之、○中略、

十六日、今日ハ蒸氣小火輪車組立、且又外ニ天理關連符テレカラフ・千里鏡、右興行御内覽の場所等作事ニ懸申候、異人工匠五人、外ニ異人傳手多シ、○中略、

二十三日、蒸氣小火輪車組立出來、試ニ廻之、次ニ記ス圖之通、第一番の車を鐵火爐と申、小車左右ニ而八ツ、大車左右ニ而四ツ、合而十貳也、臺の上ニ乗セ有之候大筒の形の物は銅壺なり、中ニ左右え堅ニ仕切を致し、中の處ニ火ヲ燒ク、左右ハ湯ナリ、扱外輪の大車也、縁を引而内輪へ處々機連車ゼンマイの仕掛アリ、扱鐵火爐の上ニ並有之道器、合テ云ハ連筒八アテ言ハ、一番前を蒸氣箱と申而煙出しなり、二番目風鈴を漢名チテイトウレイ知丁東鈴也、湯の湧たるを知ル物也、湯湧ハ、湯出ス、三番の物ハ湯の氣を上げ吸イ上る器なり、湯を此吸上る時は、其湯氣ニ

蒸氣小火輪
車ノ組立
試運轉

安政元年二月十五日

一五九

引立れ、せんまいの仕掛け、車の前の方へ行様ニ廻ルなり、四番目ハ何の器か未知、五番ハ水を次添る物なり、是も車を後へ行時ハ、此物にて湯氣を吸上げさせ候得は、車後へ轉し廻ルなり、此湯氣を前後仕替の譯ハ、火の勢ニあらず、鐵火爐の外ニネジ機關有之、機連車前後え轉し申候、尤前の吸湯ヲ器の消息を留、後の器水指の方々消息を通ス、車行の前後者湯勢の湧回前後ニよる、鐵火爐ノ次ニ連煤炭と申ス有之、此車仕掛なし、臺の上は火燒の者世話スル處、中ハ水を貯處、其次ハ架連路ト云、人の乗る車なり、

「テレガラ
フ」ノ試験

廿四日、天連關理符・千里鏡試、ミニ興行仕候、仕掛ハ應接場の北の方え五丁計の處ニ、杉の柱を二十間も間を経て何本も立、場所都合ニよりに少々西の方え折曲、四丁計も右之通りニ杉柱を立、其柱の上ニギヤマンの壺を置き、針金を以、柱毎ニ彼壺を一ツ一ツニ卷キ、柱の立留ハ、洲干辨天前へ吉左衛門と申者の庭ニ、別ニ少し太キ柱を立、其柱の上ニ而留メ、下の方え引下げ、其の針金の餘り土中ニ埋ミ、土中ハ座敷の椽の下え埋ミ來、椽の下方引上げ、座敷ニは別ニ仕掛有之、其譯、下ニ三尺計の明箱を臺ニして、其上ニ仕出茶屋の百足臺ニ似たる物を置く、其臺の上ニ中央ニ機連車の附たる時計の如キ物有之、左右ニ同じ機連車の附たる物有之、百足臺の下ニギヤマンの壺七ツあり、中ニ酒の色の水八分程宛入、壺の口ハ細キ糸金一ツ一ツニ引、其糸金の惣統の處、土中ハ出る針金と合して、百足臺の

上の中央の時計の如キ物ニ及ヒ申候、應接場座敷、辨天前吉左衛門座敷、兩所機關の仕掛同斷、○扱應接場にて何ニなりとも申通度事有之候得は、其言語を申遣スニは、細キ紙ニ記ス、其紙を臺の上の左の機連車へ仕掛ぬ、中のせんまいの處ニ、鐘のイボを見る如キ物なり、指にて推ス、ふんどふ下る仕掛ニ而、せんまい廻り、紙ヲ右へ引込、針金氣消通ス、辨天前吉左衛門宅ニ而、臺の上中央のふんどふ下る、せんまい廻ル、左の仕掛せんまい右のせんまいえ細キ紙を引出ス、和YOKOHAMA、かよふニ紙ニ筋附出る也、通詞見而横濱ト云を知ル、JEDO かよふの筋附けて、江戸なる事を知ル、何ニ而も筆談の理同し、

〔亞米利加船渡來日誌〕

二月十五日、今日再應接トシテ異人四百人程上陸、行列等先日ノ如シ、此日ハ公儀へ献上物品々陸揚ス、中ニ保命艇一隻、(銅作リノバ)火輪車、(陸路人ヲ乗セテ疾ク走ルナリ)電信機、(針金ヲ何丁ニテモ引張、言語ヲ通ス)其他農具一式、鋤・鍬・唐箕・カラ臼・萬石篩・車仕掛ケノ礮石等ナリ、應接場物置へ御入レニ相成、

献上品ヲ應
接所ノ物置
ニ納ム

(條目) 知通曰ク、十四日夜、川崎領海岸出役秋葉金次郎殿ヨリ、明日應接ニ付、其模様見置トシテ同伴可致旨被申聞、其夜八ツ時頃宅出立、兩人ト小者壹人、保土谷宿神明大門ヨリ、戸部村通野毛山頂上ニ至リシ頃、稍明六時ニテ、碇泊船ニテ大炮一發打放シタル時ハ、不

安政元年二月十五日

一六二

意ニテ驚駭セシナリ、夫ヨリ野毛渡場ニテ、船頭小屋ニ見張ノ番兵へ申斷渡船、洲干ヨリ畑中道ヲ通り、横濱村出役詰所人家へ着、朝四ツ時頃駒形應接場へ罷越、程ナク異人ハツテエラニテ上陸ス、一番ニ音樂掛先着シ、夫ヨリ鐵炮組ノ兵士、船將ハ跡船ナリ、嘗テ十日應接ノ模様ハ粗承リシモ、音樂ノ拍子、鐵炮組ノ行列、能ク其指揮合圖ノ届キタル體、實ニ感入ニ不堪候、扱船將及都テ頭取トモ言人物、衣装ノ立派ナル事、目覺マシキ出立チニ相見ヘ候、豫テ應接掛御奉行方通詞方等、前十日ノ如ク御出張ノ由、支配役所ヨリハ田中第五郎殿・杉浦武助殿・山口茂左衛門殿モ先着有之、其他關東御取締出役關口園十郎殿・吉田倍平次殿・吉岡部助殿、臨時見置トシテ出張有之、而ルニ四ツ半時頃ヨリ雨降出シ、傘神奈川ヨリ取寄、雨ハ凌キ候得共、晝喰辨當間似合不申故、拙者ト大師河原内田左五右衛門(品川御臺場詰合中ニテ、田中第五郎殿ト同伴ノ由、)兩人空腹堪兼候故、横濱村取付ニ飴菓子酒等商店へ參リ、漸ク凌ヲ得候、尤村内人家ハ異人立入ヲ恐レ、戸ヲ鎖有之ヲ、押テ申入、酒喰致ス、後ニ聞ク、此家ハ(原見セト唱、離レ家ニテ、中山彌左衛門ト言人家アリ、)夫ヨリ再應接場へ來、雨止ミ東風烈シ、應接ハツ時頃相濟、異人は警衛場幕張ノ内、小笠原眞田兩家出張人數ノ案内ニテ所々遊歩行、椿ノ花・茶ノ花等ヲ探參リ、七ツ時頃、元船へ歸ル、此日、眞田家陣場奉行佐久間修理ト申人、馬乘ニテ駒形嘉平次ト申人家へ參リ居、繫置申しシ馬ヲ異人借り受、乘馬セシカ、

安政元年二月十五日

一六三

天晴騎馬ノ心得アリシト言、佐久間氏ハ年齢三十四五歳位、色白ク顔長ク、眼中尖ク鬚ヲハヤシ、黒羅紗ノ陣羽織ニ紺縞子ノ踏込袴着用、金作ノ大刀ヲ帶ヒ、一際目立テ立派ナル人物ナリ、能ク蘭語ニ通シ、故ニ異人ト通詞ナシニ言語ヲ交ヘ、又異人モ自ラ懇意スルノ體ナリ、支配出役ノ衆一同、七時頃ヨリ船ニテ神奈川旅宿倉本や方へ着、夫ヨリ秋葉氏同道歸村、渡田村太平方迄見送り、直ク歸宅ス、夜九ツ時頃ナリ、十六日、火輪車・電信機工匠ノ異人十人程上陸ス、組立ニ着手ス、略、○中廿三日、蒸氣車并傳信機取附仕上ケ出來セシニヨリ、應接小屋前ニ於テ運轉シテ、之レヲ日本役々へ一覽ニ供フ、其形チ一ノ車銅鐵ノ箱ノ如シ、烟出シ眞鍮ト銅ト二ツアリ、左右ニ車輪二ツ宛具シ、箱ノ如キ中へ湯ヲ湧シ、湯氣ノ勢ヲ以テ運轉ス、疾キ事矢ノ如シ、之レニ連列セル車ハ雨覆アリ、左右窓ハギヤマンヲ張、孰レモ同様ノ造リニシテ、其數凡十輛程ヲ列車シテ走ル、湯ヲ湧スニハ石炭ヲ焚用ユト云、之レニ乗車シテ往來セハ、一日ニ日本道百里餘ヲ通ルト言、實ニ不思議ノ器械ニテ、其工夫驚クニ堪タリ、號テ連碓炭架連路ト言由、

廿四日、今日傳信機ヲ試驗セントテ、異人上陸ス、應接場椽側へ器械臺据付、夫ヨリ三十間目毎ニ、松丸太柱長サ壹丈餘ヲ建、辨天前中山吉左衛門宅前迄、凡道長九丁餘之所張、銅ノ

太キ糸ヲ、柱ノ上ヘギヤマンノ臺ヲ乗セ、一ツ々々卷付ケ、其針金ノ糸ハ、吉左衛門宅前ニ器械据付所ヲ補理、扱其針金ノ末ヲ柱四本程ニ卷付、中央ニ分銅ノ如キ重リアリ、甲一方ニテ言語ノ文字ヲ、半鐘ノイボノ如キ物ヲ指ノ先ニテ押ストキハ、乙一方ヘ唱通シ、言フ所ノ文字ヲ指シテ當ルト云、假令ハ千萬里ヲ隔ル地ニテモ、針金サヘ及フ所ナレハ、音信迅速ニ應答スト云、實ニ工夫ノ極ト言ベシ、

〔亞墨理駕渡來日記〕

○公館藏川
國史所藏本

二月十五日、雨天、應接四百人計上陸、異人上陸之日、七百人・四百人と申書候得共、右之内舟方ノもの多く、半分餘ハバツテエラト申ス傳馬舟ニ残り、應接用事相濟候迄ハ、右之下官人ハ端舟ニ乘リ待居、

今日應接式ハ、十日之通り、今日獻上物之内、持上り候品、蒸氣車一組、是ハ車四ツ先ニ付、次ニ四ツ大車、次ニ小車四ツ、又四ツ小車、皆一同廻ル、右之仕かけハ、中ノ大車ヘ湯ヲ仕掛ケ、火ヲ燒ク、湯湧き揚る精氣よて、傳信機廻ルニ、外ニ百性之農具一式、鎌・鍬・風箕輪・連漏篩・回輪磨、此磨ハ車仕掛ケよて刃物礫物、端舟、蘭名ハバツテエラ、青色・黑色・赤色・連槳相添申候、是ハ今日獻上ニハ無御座候、只持上り、組立調練試みの爲ニ、委細ハ二十六日改メ獻上ノ由ニ候處、目錄アリ、

獻上品

〔神奈川 宿名主 間瀬源右衛門覺書〕

○改訂肥後藩
國史史料所藏

一今日、横濱ニ異人アータムス外凡拾七八人、ハツテ一ラ壹艘ニ乘來上陸、御組頭黒川嘉兵衛様・御徒目附・御小人目付・應接方與力同心衆・紅毛通詞衆被相越、右ハ異人より獻上之談判等有之候ヲ申事、(略)

二月十三日夜認

〔松代藩士小林重介上申書〕

○中村彌六所藏本
外交諸文書總所藏

○二月十七日松代藩へ

亞墨利加人ヨリ貢物并風聞書之寫、○外交諸
文書總所藏
合衆國貢物一條見聞書申上扣、○異國
筆記

亞墨利加人明十五日貢物差出候ニ付上陸、林家始メ諸御役人方應接、其他之風聞等委細見聞申上候由、被仰渡候付、即刻十四日出宅、昨夜中差急キ加奈川宿迄罷越候處、曉八半時頃日も罷成候付、即刻林家宿所ニ罷越、學頭河田八之助ニ參會、明日夷人上陸之儀ニ付、事情見聞いゝし度、且主人内命之議も有之、旁差付ケ間敷候へ共、林家御從者之内へ御加被下度と申入候處、八之助承り、御易き義ニ候處、此程十日應餘リ見物人等出、混雜之様子ニ有之如何ニ付、明日ハ一切見物相成不申旨、嚴重ニ御達し有之、與力同心等吟味

安政元年二月十五日

藩命ニヨリ
出張

安政元年二月十五日

一六六

いし候付、家來等へも其段急度申渡候程之義、且從者の内へ加へ候事も、人數ニ定限有之候へて出來兼、悴等召連候へとも、應接席上へ出候事ハ出來不申、尤林家内勢之内へ御加り、幕内外にて御見計ひ御見物不苦旨、且私壹人ハ祭酒公并御奉行衆と御同船いゝし參候處、悴并門人等ハ皆陸路參り候間、御一同御誘引可致旨申聞くれニ付、旅宿に罷歸り、無程夜明ニ罷成候付待付、途中迄同伴、横濱村増徳院迄罷越、支度いゝしける頃、上陸刻限も罷成候付、直ニ應接場へ罷越候處、丁度林家并御役人方船より御上り候處、少し扣居、總同勢之中へ入り込、休息所ニ暫時待居候處、半時程有之、夷人之下官共バツテイラ小舟ノ名にて追々乗り來、中官の者差添、献上物船ハ應接場へ持運候處、大小箱入の者、又ハ酒樽之由、陶物よて唐の腰懸よふの者數々有之、又箱ニ入レ不申異類異形之物、幾箱となく有之、就中蒸氣車と申物之由、陸上にて大銃と云々輕く持運候新工夫の由、三間ハ三四尺程之船ハ車次つけ候もの、矢張蒸氣之運轉いゝし候道具之由、右も獻貢いゝし候、都る之品、場中ニ置餘り候程に有之候、品々の名目尙追々承り可申上候、右貢物共バツテイラニ積、廿六艘と申事ニ御座候、

一右貢物大抵上り候頃、上官ヘルトよりハ上官と申事、ブカナン是ハフランス人よて、見物同船仕候ふと噂仕候、其外從官とも附隨ひ、例のおのしき音樂にて上り候、引續きゲベル組百人餘り二行ニ立並ひ、船より上り

あづら直ニ操練いゝり候、人數凡三百人程と申事、戎装いゝりも花屋のにて、頭に冠如此あ
る兜戎装いゝりも、紺羅紗の衣服よ淺黃羅紗の股引、股引餘程大あり、此方の裾やその如し候、白革のたそき至て
目立、立派ニ相見へ候、宰判役兩人ハ老人六十位に相見候、候處、馬如此猩々緋よ采配の
如きもの戎、前立物いゝし候處、六七寸程よ相見へ、一段花屋あることに有之候、此
兩人の指揮よ從ひ、筒の取廻しゝと、手足ハ勿論、進退左右いゝし候事ハ申迄も無之、暫
く調練にて場中へ入り申候、右音樂の子供三人有之、十二三才位よ相見へ候もの鼓吹い
ゝし候處、熟練の様子感心仕候、右之内壹人ハ、大將ベルリー悴之由御座候、ベルリーも
病氣爲加養、上陸可致趣いゝし候處、折悪く雨天、殊よ寒風ニ有之、延引仕候よし、前條の上
官ブカナンと副將アハタムス兩人、大將分上陸仕候、アハタムス五十歳位ニ相見へ候處、
人品も大將分らしく相見へ候、

一衣服ハ皆一樣よ筒ボウ袖、胸の處に勿論皆牡丹よて、色も黒戎上と仕候由、次ニ紺、次
よ淺きニ御座候、股引ニ片タツ、猩々緋の豎縞一筋入レ候もの兩人相見へ候、右も大將
分に、軍鑿よも候半と申候、衣服仕立ハ同様ニ相見へ候へとも、肩の處金の鎖多く御
座候、武功の印ニ御座候由、同官のよふよても、鎖の多少ハ御座候様ニ相見へ候、
一股引と申候へとも、矢張此方の裾細小袴いつきも、ひざと申ハ無之の類よて、右の下よ、めり屋上官ハ細

安政元年二月十五日

一六七

肢體

のよの股引、同じ足袋相用居候、杵ハ皆一樣波（波）にて、踵の處（波）は下駄の齒の如きもの一枚有之候のみ有之、右にて船ののり下り、山坂等をも、自在ニ駆走り候事ニ御座候、

煙草

一夷人とも皆丈長く候處、首と足ハ存外（足）は小ふりにて不釣合（足）有之、殊（足）は足ハ（足）と申如くよそ、申さハ鳥獸（足）は似候やうよそ、人畜の間と申さんも尤（足）有之、其上目も皆薄曇り茶色よそ、此方にて近眼と申もの、如く、鶏の目のよそみ候よふに有之候、肌膚も鳥の羽（足）抜むしり候跡の如く、傍を通行候も、犬の毛（足）逆まに撫候如き惡臭仕候、常に煙草（足）抜ハ至（足）好み候る、時（足）ふく吸候、丈三寸餘りの銅管（足）にて、眼首と申ものも無之、吸（足）ら咽（足）へ入り候るも聊（足）のまひ不申、火藥等帯（足）ひ居候るも平氣よそ相用申候、其上刻候ハ無之、皆葉烟草の様子にて、或ハ其ま、喰候も有之、此土の煙草（足）餘程厚く油（足）抜ぬり候よふある物ニ御座候、

下官ノ狼藉

一下官ども、（此方にて申候へハ、仲間又薦の者よ比し可申、）荷物の持運び等い多し候閑暇にて、頻り（足）は遠方迄も歩行い多し候間、農家へ入り、婦女（足）抜追廻し（足）ふど、婦女逃不申候へを抱き付候よし、此日も村中皆戸（足）抜（足）べ、隠れ居候儀（足）有之候、雨天にて泥足のま、座敷迄上り候事にて、何も迷惑い多し、且此節ハ追々潮干（足）よも罷越、婦女ハ常ニ貝（足）抜拾（足）ひ渡世（足）は仕候處、婦女ハ子供（足）ても一切濱邊へ出候事ハ不相成、殊の外難澁仕候旨申聞候、是ハ不便之事、村々の凶荒

上官ニ禮儀無シ

と被存候義ニ御座候、

一上官ハ諷（足）は歩行も不仕候へ共、禮儀ハ無（足）の如くは相見へ申候、必竟奴卒（足）ても豪強の者登庸、上官（足）と相成候と、自然と上下の差別（足）あき如く相成申候哉、聊も揖讓謙遜の様子ハ相見へ不申、詰り虎狼の群（足）と可申様は奉存候、下官とも、私共居候休息所へハ、立（足）のり入（足）のり入り數十人往來い多し、奉行衆の鎗（足）と鞘（足）を外（足）し、刃（足）の有無（足）試候へども、供人ども禁止も不仕候、い多しも緩怠（足）は過候御取扱と皆々申候、其上御役人衆供の内にて、胡麻鹽（足）つけ候握飯取出し遣し候へハ、日本飯（足）と、國語（足）抜申、歩行（足）のら啖申候、酒ハ殊（足）は喜び、料理所の口へ参りサケ（足）と申候あり、冷酒にて替々皆飲（足）は参り候事ニ御座候、一夷人渡來之儀ハ、通商交易地所借用所望之由は御座候所、御役人衆段々應對辨論（足）よそ御斷有之、以來ハ隣國の好と申廉（足）抜以、通信の義ハ御ゆるしと申風聞、尤船舶往來ニ付、石炭薪水等餘岐（足）あきものハ可遣との御約束にて、ペル（足）リーも承服仕候、貢物も差出候事、御受納有之候事（足）罷成候由、ヘル（足）リー申候、又好和（足）抜もむ（足）せ（足）ひ不申、通信迄も否と申次第に候ハ、兵力（足）抜以（足）可致戰鬪ハ、何時（足）ても不苦、聊（足）い多し不申、大分武も整候やうに見受候間、快く一獸（足）致（足）せも可然と申聞候由、傲言可惡と皆人申居候由、彌貢獻も相濟、通好の御内定ニ付、今日頃（足）は十七日（足）も候哉、本國並（足）は加勢の軍艦へ注進の多（足）也、蒸氣

應接ノ模様

船二艘差戻し候由、風聞仕候、加勢の軍艦と申は、暎佛二國の軍船の事にて、先頃より無人島小笠島と申候へ數十艘のり居候に付、右へあらせ引取らせ候次第のよし、虚實ハ如何御座候半、不相知候得共、都合ハ尤らしく相聞へ申候、尤先月廿五日、浦賀よてアハダムス上陸之節、右やうの傲言申聞候付、一トまつ御役人衆御歸府之上、尙又御評議よて、通信の義御取極メ、相成候哉之由、左様も無之一途、御斷りと申候ハ、只今頃ハ戰場とも罷成候半、とも風聞仕候、

一右之次第に付、別、御返翰御渡しし申御趣意も無之由、此上應接もまづハ無之由、但シ被下物ハ追る有之旨、此節ハ受取として、夷人共又々上陸可致旨風聞仕候、此度被下物の内白米貳百俵或ハ小苞よて貳萬俵とも申候との、右ハ相撲取り共の内へ被仰付、輕々と取扱、夷ヘワとし候様、被成候由、夷人下官共隨分形相應力有之候故、夫へ對し見セつけ候御仕方のよしに承り及申候、夷人共士俵取扱ひ候よ、此方よ、並人一人よて漸く上ヶ候、壹人よて兩手よ貳俵、輕く上り候、見のけ候旨、申もの御座候、

一夷人と和好相成候付、船中へ御役人衆相招き響應響申儀、近日之内有之旨、右に付、八之助に相頼、從者よ相加はり、見物ニ參り申度と存、懇望いゝ候處、人數限定有之、中々外人ハ一切參り候事出來不申旨申聞候付、甚望、甚失ひ、昨朝出立罷歸申候、横濱より小舟

相雇ひ、神奈川迄參り、途中、夷人共昨日獻上の品々取組として、十人程上陸の處、一見仕候、無程御奉行衆の御用船も出帆、應接場へ被參、取組之品御見分と申事ニ御座候、夷人の内、下官壹人病死いゝし、先頃十日埋葬の節、ゲベル七挺、三度打候處、増徳院武者御奉行本よ、承候者、皆三發打候のこ、と存居候處、後、見物いゝ候者よ承り候へ、七發一途に鳴り候付、一發のよふに相聞候義のよし、調子不違候處、條練條の至りと申事御座候、

一右通好之次第に付てハ、一トまつ太平の姿、罷成候處、兼る暎佛二國も交通、被望居候由に付、亞國へ御許容有之候ハ、魯西亞ハ勿論の次第に付、暎佛とも、又々渡來可仕、左候へ、太平安心と申場合、も參り不申、然れハ諸藩とも、只今の姿よてハ、一兩年の内、衰弊ハ眼前の事、想像いゝされ可申候、此上公邊の御處置如何と承り見申候處、何の深き、御廟算も有之御様子と申者も有之旨、承り及申候、此上之處如何可參哉、取々の風評仕候儀ニ御座候、右風聞之處認取、此段申上候、以上、

二月十七日

松代藩

小林重介

安政元年二月十五日

- 一 蒸氣車 一 揃
- 一 銅製之端舟但、書籍添、 貳 艘
- 一 子ウヨルク地名物産記
- 一 海濱之圖
- 一 不詳
- 一 天鵞絨 壹 反
- 一 エレキトルノテレガラーフ但、電之氣之有、事改告ル器械、 一
- 一 アメリカ産鳥類
- 一 合衆國地圖
- 一 天秤分銅量具 一 式
- 一 羅紗 一 切
- 一 臺附遠目鏡 一
- 一 香水類
- 一 銘酒 三 箱
- 一 茶 三 箱

一七二

- 一 火鉢 一
- 一 襟飾 五
- 一 馬上刀 十二 振
- 一 六挺仕懸短筒 一 挺
- 一 不詳
- 一 石版之繪
- 一 アメリカ産之酒 壹 樽
- 一 食用之品 壹 箱
- 一 書箱 十六 冊
- 一 道中用袋 二
- 一 鐵砲 三 挺
- 一 大燒方刀 六 振
- 一 短筒 二十 挺
- 一 種物 一 箱
- 御臺様い

安政元年二月十五日

一七三

一 鏡臺之類

一 白水類


一 花縫之絹物

右之亞墨利加語之儀なる差出候ニ付、猶重る調可申上候、以上、

寅二月

前之ケ條内、遺漏之分、

日本刀ト洋刀

一 此方の刀（新カ）抜い殊の外見多（新カ）り、衆人の中は一人立派の拵（職カ）い多し候哉、横へ居候處、抜き見セ候様仕形い多し候へとも、禁止の趣は手をふり候處、夷人自分帶し居候劔（新カ）拔ぬき、其人へ手渡し致し候付、已事拔得ば受取一見候上、おちらのも拔放ち見候處、氷の如く殊に見事ニ候故、夷人大は喜び、且少し打驚き、ケ程迄は有之間敷と存候様子（新カ）のよし、是ハ萬一鈍刀にて錆居候るハ、御國の恥に候處、幸の事と被存候、私居候處へ（新カ）參り候節、外の人劔拔ちて候處、直は拔爲見候故、私も手を取り能々見候へハ、あくの如、鏝先壹尺五六寸にて、焼刃よふのものも無之、金色ハ眞鍮の如く、尤重ハ厚く、重サも足輕術手と申もの三本のげ位有之、詰り切レ候ものには無之、舶來のゲヘル筒は附居候劔よりハ、更は鈍きものと相見へ候、

ピストル


洋犬

洋傘

米人一人上陸徘徊

一 劔ハ右の如可（新カ）姿ものよハ無之候處、腰（下官ともよ）も皆佩、服袋は入候下ケ居候ピストル、（新カ）蘭人持渡り候よりハ一層大く、餘程重みも有之、長さハ同様は候る、三發早打致し見セ候る、隨分手練のやうに被存候、下官ともハ上陸の節毎は、其役向より玉藥ともに相渡し、又歸船の時相收メ、取上ケ候よし、右作法に相居旨承及候、

一 夷人犬拔連れ來候處、俗は半狎と申もの、大サ位は有之、此日も二匹（壹匹ハ銀のやうなる喉咽輪有之）、上陸い多させ候處、頻りよふ、彼處駈廻り、石とへあけ小便抜い多し候、是ハ此方の犬と同様は有之、但し、容貞ハ狐は似候やうに存候、此土の犬よりハ用向能解し候由、右候へハ、兎角夷人ハ犬鳥拔相去候事、甚遠に非はと被存候事御座候、

一 傘ハ上官の外ハ不用候や、三百人の中は僅は四五人程見受け候、如此の形にて、黒き絹又青絹等にて張り立候もの、右へよふにて、そのし見候へハ、見へまき候様は有之、雨ハよく漏不申候、おし油抜引候もの哉、

一 鐵物ハ此方の如くにて、疊候節、此方にてハ輪拔りけ置候處、又鐵物にてメリつけ、唯ハ開き不申よふに相成居候、夷人の形は引合候るハ、小振りに相見へ申候、雨衣ハ此方の廻し合羽と申と同様は御座候、

一 十七八日の頃、夷人壹人神奈川宿へ上陸、江戸へ可參由にて、江戸へと申歩行候付、同心共跡より附參り、彼是諭し候へとも、承知不仕、いよいよ早走りよそ、皆息拔きり追の

け候へとも、及兼候處、其内途中臺場を見付ケ、大銃ふと手探い多し見居り候由、又山おとへ登り見廻し候付、漸々追付候へとも、跡へ戻り不申、無餘義附添参り、兼る人を走らせ、六郷川渡舟差留置候處、夷人頻りに手真よて舟拔呼候へとも、寄セ不申、流石の夷人も是よハ致る多無之、夫より大師原(河原)の方へ参、大師へ参詣い多し候由、冠ものふとハ脱候て、おのみ候よし、夫より此處彼處拔駆あるき、兎角江戸拔指さし、羽根田のあゝ廻り候由、左候へとも、渡舟ハ兼る差留有之ニ付、是非あく歸路ニ就候處、神奈川より舟に載、連のいり候處、夷人自身よて足ふとふせもみ、大よ弱り候様子ニ付、同心とも弱き仕ゐたい多し笑候處、彼も笑ひ候る、舟へ罷歸り候よし、是ハ夷人の中よても、勝れて疾足の奴と申事ニ御座候る、同心難澁察入候事御座候、

一廿一日、又々夷船一艘下田沖へ渡來、段々浦賀のあゝ参り、本牧沖よ有之候八艘の内へ入り候よし、其後八艘のうちより二艘、下田沖へ向ひ出帆候よし、右一艘参り候船ハ、八艘の船へ兵糧運送い多し候爲の由、又一艘下田邊へ向キ出帆ハ、兼る下田の邊よて地形見多て、地所借用の積りよて、見分として参り候とも風聞い多し候由、

○頭書

一夷人羽根田へ廻り候ハ、辨天の邊よ渡舟場あることを知りたるの、地圖よて心得たる

米船ノ去來

書頭

の、熟路の如し、可怪也、

一夷人の名ヒツテンテルと云由之、

(異國筆記)

〔村垣範正公務日記〕

(○村垣範正通所藏本)

二月十五日、五時、出仕、

○中略、

一神奈川應接少々六ヶ敷哉之由、今朝申來ル、

一同所ニ在、今日、獻貢物差上候事、

○中略、

十六日、例刻、

一昨日、獻貢物相濟候付、品書其外差出候書類、今朝、河内守方(松平近直)へ到來、伊賀殿(松平忠實)に上ル、後刻

右書類一同御下ケ、海防掛一座并大目付・御目付・江川太郎左衛門一同一覽、評議仕申上

候様被仰渡、於松溜評議有之、

此儀書類一覽之處、不容易事共ニ候へとも、今更致し方も無之、渠望之品々應接之向方遣候へハ、何品遣し候るも不苦、乍併金銀を相止度、其外應接之者へ御委任之廉ニ

安政元年二月十五日

一七七

獻貢物目錄
其他ヲ老中
へ上ル

可然、

御臺様の献貢物有之候へとも、右を受取候段間違にも可有之、當時不被爲在候段申遣候様ゆゑし、一同評決、明日、申上候積り、

〔安政甲寅日記〕

○帝國圖書館所蔵本

二月十六日、

一昨十五日、横濱なる、異人々獻上物御請取ニ相成申候、異人獻上物等、ハツテイラ廿七艘程なる、人數貳百人程上陸仕候由、獻上物相納メ、引續應接も御坐候由、「申立之个條御聞濟無之候ハ、御聞届相成迄、三年の四年なるも滞船仕候段、此間之申立ニ御坐候、然處、追々下掛合なる、種々申諭し、少しを納得之様子も相見候由、右ニ付、被下物拜見致候ハ、歸帆にも可相成哉と風説仕候、二月十六日、善、俊、

十七日、

一異人共下掛合致し、様々申諭候も、中々聞入不申、尤聊御敵對申上候存寄を無御坐、何分昨年之御返答睨と相伺候迄を退帆難仕、右様國王之命を請罷越候ニ、四五年相待候様杯と之事計なるも、難畏、左様御坐候ハ、何年御待申上候得と个様と之義、睨と相伺度、左も無之候ハ、いつ迄も御返翰御出來迄御待申上候様申立、中々動キ不申趣ニ御坐候、

米人納得ト
ノ噂

木下家足輕
出奔ノ咄

一明日又々應接御坐候趣、且異船が獻上品之内、蒸氣車と申ハ、陸なる相用候車之由、右取扱方承糺ニ、明日江川太郎左衛門神奈川に罷越候御沙汰ニ御坐候、「異人江戸之地處々致見物度、御城も拜見致度杯、兎角六ヶ敷事申立候由風聞ニ御坐候、二月十七日、善、俊、
一木下主計頭様御國抱之足輕、昨年夏中異船渡來ニ付、爲御用意御國が御呼寄ニ相成、當^(後方、彌後日出藩主)地之著之上、御手當金相願候得と、最早異船退帆ニ付、此後渡來も候ハ、其節可被下段、御役人々申渡置、此度渡來ニ付、御手當相願候得と、御渡方不相成、萬一御人數御差出にも相成、足輕共出張之時と、内廿八人の方ハ刀一腰ツ、貸被遣候間、別段御手當不被下趣申渡候處、御貸渡なるハ、萬一用立候節十分ニ遣方致度候ニ付、被下切ニ相願候由、御聞入ニ不相成旨申渡候處、左候ハ、何分にも御奉公難相勤、廿八人一統御暇申請退散仕り、細川様罷出、御召抱相願候旨申置、直ニ御屋敷を出と、去ル十日夜中、細川様御上屋敷西之御通用人^(口)に罷越、譯合申立候處、夜中ニ付取次難致旨、御門番嚴敷相斷候得と、翌十一日早朝、右御門へ罷越、御門番人々夫々申達し、御役人中吟味致候處、前條之譯合申立、何卒御召抱被下候様相願候ニ付、細川様御役人中評議之上、木下様御引取方御懸合之處、御屋敷に罷出相願候趣、木下家なる何等之申分無之候間、願之通御聞濟可被遣旨御挨拶ニ付、公邊に御届等ニ相成候得と、町奉行に御差圖ニ相成、直ニ町方に

安政元年二月十五日

一八〇

御召捕之上、御主人を見放相出さ候義ニ付、御吟味も不及、重キ御仕置相成候規定之由、右ニ付、細川様ニ御取扱方至る御困り之趣相伺申候、廿八人之内、貳人ハ立戻申候得共、殘廿六人々、何分申諭聞入不申、願之筋御聞届不被下候ハ、申合切腹仕候旨申居候由、木下様御家先年御事柄有之節、細川様ニ格別ニ御世話被遊候趣、夫々御本家位之御心得ニ御坐候旨風聞仕候、猶模様承繕可申上候、以上、二月十七日、俊、

〔墨夷應接録〕

○公爵藤川家達所藏本

二月十二日、通詞遣し候處、ヘルリより方物献上仕度旨、申出候、

十三日、都合次第献上物可仕候段、御許容之旨、申遣ス、日限等之儀も可取究様申遣ス、來

ル十五日、貢獻物仕度旨、申來る、此日、漢文一通、洋文一通、指越ス、二書別存、

十四日、彌明十五日貢獻物致候哉、且上陸人數等承了合を候事、

十五日、大學頭其外役々横濱へ罷越候處、九ツ時より、異人追々貢獻物持參致し、アフホツト・リー兩人司之、萬端世話仕候、是日ヘルリに上陸不仕、貢獻日録別存、

此日、ヘルリ・アータムスに上陸不仕候、此後もヘルリ・アータムス上陸之節、アフホツト・リー之兩人を船に残り居候、アフホツト・リー上陸之節、ヘルリ・アータムスに船に

残り居り申候、此アフホツトとヘルリと位階も同等之者之由ニ、服飾も同様ニ御坐候、

横濱應接
献上品揚陸

リーをアータムスと同様ニ御坐候、是ニ付相考候處、ヘルリ・アータムス上陸之節、若此方ニ伏兵ニるも致し置、使節等を打取候様之事御坐候時、直ニ船に残り居候アフホツトと、ヘルリに代り水師提督と相成り、リーをアータムス乃代りと相成候心組と被相察申候、
○本文中ニ、此日「アダムス」上陸セズトアルハ、誤ナリ。

〔通航一覽續輯〕

○内閣文庫所藏本

安政元甲寅年二月十二日、くれ方物献上を願ひし、同十三日、これを許容せらる、此日、くれ願望の趣意、漢文・洋文の二通を出せり、同月十五日、異人横濱より上陸して貢物を獻じ、時に役々同所に出張あり、うつ老中以下應接掛の輩もまゝと贈物差つけ、

〔水戸藩士 原田成徳日記〕

○公爵藤川家達所藏本

二月十六日、晴暖氣、夜少々雨、

老公御登城被遊候、老人明ヶ番、(原田)黒川を八兵衛貫候アメリカ食料 指渡し五寸位厚五分位パンを、

今朝津川伊平太を以入御覽候處、初る 御覽被遊候由ニ、直ニ御持參 老公へ入御覽候處、打のき被遊、御心味被遊候由ニ、(原田)當公ニも御心味被遊候由、間もあく召し候間、

出候處、船號・爵名等の書付讀聞セ候御意ニ付、津川不讀讀上入御聞、其外八兵衛、黒川を承來候事、荒々御咄申上候、其内御膳被召上候節、兵介食事ハ致候哉、また致を間敷、

安政元年二月十五日

一八一

徳川齊昭ニ
米國製パン
ヲ獻ズ

安政元年二月十五日

此平を遣し候間、用ひ候様、御意なる拜受を、四ツ時比、退出ス、
夕、肥後藩山三郎(津田)來訪、八兵衛談論を、

○頭書

蒸氣船フレカット異船一
種ノ名　　ポウハタン號船

右船主ノ名、エムセ、キリユネー、

同スエスクエハンナ號船

右船主役ノ名、ブカナン、

同シスシスシッピー號船

右船主役ノ名、レー、

フレガット軍船一
種ノ名　　マセドニアン號船

右船主ノ名、

マセードニアン號船

右船主ノ名、アブガット、

コルフエット軍船一
種ノ名　　ファンタリア號船

右船主役ノ名、ボーへ、

同レキシングトン號船

右船主ノ名、ガラスソン、

同サウタンボン、

右船主役ノ名、ユニウスボイレ、

水師提督ペルリ、

船主セスファンデンス名スタフ名アトタムス、
此者アメリ
カへ歸候由、

ロイテナント名アンキー名

二月十日、應接之節、上陸人數、

五百四十六人、

頭分十三人程、

大船四十六間三尺、

幅七尺餘、

小ノ方廿六間ノ由、

バツテイラカ上陸、直ニ行列を立候處、いよいよ速カ之由、

○被下菓子感伏之由、

安政元年二月十五日

安政元年二月十五日

一八四

○ヘルリを始異人共、ウスアカキツハヲ始終致、火鉢等へはきかけ候由、
右様之事申上候、

〔水戸茅根泰筆記〕

○公館徳川頭所藏本
鈴木大雅集所載

二月十五日、應接、此日ハ夷船カアイタムス上陸、此方カハ井戸對馬守・鶴殿民部少輔等之
由、此前日黒川カ井戸へ應接之義申聞候得ハ、拙者筆頭と申譯ハ有之間敷と迷惑之様子
テ申候故、夷將も第三等之アイタムスニ候得ハ、林君御出之筈ハ無之、貴君御立場にて可
然段申聞候ニ付、不得已出候由、此日ハ夷人カ獻上品等指上候、

〔鹿兒島安田義宜日史〕

○公館島津
忠重所藏本

二月十五日、異人貳百人計横濱ニ上陸、蒸氣車其外獻貢物差上候、

○齊彬公史料、マタ本書ト同一記事ヲ載ス。

○米國使節獻上品及贈品目錄其他ヲ次ニ收ム。

〔米國使節獻上品及贈品目錄〕

○公館徳川頭所藏本
豆州下田港亞墨利加船所載

獻貢品物目錄

各物獻

君主目錄

- 一 小火輪車格式、連煤炭架連路全副、
- 一 雷電傳信機一副、連銅線、
- 一 銅保命小艇一隻、頭尾有氣箱、不能沉水、
- 一 銅小艇一隻、能過大浪、不妨沉水以保命、
- 一 極幼花紅絨十九尺長
- 一 花紅剪絨一疋
- 一 玻璃銀蓋首飾箱一個
- 一 亞美理駕各處林禽圖傳、此圖、寫同生物同大共成九部、
- 一 亞美理駕嫻約省土產圖傳凡十六卷
- 一 亞美理駕合衆國大會館史記凡四卷
- 一 亞美理駕嫻約省大小會館日記
- 一 亞美理駕嫻約省律例
- 一 亞美理駕海濱埠頭各處地理圖、照圖便知水深淺水手埋岸、
- 一 農政二卷、內教耕田植樹養畜法則圖、
- 一 亞美理駕開國史記共四卷

安政元年二月十五日

一八五

林缺席トノ
噂